

土器・陶磁器觀察表(未実測分) 節

No	出土地点			数量	内 容		所在施設	調査年代		
	区画	遺構名	取上番号		特記事項	主要器種				
349	D-5	1	検出	162-163-164-178	4	251.8	赤付製品磁片	硝、且、漆地	肥前系	1600~1800
350	D-5	1	検出	162-163-164-178	4	23.2	磨輪赤付陶磁片	硝	肥前系	1600~1700
351	D-5	1	検出	162-163-164-178	4	32.1	青磁磁片	硝	肥前系	1600~1600
352	D-5	1	検出	162-163-164-178	4	3.5	赤付製品磁片	硝?	肥前系	1600~1700
353	D-5	1	検出	162-163-164-178	2	58.4	灰釉製品磁片	小石破	古・任那系	1700~1700
354	D-5	1	検出	162-163-164-178	2	4.7	山土土器、コハク土器磁片	土磁片	古・任那系	1860~1800
355	D-5	1	検出	162-163-164-178	2	130.3	灰釉+緑釉土、灰釉製品磁片	硝、漆、漆地	古代系	1810~1800
356	D-5	1	検出	162-163-164-178	2	19.5	磨輪赤付、赤付製品磁片	急須蓋地	古・任那系	1800~
357	D-5	1	検出	162-163-164-178	2	212.3	赤釉磁器 磁片	硝	不明	1800~
358	D-5	1	検出	162-163-164-178	2	5.2	灰釉磁片	硝	不明	不明
359	D-5	1	検出	162-163-164-178	1	483.9	土器磁片	硝、且、打明磁等	不明	不明
360	D-5	1	3号遺構	172	2	34.1	灰釉、鉄輪製品磁片など	硝、且、漆地	瀬戸系	1780~
361	D-5	1	3号遺構	172	4	50.7	赤付(手書き・刷印)製品磁片	硝、且、漆地	瀬戸系	1860~1800
362	D-5	1	3号遺構	172	2	78.8	鉄輪磁器 磁片	硝	肥前系	1780~1600
363	D-5	1	3号遺構	172	4	33.7	赤付製品磁片	硝、且	肥前系	1780~1800
364	D-5	1	3号遺構	172	2	45.7	鉄輪磁器 磁片	硝	肥前系	1810~1800
365	D-5	1	3号遺構	172	1	1.3	土器磁片	不明	不明	不明
366	D-5	1	1号遺構	175	2	15.5	灰釉磁片	手球形赤印?	古・任那系	1700~1780
367	D-5	1	1号遺構	175	2	2.0	刷目磁片	硝?	肥前系	1600~1740
368	D-5	1	埋	235	2	372.8	灰釉+緑釉、鉄輪成し木敷磁片	灰釉+緑釉、鉄輪成し木敷	瀬戸系	1800~1800
369	D-5	5	1号遺構	245	4	2.0	赤付製品磁片	硝文	肥前系	1600~1780
370	D-5	2	検出	180-190-206	2	34.8	灰釉+鉄輪刷付分付磁器片	鉄輪	瀬戸系	1780~1800
371	D-5	2	検出	180-190-206	2	223.3	鉄輪製品 磁片	硝、且、漆、漆地、硝、硝地	瀬戸系	1780~1800
372	D-5	2	検出	180-190-206	2	188.9	灰釉製品磁片	硝、且、漆	瀬戸系	1610~1800
373	D-5	2	検出	180-190-206	2	7.0	鉄輪+長石釉 磁器片	硝、且、漆、漆地	瀬戸系	1610~1640
374	D-5	2	検出	180-190-206	3	62.2	手摺赤付磁器片	手摺赤付磁器	瀬戸系	1780~1820
375	D-5	2	検出	180-190-206	4	66.1	赤付製品磁片	硝、且、漆地	瀬戸系	1800~1800
376	D-5	2	検出	180-190-206	2	476.0	灰釉、鉄輪製品磁片など	京焼灰釉磁器、硝、漆	肥前系	1600~1800
377	D-5	2	検出	180-190-206	4	442.1	赤付製品磁片	硝、且、漆地	肥前系	1600~1800
378	D-5	2	検出	180-190-206	4	81.9	青磁製品磁片	硝、漆地	肥前系	1600~1800
379	D-5	2	検出	180-190-206	4	8.8	磨輪赤付陶磁片	磨輪赤付陶磁	肥前系	1600~1780
380	D-5	2	検出	180-190-206	4	2.6	色釉磁片	漆物?	肥前系	1780~1600
381	D-5	2	検出	180-190-206	2	73.2	灰釉、鉄輪製品磁片など	小石破	古・任那系	1700~1800
382	D-5	2	検出	180-190-206	2	157.5	灰釉、漆地、刷印製品磁片など	硝、漆、漆地	古代系	1810~1820
383	D-5	2	検出	180-190-206	2	35.5	磨輪赤付、赤付製品磁片	急須蓋地	古・任那系	1800~
384	D-5	2	検出	180-190-206	1	210.6	土器磁片	漆地	不明	不明
385	D-5	2	検出	180-190-206	6	79.0	灰釉片	硝	不明	不明
386	D-5	2	検出	180-190-206	2	58.4	白土人形赤付磁器磁片	白土人形赤付磁器磁片	不明	1860~1800
387	D-5	2	検出	180-190-206	2	380.7	鉄輪製品 磁片	硝地	不明	1800~
388	D-5	2	1号遺構	200-204	2	75.6	灰釉、鉄輪製品磁片など	硝地	瀬戸系	1600~1800
389	D-5	2	1号遺構	200-204	4	49.9	赤付製品磁片	色釉磁片	瀬戸系	1800~1600
390	D-5	2	1号遺構	200-204	2	60.9	肥前系京焼灰釉陶器部分	肥前系京焼灰釉陶器	肥前系	1600~1600
391	D-5	2	1号遺構	200-204	4	54.9	赤付製品磁片	小皿、硝	肥前系	1800~1780
392	D-5	2	1号遺構	200-204	2	14.5	鉄輪、鉄輪磁片	且、硝?	古代系	1810~1800
393	D-5	2	1号遺構	200-204	1	56.8	土器磁片	不明	不明	不明
394	D-5	2	検出	225-229-231	2	143.2	灰釉、鉄輪製品磁片など	御笠系	瀬戸系	1600~1700
395	D-5	2	検出	225-229-231	4	10.1	赤付+色釉製品磁片	硝、漆	肥前系	1800~1800
396	D-5	2	検出	225-229-231	2	55.1	灰釉、鉄輪製品磁片など	硝、漆地	肥前系	1600~1740
397	D-5	2	検出	225-229-231	2	8.6	鉄輪+灰釉 小皿磁片	鉄輪+灰釉 小皿	肥前系	1610~1640
398	D-5	2	検出	225-229-231	4	54.4	赤付製品磁片	硝、漆地	肥前系	1610~1600
399	D-5	2	検出	225-229-231	4	35.2	青磁製品磁片	硝、漆	肥前系	1610~1600
400	D-5	2	検出	225-229-231	1	344.4	土器磁片 硝地	硝、漆、打明磁等	不明	不明
401	D-5	2	1号遺構	223-230	2	24.9	灰釉、鉄輪製品磁片など	硝、漆	瀬戸系	1780~1800
402	D-5	2	1号遺構	223-230	4	80.0	赤付(手書き・刷印)製品磁片	硝、漆地	瀬戸系	1600~1800
403	D-5	2	1号遺構	223-230	2	28.0	灰釉製品磁片	硝、漆地	肥前系	1600~1800
404	D-5	2	1号遺構	223-230	4	51.9	赤付製品磁片	硝、漆地	肥前系	1780~1800
405	D-5	2	1号遺構	223-230	2	4.6	灰釉製品磁片	小鉢	古・任那系	1700~1780
406	D-5	2	1号遺構	223-230	1	2.1	土器磁片	硝	不明	不明
407	D-5	2	検出	239-244	2	37.6	灰釉、鉄輪製品磁片など	硝、漆、小皿	瀬戸系	1610~1600
408	D-5	2	検出	239-244	4	3.2	灰釉磁片	硝、漆、小皿	肥前系	1610~1600
409	D-5	2	検出	239-244	1	42.3	土器磁片	硝地	不明	不明
410	D-5	2	1号遺構	238	4	8.5	白土人形赤釉 磁片	白土人形赤釉	不明	不明
411	D-5	2	集埋丁	243	2	58.5	鉄輪磁器 磁片	硝、漆	瀬戸系	1610~1640
412	D-5	2	集埋丁	243	1	25.8	土器	硝	瀬戸系	1570~1600
413	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	2	724.1	鉄輪磁器 磁片	鉄輪磁器	瀬戸系	1800~
414	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	2	172.2	灰釉、鉄輪、鉄輪製品磁片など	硝、漆、硝、硝地、硝地	肥前系	1780~1800
415	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	4	518.5	赤付、青磁、磨輪製品磁片	硝、且、漆、漆地	瀬戸系	1800~1800
416	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	3	32.2	手摺赤付磁器片	硝、漆地	肥前系	1780~1800
417	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	2	375.4	緑木土器、刷目磁片	三足緑木土器、刷目磁片	肥前系	1600~1800
418	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	4	133.2	染付、青磁製品磁片	硝、且、漆地	肥前系	1600~1910
419	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	4	136.5	色釉磁片	硝、漆地	肥前系	1780~1800
420	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	2	281.6	灰釉、鉄輪製品磁片など	硝、漆地	古代系	1810~1800
421	D-5	2	検出	001-003-005-012-016	2	30.9	磨輪色釉急須蓋	磨輪色釉急須蓋	古・任那系	1800~1840

土器・陶磁器観察表（未実測分）(7)

No	区	遺 跡 名	取 上 番 号	測 定 年 次	備 考	特 記 事 項	主 要 器 種	所 見 地	推 定 年 代
422	D-6	1 検出票	001-000-005-012-016	2	30.9	灰釉、鉄物製品破片など	磁器	宮・佐賀系	1700~1800
423	D-6	1 検出票	001-000-005-012-016	3	8.9	赤褐色陶片	赤褐色陶	万古系	1800~
424	D-6	1 検出票	001-000-005-012-016	4	14.2	赤付製品破片	磁器、銅?	宮・佐賀系	1800~1900
425	D-6	1 検出票	001-000-005-012-016	4	4.4	青磁破片	不明	不明	不明
426	D-6	1 検出票	001-000-005-012-016	2	120.9	灰釉、鉄物製品破片など	磁、鉄物	不明	1800~
427	D-6	1 検出票	001-000-005-012-016	1	159.7	土器破片	不明	不明	不明
428	D-6	1 検出票	001-000-005-012-016	4	28.3	白磁 破片	不明	不明	1800~
429	D-6	1 1号遺構	010	2	72.2	灰釉、鉄物破片など	磁、鉄物	瀬戸美濃系	1780~1800
430	D-6	1 1号遺構	010	4	385.5	赤付(磁胎中心)青磁製品破片	磁、皿、蓋、銅製片物	瀬戸美濃系	1800~1900
431	D-6	1 1号遺構	010	3	10.1	半磁赤付陶破片	青花文半磁、半磁陶	瀬戸美濃系	1780~1820
432	D-6	1 1号遺構	010	4	135.4	赤付製品破片	陶、磁器、漆、銅製片物	肥前系	1780~1800
433	D-6	1 1号遺構	010	3	23.0	半磁赤付陶破片	半磁赤付陶	肥前系或は尾	1600~1740
434	D-6	1 1号遺構	010	2	217.2	灰釉、鉄物製品破片など	磁器、鉄物	伊代系	1810~1900
435	D-6	1 1号遺構	010	2	35.8	灰釉製品破片	灰釉陶(唐台内?磨青)	伊代系	1810~1860
436	D-6	1 1号遺構	010	2	42.4	鉄物製品 破片	鉄物	不明	不明
437	D-6	1 1号遺構	010	1	110.1	土器破片	不明	不明	不明
438	D-6	1 3号遺構	006	4	2.8	色絵破片	蓋	瀬戸美濃系	1800~1900
439	D-6	1 3号遺構	006	4	23.4	赤付製品破片	磁、鉄物	肥前系	1780~1800
440	D-6	1 3号遺構	006	2	65.0	青釉+灰釉陶破片	竹筒+灰釉陶	不明	1800~
441	D-6	1 4号遺構	007	4	31.5	赤付製品破片	磁器	瀬戸美濃系	1800~1910
442	D-6	1 4号遺構	007	2	9.5	鉄物 破片	不明	不明	不明
443	D-6	1 4号遺構	007	4	16.5	赤付、青磁製品破片	磁物	肥前系	1600~1800
444	D-6	1 4号遺構	007	2	3.8	灰釉製品破片	磁	不明	不明
445	D-6	1 2号遺構	013	4	30.9	赤付、青磁、磁物製品破片	磁、灰物	瀬戸美濃系	1800~1900
446	D-6	1 2号遺構	013	4	1.2	赤付製品破片	磁?	肥前系	1600~1800
447	D-6	1 2号遺構	013	2	51.5	黒釉製品破片	鉢?	不明	不明
448	D-6	1 1号遺構	014-042-038	2	36.8	灰釉、鉄物破片など	磁、鉄物	瀬戸美濃系	1780~1800
449	D-6	1 1号遺構	014-042-038	4	23.9	赤付製品破片	磁、鉄物	瀬戸美濃系	1800~1910
450	D-6	1 1号遺構	014-042-038	4	2.4	赤付製品破片	磁	肥前系	1780~1800
451	D-6	1 1号遺構	014-042-038	2	8.1	灰褐色陶片	半磁赤付?	宮・佐賀系	1700~1780
452	D-6	1 1号遺構	014-042-038	4	9.4	青磁製品破片	青磁陶	三田系	1800~1900
453	D-6	1 1号遺構	014-042-038	2	10.0	灰釉破片	磁物	不明	不明
454	D-6	1 1号遺構	014-042-038	1	44.6	土器破片	不明	不明	不明
455	D-6	1 集落Tr	015	2	3.8	灰釉破片	磁?	瀬戸美濃系	不明
456	D-6	1 集落Tr	015	4	18.2	赤付製品破片	磁物	瀬戸美濃系	1800~1910
457	D-6	1 集落Tr	015	4	36.7	赤付製品破片	磁、漆物	肥前系	1780~1800
458	D-6	1 集落Tr	015	1	6.8	土器破片	不明	不明	不明
459	D-6	1 1号遺構	052	2	62.1	灰釉、鉄物破片など	磁、皿、色磁器	瀬戸美濃系	1680~1800
460	D-6	1 1号遺構	052	4	218.7	赤付、色絵、磁物製品破片	瀬戸美濃系	1800~1900	
461	D-6	1 1号遺構	052	3	24.9	半磁赤付陶破片	磁、皿	瀬戸美濃系	1780~1820
462	D-6	1 1号遺構	052	4	43.2	赤付製品破片	磁、磁物	肥前系	1600~1800
463	D-6	1 1号遺構	052	2	57.4	灰釉、鉄物破片など	磁、漆物	宮・佐賀系	1700~1800
464	D-6	1 1号遺構	052	2	96.4	灰釉、鉄物、白磁破片など	磁器	伊代系	1810~1900
465	D-6	1 1号遺構	052	2	34.8	灰釉製品破片	土磁	伊代系	1810~1900
466	D-6	1 1号遺構	052	2	19.7	白水土磁破片	白水土磁	尾?	1800~1910
467	D-6	1 1号遺構	052	2	61.7	鉄物 破片	磁器、鉢?	不明	不明
468	D-6	1 1号遺構	052	1	77.0	土器破片	土器破物	不明	不明
469	D-6	2 検出票	019-022	2	57.2	灰釉、銅物破片など	陶、土磁物	瀬戸美濃系	1600~1800
470	D-6	2 検出票	019-022	3	57.4	半磁赤付陶破片	半磁赤付陶	瀬戸美濃系	1780~1820
471	D-6	2 検出票	019-022	4	129.8	赤付(手書き~銅製)製品ほか	磁、皿	瀬戸美濃系	1800~1910
472	D-6	2 検出票	019-022	4	271.4	赤付製品破片	大皿、鉢、磁物	肥前系	1600~1800
473	D-6	2 検出票	019-022	4	170.2	白磁 破片	白磁(唐木鉢?)	肥前系	不明
474	D-6	2 検出票	019-022	2	279.3	灰釉、鉄物、白磁破片など	磁器、鉢、磁物	伊代系	1810~1900
475	D-6	2 検出票	019-022	3	21.1	灰釉+灰釉 破片	不明、漆物	宮・佐賀系	1700~1800
476	D-6	2 検出票	019-022	2	1.9	赤磁片製品破片	加須	赤清系	1800~
477	D-6	2 検出票	019-022	2	49.6	鉄物、鉄物破片	不明	不明	不明
478	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	2	282.9	灰釉、鉄物製品破片など	磁、皿、蓋物	瀬戸美濃系	1650~1800
479	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	4	183.1	赤付(手書き~銅製)製品ほか	磁、皿、蓋、漆物	瀬戸美濃系	1800~1910
480	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	2	175.6	灰釉、鉄物、陶毛目破片など	京焼風陶器、磁器、陶毛目片鉢	肥前系	1600~1800
481	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	4	291.3	赤付、青磁製品破片	磁、皿、灰磁器	肥前系	1600~1800
482	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	2	48.9	灰釉製品破片	赤付製品	宮・佐賀系	1700~1780
483	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	2	43.4	赤水磁土製破片	赤水磁土製	宮・佐賀系	1700~1800
484	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	2	47.1	灰釉、鉄物破片	磁、漆	伊代系	1810~1860
485	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	4	2.8	青磁製品破片	青花器	三田系	1800~1900
486	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	2	32.6	鉄物、白磁破片など	磁器、鉢?	不明	不明
487	D-6	2 調査Tr	027-028-032-005-006-060	1	46.5	土器 破片	土器破物	不明	不明
488	D-6	2 1号遺構	944	2	26.0	灰釉、鉄物破片	磁物	瀬戸美濃系	1780~

土器・陶磁器観察表（未実測分）(8)

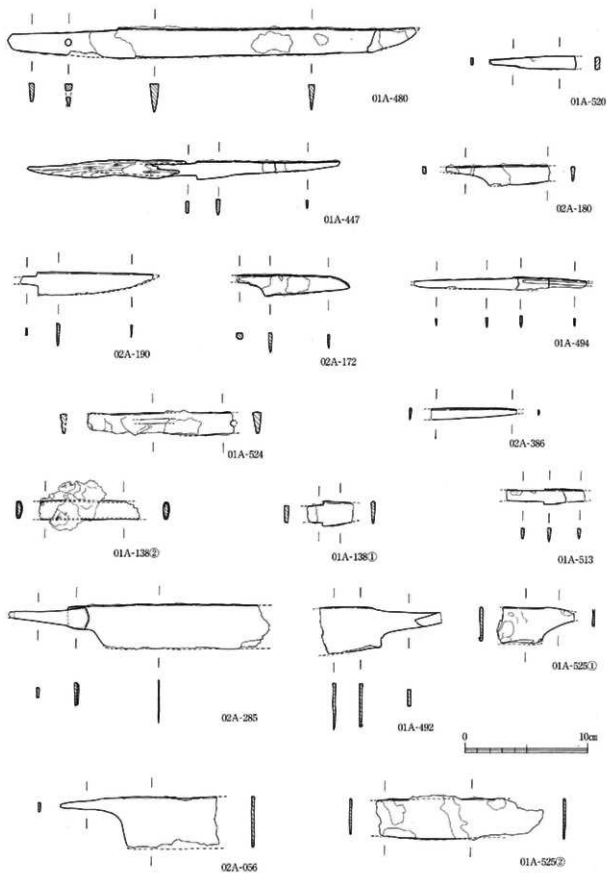
No.	出土地点		層別	数量	器名		内容	所見			
	区画	番付名			取上番号	器記事項			主要器種	鑑定所地	鑑定年代
489	D-6	2	1号遺構	044	4	278.5	陶付(手香き一編製)磁器口土	磁、皿、飯器、飯器	瀬戸美濃系	1850~1920	
490	D-6	2	1号遺構	044	4	48.0	陶製器皿、碗	磁、皿、飯器、飯器	瀬戸美濃系	1850~	
491	D-6	2	1号遺構	044	4	48.3	陶付製品磁片	磁、皿、飯器、飯器	瀬戸美濃系	1780~1860	
492	D-6	2	1号遺構	044	4	17.3	包胎(半)土瓶	包胎(半)土瓶	瀬戸美濃系	1690~1860	
493	D-6	2	1号遺構	044	2	11.6	包胎(半)土瓶	包胎(半)土瓶	瀬戸美濃系	1650~1690	
494	D-6	2	1号遺構	044	2	11.6	包胎(半)土瓶	包胎(半)土瓶	瀬戸美濃系	1810~1920	
495	D-6	2	10号遺構	055-063	2	26.9	陶製、鉄製磁片	陶、土、飯器	瀬戸美濃系	1780~1860	
496	D-6	2	10号遺構	055-063	3	8.9	平磁土文瓶	平磁土文瓶	瀬戸美濃系	1780~1820	
497	D-6	2	10号遺構	055-063	2	11.8	陶製磁器片	磁	瀬戸美濃系	1610~1650	
498	D-6	2	10号遺構	055-063	4	55.0	陶付磁器片	磁、皿	瀬戸美濃系	1650~1860	
499	D-6	2	10号遺構	055-063	5	8.9	赤水磁土磁片(長石質系)	不明	京・信濃系	不明	
500	D-6	2	10号遺構	055-063	1	120.6	表面灰色珪質口縁磁片(瓦質)	不明	不明	不明	
501	D-6	2	4号遺構	068	1	30.1	土器皿	皿	不明	不明	
502	D-6	2	7号遺構	065	2	5.9	鉄製磁片	鉄、磁	瀬戸美濃系	1650~1750	
503	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	421.7	鉄製磁器	磁片	土瓶、碗、皿他	瀬戸美濃系	1780~1860
504	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	25.8	鉄製土目皿	磁片	鉄製土目皿	瀬戸美濃系	1650~1780
505	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	663.7	鉄製、銅製磁片金斗	銅製茶碗、陶、土瓶、仏飯器、水筒他	瀬戸美濃系	1650~1860	
506	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	4	448.0	陶付、青磁磁器片	磁片	陶、皿、飯器、飯器	瀬戸美濃系	1800~1910
507	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	4	44.4	浅小(形)陶付茶立磁片	浅小(形)陶付茶立	瀬戸美濃系	1800~1860	
508	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	518.7	鉄製磁器	磁片	磁器系	1780~1860	
509	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	277.4	二彩、磁毛目、鉄胎、鉄胎、磁器製品	磁、皿、鉢、鉢、飯器	肥後系	1650~1860	
510	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	4	667.3	陶付、青磁磁器片	磁、皿、飯器、飯器	肥後系	1690~1860	
511	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	4	10.9	白磁土文瓶	磁片	肥後系	1650~1650	
512	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	4	8.9	色絵磁	磁片	肥後系	1650~1690	
513	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	215.8	鉄胎、鉄胎磁片金斗	磁、皿、飯器	京・信濃系	1700~1860	
514	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	10.4	赤水磁土磁片	磁	京・信濃系	1780~1860	
515	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	78.1	磁輪土瓶	磁片	京・信濃系	1780~1860	
516	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	10.4	山水土文瓶	磁片	京・信濃系	1800~1910	
517	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	20.4	鉄胎磁器	磁片	丹波系	1800~1860	
518	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	333.1	鉄胎、鉄胎、銅製磁片金斗	鉄、皿、飯器	信浓系	1810~1830	
519	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	6.2	漢唐什物製品磁片	磁器	常滑系	1800~	
520	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	5	12.0	彫彫、漢唐製品磁片	磁器	常滑系	1800~	
521	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	2	141.4	鉄胎、鉄胎磁片金斗	汁次茶、鉢、碗	不明	不明	
522	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	1	641.3	土器磁片	磁器他	治造、灯明器等	不明	不明
523	D-6	2	検出器	029-021-043-048-068-121-139	6	273.1	土器片	磁片	瓦	不明	不明
524	D-6	2	検出器	000	2	20.8	陶胎(手香き)分付磁片金斗	陶、碗	瀬戸美濃系	1780~1860	
525	D-6	2	検出器	000	4	13.7	白磁	磁片	瀬戸美濃系	1800~1860	
526	D-6	2	検出器	000	2	250.6	包胎(半)土瓶、磁毛目鉢、磁器片	包胎(半)土瓶、磁毛目鉢、磁器	肥後系	1650~1860	
527	D-6	2	検出器	000	4	18.0	陶付磁器片	陶付磁器片	肥後系	1900~1780	
528	D-6	2	検出器	000	4	31.9	陶付磁器	磁片(大田成化半瓶、鉢)	肥後系	1650~1690	
529	D-6	2	検出器	000	4	26.3	陶付製品(手香き一編製)磁片	陶、飯器	肥後系	1650~1910	
530	D-6	2	検出器	000	1	15.1	土器磁片	皿	不明	不明	
531	D-6	2	検出器	056-061	2	373.6	陶胎、鉄胎、銅製磁片金斗	磁片、磁器、磁器、磁器、磁器	瀬戸美濃系	1780~1860	
532	D-6	2	検出器	056-061	4	40.4	大津石文打合付皿	磁、皿、飯器、飯器	瀬戸美濃系	1850~1870	
533	D-6	2	検出器	056-061	2	128.0	包胎(半)土瓶、磁毛目鉢、磁器片	陶、皿、飯器	肥後系	1650~1780	
534	D-6	2	検出器	056-061	4	100.2	陶付製品磁片	陶、皿、飯器	肥後系	1780~1860	
535	D-6	2	検出器	056-061	2	14.9	包胎(半)土瓶	包胎(半)土瓶	肥後系	1650~1750	
536	D-6	2	検出器	056-061	2	24.7	鉄胎磁器片	陶、土、飯器	京・信濃系	1700~1780	
537	D-6	2	検出器	056-061	2	6.6	鉄胎磁器	磁片	信浓系	1810~1920	
538	D-6	2	検出器	056-061	2	51.4	鉄胎(鉄胎、鉄胎)	磁片	不明	1780~1860	
539	D-6	2	検出器	056-061	1	177.8	土器磁片	磁器、灯明器等	不明	不明	
540	D-6	2	検出器	066	2	260.3	鉄胎、鉄胎、銅製磁片金斗	磁片、磁器、磁器、磁器、磁器	瀬戸美濃系	1650~1860	
541	D-6	2	検出器	066	4	180.9	陶付製品(手香き一編製)磁片	陶、皿、飯器、飯器、水筒他	瀬戸美濃系	1800~1920	
542	D-6	2	検出器	066	2	45.6	包胎(半)土瓶、磁毛目鉢、磁器片	陶、皿、飯器	肥後系	1650~1860	
543	D-6	2	検出器	066	4	300.4	陶付製品磁片	陶、皿、飯器	肥後系	1690~1860	
544	D-6	2	検出器	066	2	31.8	鉄胎磁器片	不丹碗、土瓶他	京・信濃系	1700~1920	
545	D-6	2	検出器	066	2	19.4	包胎(半)土瓶	包胎(半)土瓶	信浓系	1810~1920	
546	D-6	2	検出器	066	2	23.4	赤土(赤土)製品	磁器他	不明	1800~	
547	D-6	2	検出器	066	1	167.1	土器片	灯明器、磁器	不明	不明	
548	D-6	2	1号遺構	067	2	62.2	鉄胎、鉄胎磁片金斗	陶、磁器	瀬戸美濃系	1650~1860	

土器・陶磁器觀察表（本実測分）(9)

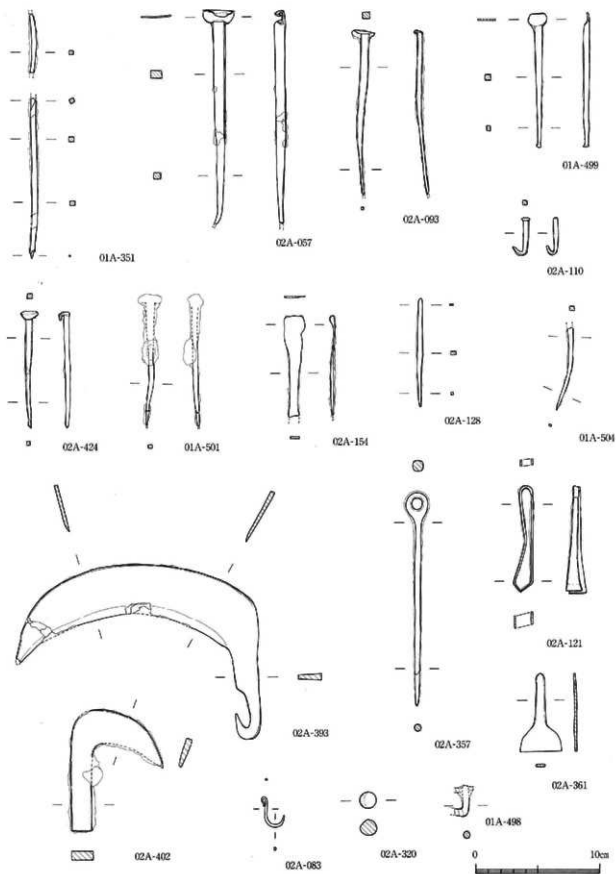
No	出土地点		数量	内 容		出 所	出 土 年 代
	区 画	遺 蹟 名		記 録 事 項	主 令 器 種		
549	D-6	1号遺構	067	4	4.8 陶片製品片	甕、甕覆物包	瀬川系 1300-1600
550	D-6	1号遺構	067	2	81.9 灰輸、鉄馬目破片	鉄馬	肥前系 1550-1800
551	D-6	1号遺構	067	4	35.8 泰付、増殖製品破片	陶磁	肥前系 1600-1800
552	D-6	1号遺構	072	2	110.9 灰輸、鉄胎製品破片全斗	灰白土、管筒、小甕、陶磁	瀬川系 1610-1780
553	D-6	1号遺構	072	2	101.9 灰輸、鉄胎、菊毛破片全斗	陶、磁、甕	肥前系 1650-1740
554	D-6	1号遺構	072	4	230.4 泰付、青磁、白磁製品破片	陶、磁、甕	肥前系 1610-1780
555	D-6	1号遺構	072	2	31.4 灰輸+灰輸、灰輸、緑釉破片	甕	豆-信安系 1700-1800
556	D-6	1号遺構	072	6	33.5 瓦破片	瓦	不明
557	D-6	検出区	071-081-082	2	21.9 灰輸、鉄胎、長石釉破片全斗	灰、灯明筒	瀬川系 1610-1780
558	D-6	検出区	071-081-082	2	130.6 灰輸、鉄胎、鉄胎製品破片全斗	水筒、甕、破片	肥前系 1600-1740
559	D-6	検出区	071-081-082	2	130.6 製磁印粘土破片	製磁印粘土破片	肥前系 1600-1740
560	D-6	検出区	071-081-082	4	132.8 泰付、青磁、鉄胎製品破片	陶、磁、甕	肥前系 1600-1800
561	D-6	検出区	071-081-082	2	8.7 灰胎色鉄胎破片	甕	豆-信安系 1700-1780
562	D-6	検出区	071-081-082	1	203.3 土器破片	灯明皿	不明
563	D-6	調査区	073-080	2	4.6 灰輸 破片	灰瓦鉄胎	瀬川系 1610-1780
564	D-6	調査区	073-080	4	14.8 泰付、青磁製品破片	瀬川系破片	瀬川系 1800-1910
565	D-6	調査区	073-080	4	4.1 泰付製品破片	甕	肥前系 不明
566	D-6	調査区	073-080	2	30.6 灰輸 青木炭土製破片	甕	信安系 1700-1800
567	D-6	調査区	073-080	1	31.6 土器破片	不明	不明
568	D-6	調査区	073-080	4	4.0 焼物土器破片	茶生土(器清水)	在地系 弥生時代後期
569	D-6	検出区	075	2	156.4 灰輸、鉄胎製品破片全斗	陶、磁、燗鉢	瀬川系 1610-1780
570	D-6	検出区	075	2	7.9 灰胎+長石釉 破片	土野小皿	瀬川系 1600-1650
571	D-6	検出区	075	4	6.0 泰付製品破片	瀬川系	瀬川系 1800-1860
572	D-6	検出区	075	2	8.8 灰輸、鉄胎、菊毛破片全斗	陶磁	肥前系 1650-1740
573	D-6	検出区	075	4	73.7 泰付、青磁製品破片	陶、甕	肥前系 1600-1780
574	D-6	検出区	075	2	3.9 灰輸 破片	甕	信安系 1610-1650
575	D-6	検出区	075	2	165.6 灰胎 青木炭土製破片	甕	信安系 1700-1800
576	D-6	検出区	075	2	7.3 赤土-粉製品	甕覆物?	不明 1800-
577	D-6	検出区	075	5	12.8 灰胎製品	甗鉢	不明 不明
578	D-6	検出区	075	1	95.1 土器破片	管筒、灯明筒等	不明 不明
579	D-6	調査区	078	2	3.5 灰胎粘土目 破片	鉄胎灰土目	瀬川系 1610-1650
580	D-6	調査区	078	4	6.5 泰付(粉胎)製品破片	甕	瀬川系 1880-1910
581	D-6	調査区	078	1	70.6 土器破	灯明皿	不明 不明
582	D-6	検出区	088-091	2	61.1 鉄胎製品 破片	甗鉢、取?包	瀬川系 1610-1780
583	D-6	検出区	088-091	4	21.0 泰付製品破片	陶、甕	肥前系 1780-1800
584	D-6	検出区	088-091	1	91.8 土器破片	灯明皿	不明 不明
585	D-6	調査区	086	2	2.8 灰胎+緑胎色土破片	鉢?	瀬川系 不明
586	D-6	調査区	086	2	30.9 瓦地黒陶器破片	鉢?	肥前系 1600-1600
587	D-6	調査区	086	4	6.6 泰付製品破片	甕?	肥前系 不明
588	D-6	調査区	086	1	120.1 土器破片 渣物	燈籠、灯明筒等	不明 不明
589	D-6	塚	095	2	8.9 長石釉?破片	土野小皿?	瀬川系 1610-1650
590	D-6	塚	095	4	8.1 泰付製品破片	陶筒	瀬川系 1860-1910
591	D-6	塚	095	2	73.4 灰胎(緑胎?赤土?)破片	甕?	在地系 1780-
592	D-6	検出区	096-101-104-111	2	236.7 鉄胎破片 破片	鉄胎破片	瀬川系 1610-1650
593	D-6	検出区	096-101-104-111	2	17.3 灰胎+長石釉製品破片	鉄胎+長石釉	瀬川系 1610-1650
594	D-6	検出区	096-101-104-111	2	6.3 鉄胎製品破片	不明	瀬川系 不明
595	D-6	検出区	096-101-104-111	1	156.5 土器破片	灯明皿	不明 不明
596	D-6	検出区	096-101-104-111	1	128.8 土器破	中皿	不明 不明
597	D-6	調査区	107	2	60.3 灰輸、鉄胎破片	鉢、甕	肥前系 1610-1650
598	D-6	調査区	107	2	7.0 灰胎(白化土?)破片	鉢	瀬川系 1610-1650
599	D-6	塚	129-136	4	67.9 灰胎(黄泥?)、鉄胎破片	陶、甕	瀬川系 1610-1650
600	D-6	塚	129-136	4	67.9 泰付、鉄胎製品破片	陶	肥前系 1600-1650
601	D-6	1号遺構	102	1	103.3 土器破片 赤土	破片	不明 不明
602	D-6	2号遺構	228	2	8.9 灰胎(白胎?)管(赤土?)破片	管筒	瀬川系 1650-1600
603	D-6	検出区	143-154	2	4.9 長石釉製品破片	長石釉製品	瀬川系 1260-1410
604	D-6	検出区	143-154	2	2.4 泰付(粉胎)製品破片	鉢?	瀬川系 1880-1910
605	D-6	検出区	143-154?	2	2.9 灰胎+灰輸 小甕破片	磁造甕	肥前系 1360-1810
606	D-6	検出区	143-154	2	142.9 赤木炭土製破片 自然釉赤土	甕 管筒	在地系 1570-1810
607	D-6	検出区	148	2	15.0 灰胎+長石釉製品破片	長石釉	瀬川系 1610-1830
608	D-6	検出区	148	2	13.5 鉄胎灰土目 破片	灰土目	瀬川系 1610-1650
609	D-6	検出区	148	2	6.8 灰胎破片	鉢?	肥前系 1580-1610
610	D-6	検出区	148	1	60.8 土器破片	燈籠、灯明筒等	不明 不明
611	D-6	検出区 東藏	151	2	2.8 鉄胎鉢鉢? 破片	鉄胎鉢鉢?	瀬川系 不明
612	D-6	検出区	152-156	2	8.9 灰胎+(白化土?)鉄胎製品破片	鉢	瀬川系 1610-1650
613	D-6	検出区	152-156	2	9.7 長石釉破片	長石釉	瀬川系 1580-1610
614	D-6	検出区	152-156	1	26.0 焼物土器破片	弥生土製燒物土式	在地系 弥生時代後期
615	F-2	1検出区	308-310	2	64.7 灰胎、鉄胎破片	陶、磁、甕、鉢	瀬川系 1780-1860
616	F-2	1検出区	308-310	4	184.0 泰付製品(手香子~銅胎)破片	泥、白磁器、甕、陶磁	瀬川系 1800-1900
617	F-2	1検出区	308-310	2	36.5 灰輸、鉄胎、鉄胎製品破片全斗	陶、甕	肥前系 1650-1780
618	F-2	1検出区	308-310	3	60.3 平皿、白陶器破片	平皿類土粉付物	肥前系 1600-1740
619	F-2	1検出区	308-310	4	178.0 泰付製品破片	陶、磁、甕	肥前系 1600-1860
620	F-2	1検出区	308-310	2	5.6 鉄胎鉄胎破片	半色色鉄胎破片	瀬川系 1700-1780
621	F-2	1検出区	308-310	2	36.9 灰胎+緑胎色土破片	鉢?	肥前系 1810-1930
622	F-2	1検出区	308-310	5	19.0 焼物破片	不明	不明 不明

土器・陶磁器観察表（未実測分）03

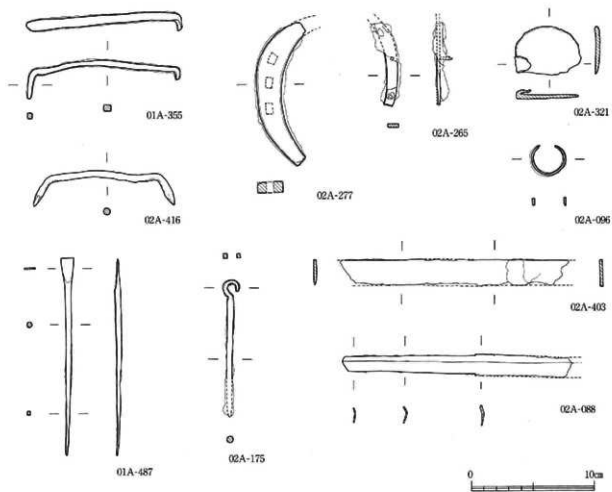
No	出土地点		製 期	産 地	内 容		所 見			
	区 画	遺 構 名			取 上 番 号	特 記 事 項		主 要 部 種		
623	F-2	1	塚南	302	2	6.2	灰輪製品片	網	瀬戸瓦遺跡	1780~1860
624	F-2	1	塚南	302	4	96.0	彩色製品片(手書き~刷組)破片	刷、墨書物	瀬戸瓦遺跡	1870~1930
625	F-2	1	塚南	302	4	21.1	彩色製品破片	網	肥後系	1690~1810
626	F-2	1	塚南	302	2	41.8	灰輪製品破片	網	伊・信濃系	1780~1860
627	F-2	1	1号遺構	303	2	1.3	灰輪破片	不明	瀬戸瓦遺跡	1780~1860
628	F-2	1	1号遺構	303	4	13.6	彩色製品破片	肥後系	肥後系	1690~1780
629	F-2	1	地土層	304	2	24.1	灰輪、鉄輪破片	石磨物、瓶?	瀬戸瓦遺跡	1690~1860
630	F-2	1	地土層	304	3	13.2	半田彩色破片	半田彩色破片	瀬戸瓦遺跡	1780~1860
631	F-2	1	地土層	304	2	11.1	灰輪、鉄輪破片	緑輪小皿、二部手鉢?	肥後系	1690~1740
632	F-2	1	地土層	304	4	90.1	彩色、白磁、色絵製品破片	破片	肥後系	1690~1810
633	F-2	1	4号遺構	306	2	6.1	灰輪破片	網	瀬戸瓦遺跡	1780~1860
634	F-2	1	4号遺構	316	2	103.8	灰輪、鉄輪破片	不明	瀬戸瓦遺跡	1780~1860
635	F-2	1	4号遺構	316	4	21.1	彩色製品破片	網	肥後系	1800~1860
636	F-2	1	4号遺構	316	4	49.7	彩色破片(コンコキヤ石の劣化)	くらわぬか大甕	肥後系	1690~1780
637	F-2	1	4号遺構	309	4	2.0	彩色破片	網	肥後系	1690~1740
638	F-2	1	4号遺構	309	2	80.7	鉄輪製品 破片	網?	瀬戸瓦遺跡	1810~1930
639	F-2	1	5号遺構	305	5	1.8	赤色破片	不明	不明	不明
640	F-2	1	5号遺構	307	2	25.6	鉄輪破? 破片 蛇の目高台	鉄輪破?	瀬戸瓦遺跡	1690~1860
641	F-2	1	5号遺構	307	2	3.5	灰輪色絵破片	灰輪色絵筒	伊・信濃系	1700~1780
642	F-2	1	5号遺構	307	4	6.7	彩色破片	破片	不明	不明
643	F-2	1	6号遺構	312	2	2.9	灰輪破片	網	瀬戸瓦遺跡	1780~1860
644	F-2	1	6号遺構	312	4	3.4	彩色製品破片	網	瀬戸瓦遺跡	1870~1880
645	F-2	1	6号遺構	312	2	3.0	灰輪灰陶器破片	網	肥後系	1690~1860
646	F-2	1	6号遺構	312	2	8.2	鉄輪打穿突 破片	鉄輪打穿突	不明	不明
647	F-2	1	カクタン	313	4	3.2	彩色 破片	網	肥後系	1780~
648	F-2	1	カクタン	313	2	12.9	灰陶器陶器 緑輪物 印刷	六入丸鉢?	伊後系	不明
649	F-2	1	カクタン	313	2	2.5	灰輪色絵破片	灰輪色絵筒	伊・信濃系	1700~1780
650	F-2	1	カクタン	313	2	4.4	彩色破片	灰陶器	赤湾系	1860~1910
651	F-2	1	カクタン	314	4	4.8	彩色製品破片	網	瀬戸瓦遺跡	1870~1880
652	F-2	1	カクタン	314	4	4.1	彩色製品破片	網?	肥後系	1690~1860
653	F-2	1	カクタン	314	2	10.4	灰輪+鉄輪破片	灰土	伊代系	1810~1930
654	F-2	1	カクタン	315	4	2.4	彩色 破片	網	肥後系	1690~1780
655	F-2	2	カクタン	321	4	2.8	彩色製品破片	網	瀬戸瓦遺跡	1860~
656	F-2	2	カクタン	321	2	48.2	灰陶器陶器破片	灰陶器陶器	肥後系	1690~1860
657	F-2	2	カクタン	321	4	13.8	彩色破片(茶器手)	網	肥後系	1690~1860
658	F-2	2	カクタン	321	2	31.4	白輪タイル	タイル	不明	不明
659	F-2	2	カクタン	321	2	44.6	灰陶器破片	不明	不明	不明
660	F-2	2	カクタン	322	2	51.2	鉄輪破片	鉄輪破片	瀬戸瓦遺跡	1860~
661	F-2	2	カクタン	322	4	70.1	彩色製品(手書き~ブム版)破片	刷、墨書物	瀬戸瓦遺跡	1810~1930
662	F-2	2	カクタン	322	4	30.2	彩色製品破片	網、鉄片	肥後系	1690~1860
663	F-2	2	カクタン	322	2	99.1	鉄輪製品 破片他	鉄輪、鉢?	伊代系	1810~1930
664	F-2	2	カクタン	322-329	5	188.8	茶器破片(土器)	鉄片	不明	不明
665	F-2	2	カクタン	322	2	20.4	鉄輪? 製品 破片	不明	不明	不明
666	F-2	2	カクタン	322	6	92.4	灰破片	不明	不明	不明
667	F-2	2	カクタン	323	2	7.6	彩色破片	彩色破片	瀬戸瓦遺跡	1860~
668	F-2	2	カクタン	323	4	13.7	彩色、タイル製品破片	瓦	瀬戸瓦遺跡	1880~
669	F-2	2	カクタン	323	4	19.6	彩色製品破片	瓦、鉢	肥後系	1690~1860
670	F-2	2	カクタン	324	2	16.2	白磁、鉄物? 製品 破片	遺骨小	瀬戸瓦遺跡	1860~
671	F-2	2	カクタン	324	4	14.3	彩色製品(ブム版)破片	網	瀬戸瓦遺跡	1910~1930
672	F-2	2	カクタン	324	2	12.9	鉄輪破片	網	肥後系	1690~1860
673	F-2	2	カクタン	324	4	18.3	彩色破片	鉢?	肥後系	1690~1780
674	F-2	2	カクタン	325	2	19.4	鉄輪製品(積物)破片	網	瀬戸瓦遺跡	1690~1780
675	F-2	2	カクタン	325	2	30.9	鉄輪破片(積物)破片	鉄輪破片	肥後系	1690~1860
676	F-2	2	カクタン	325	4	38.5	彩色製品破片	網、瓦、瓶	肥後系	1690~1780
677	F-2	2	2号遺構	317-320	4	65.9	彩色破片	網、瓦、瓶	肥後系	1690~1780
678	F-2	2	2号遺構	317-320	2	459.4	灰輪製品(茶器茶碗)破片3割分	茶器茶碗	瀬戸瓦遺跡	1690~1780
679	F-2	2	2号遺構	317-320	2	25.4	灰輪製品破片	網、灰、灰、瓶	瀬戸瓦遺跡	1690~1780
680	F-2	2	2号遺構	317-320	2	54.9	鉄輪製品 破片	網	肥後系	1690~1780
681	F-2	2	2号遺構	317-320	2	219.6	鉄輪破片 破片	鉄輪破片	肥後系	1750~1860
682	F-2	2	2号遺構	317-320	2	81.2	肥後系灰陶器破片	灰陶器	肥後系	1690~1860
683	F-2	2	2号遺構	317-320	2	8.2	緑輪小皿 破片	緑輪小皿	肥後系	1690~1740
684	F-2	2	2号遺構	317-320	2	31.2	半田半田破片	半田半田破片	肥後系	1690~1740
685	F-2	2	2号遺構	317-320	4	193.8	彩色破片	網	肥後系	1690~1740
686	F-2	2	2号遺構	317-320	4	69.9	彩色破片(印文)破片	網	肥後系	1700~1740
687	F-2	2	2号遺構	317-320	4	71.7	彩色破片(大甕年輪)破片	白磁	肥後系	1690~1740
688	F-2	2	2号遺構	317-320	4	54.9	白磁皿(蛇の目輪)破片	白磁	肥後系	1690~1740
689	F-2	2	2号遺構	317-320	4	144.8	彩色製品破片	網、瓦、瓶	肥後系	1690~1860
690	F-2	2	2号遺構	318-326	3	13.5	陶器彩色製品破片	網、肥後系	肥後系	1690~1740
691	F-2	2	2号遺構	317-320	1	220.2	土器破片	網?	不明	不明
692	F-2	2	2号遺構	317-320	2	44.8	鉄輪(コバルト色)破片	網?	不明	不明
693	F-2	2	検出箇	318-326~328-330-331	2	487.6	灰輪製品(茶器茶碗)破片3割分	茶器茶碗	瀬戸瓦遺跡	1690~1750
694	F-2	2	検出箇	318-326~328-330-331	2	27.0	灰輪製品(白子)破片	白子	瀬戸瓦遺跡	1690~1780
695	F-2	2	検出箇	318-326~328-330-331	2	33.8	灰輪製品破片	網、香炉	瀬戸瓦遺跡	1690~1780



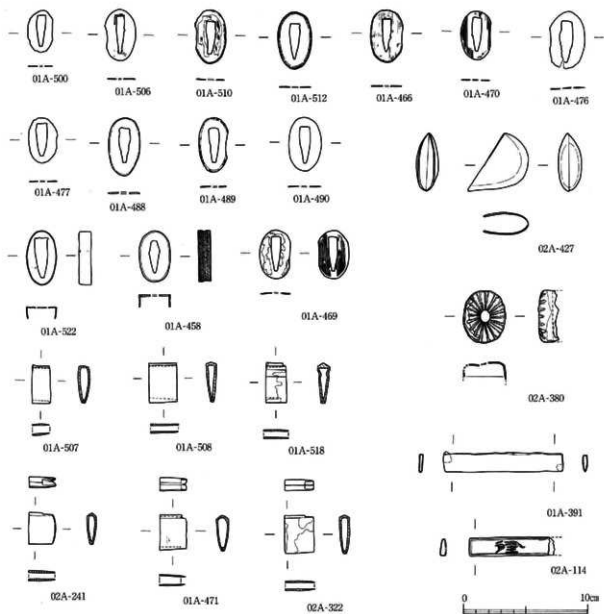
第83图 鉄製品実測図① (S=1/3)



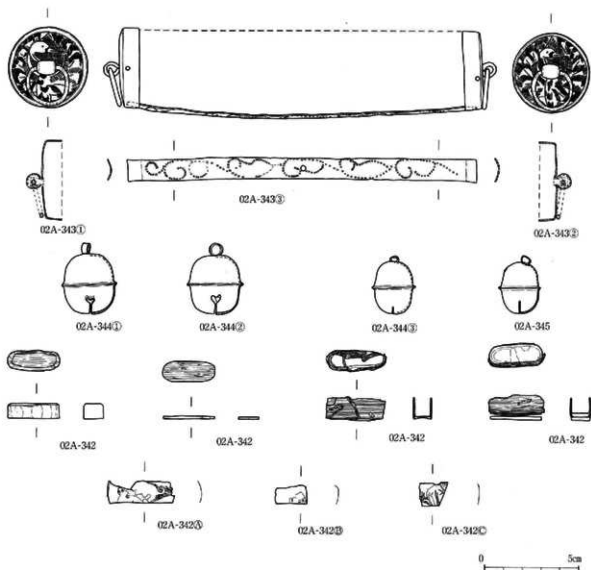
第84图 铁製品実測图② (S=1/3)



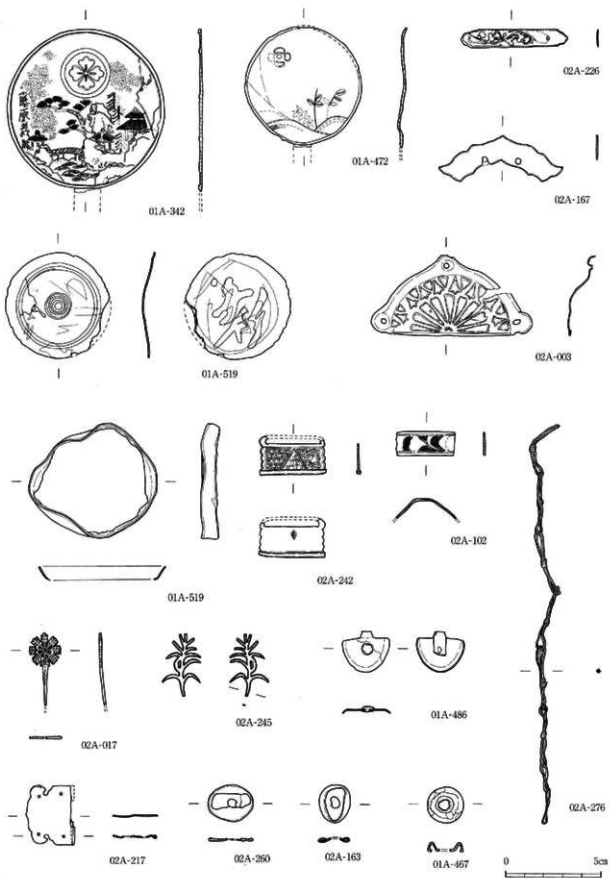
第85図 鉄製品実測図③ (S=1/3)



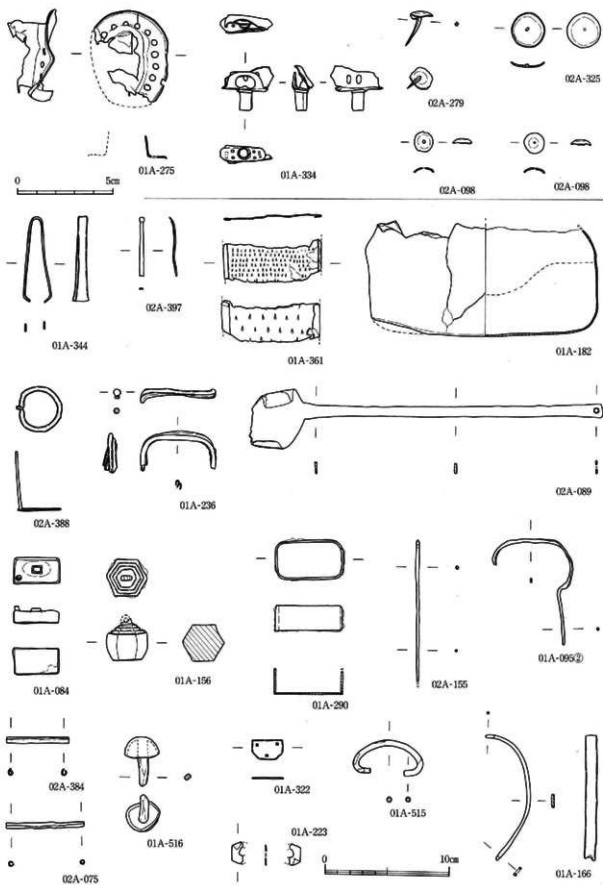
第86图 刀装具实测图 (S=1/3)



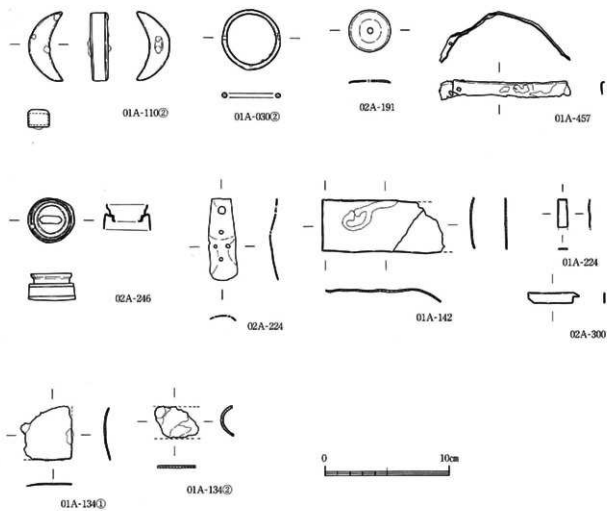
第87图 筒守実測図 (S=1/2)



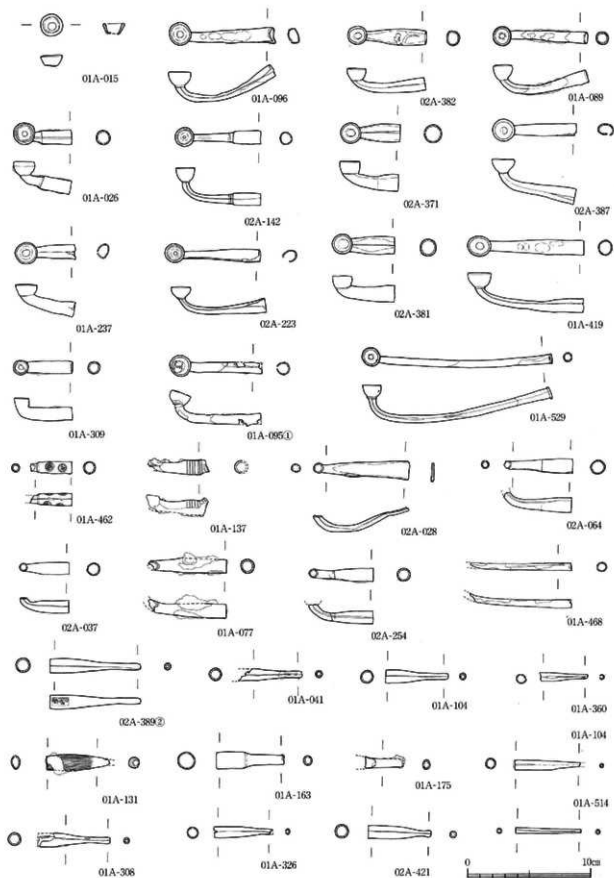
第88图 铜制品实测图① (S=1/2)



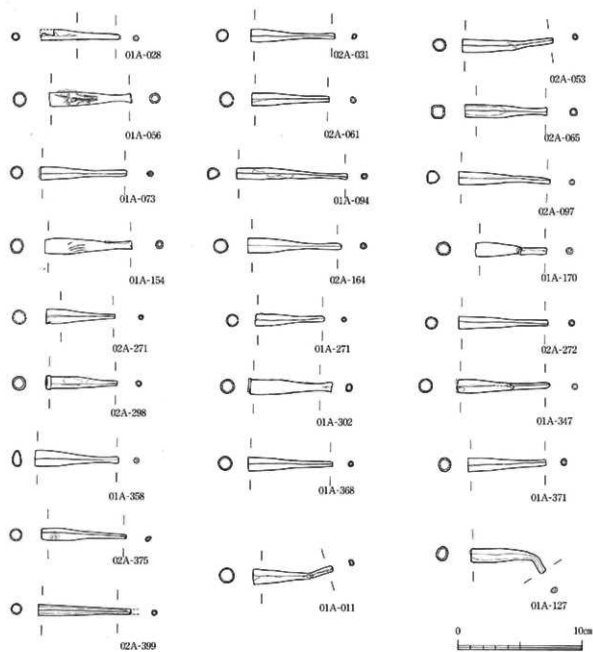
第89图 铜製品実測図② (S=1/2.1/3)



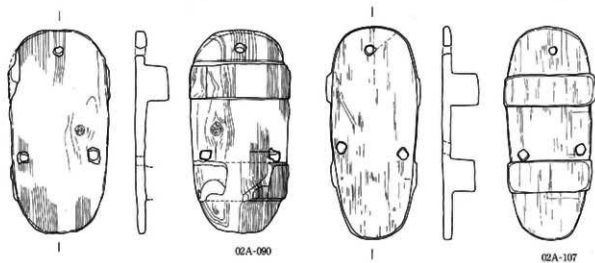
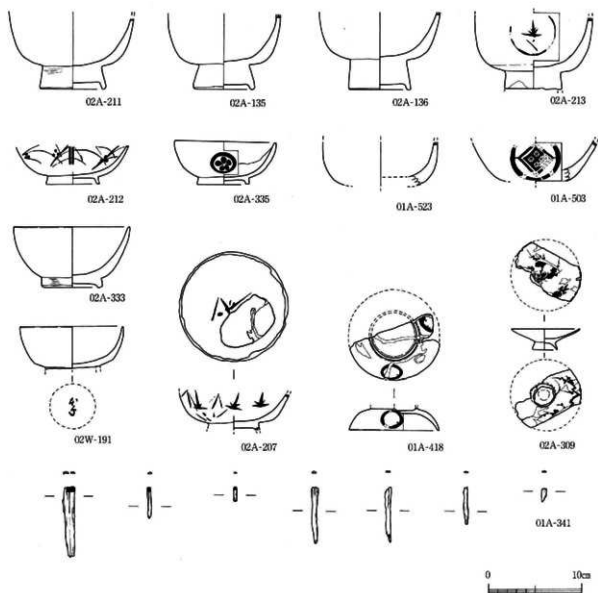
第90图 銅製品実測図③ (S=1/3)



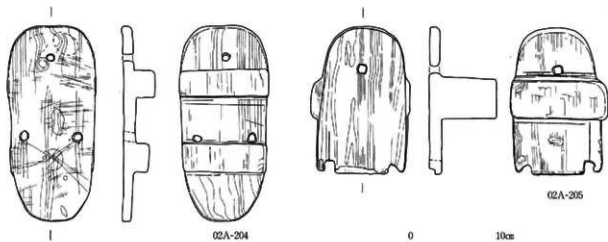
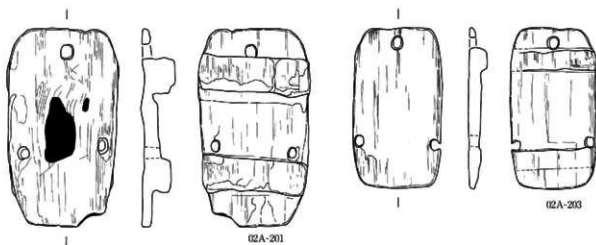
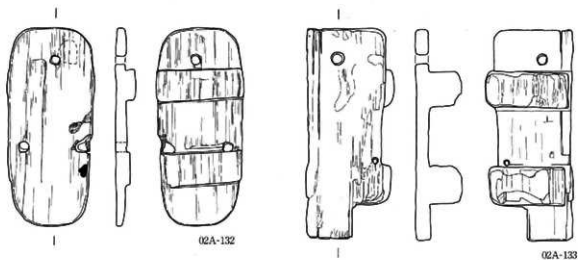
第91图 燧管尖测图① (S=1/3)



第92図 煙管実測図② (S=1/3)

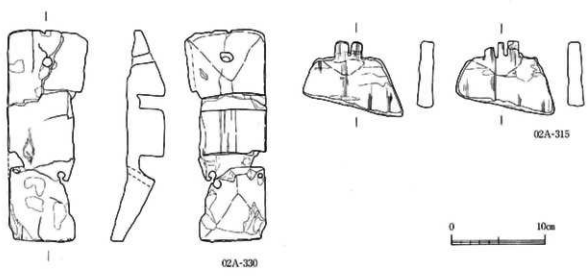
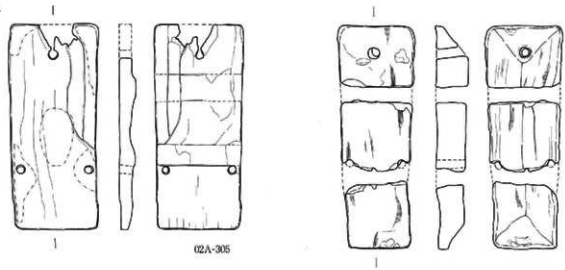
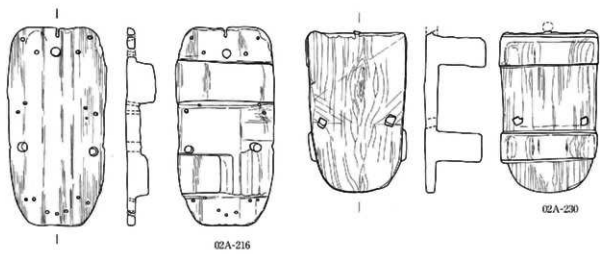


第93图 木製品実測図① (S=1/4)

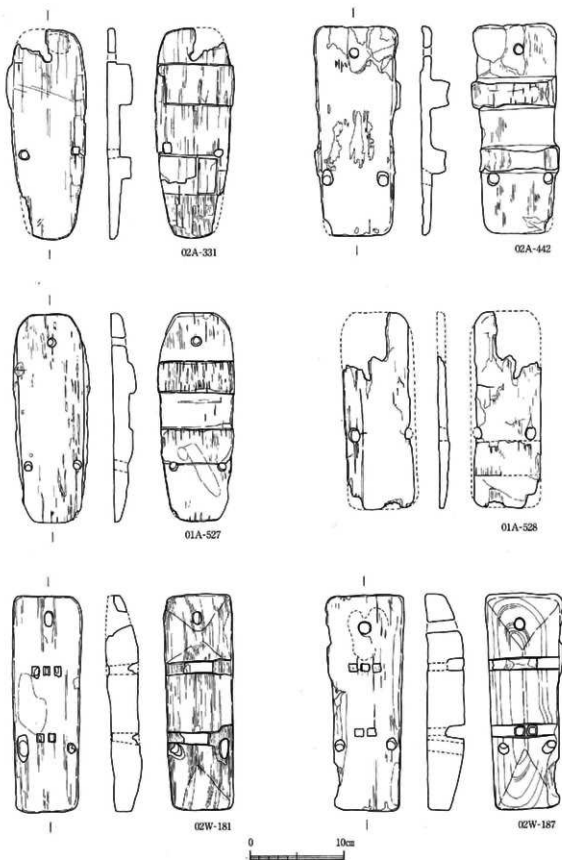


0 10cm

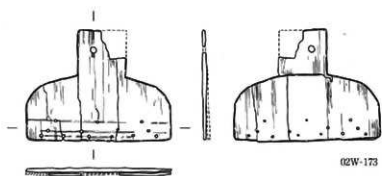
第94図 木製品実測図② (S=1/4)



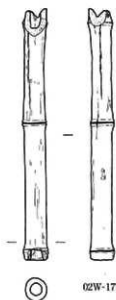
第95図 木製品実測図③ (S=1/4)



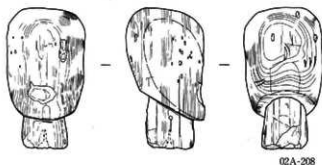
第96图 木製品実測图④ (S=1/4)



02W-173



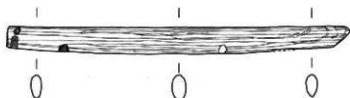
02W-177



02A-208



02W-100



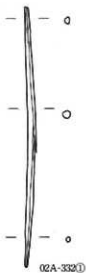
02A-251



02A-225



01W-048(2)



02A-332(1)



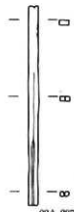
02A-332(2)



02A-236

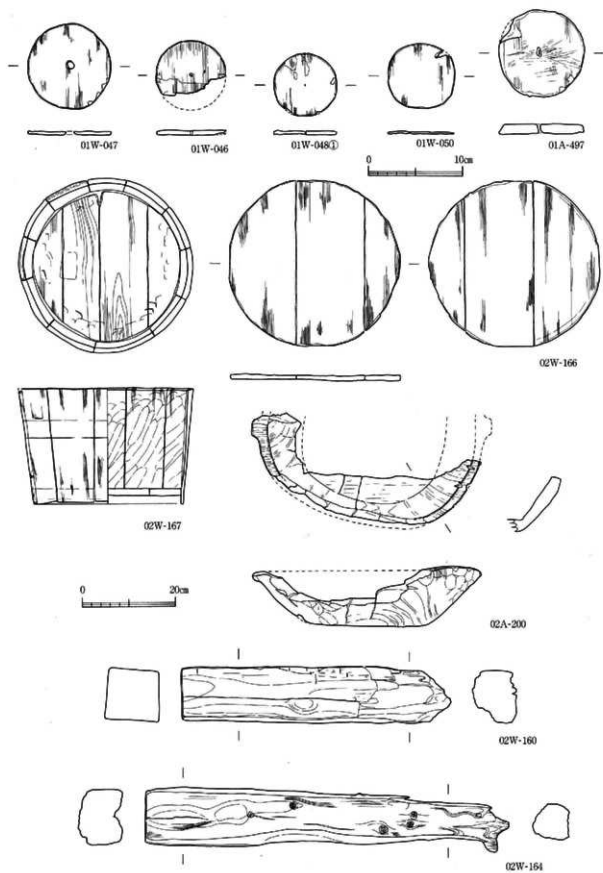


02A-332(3)

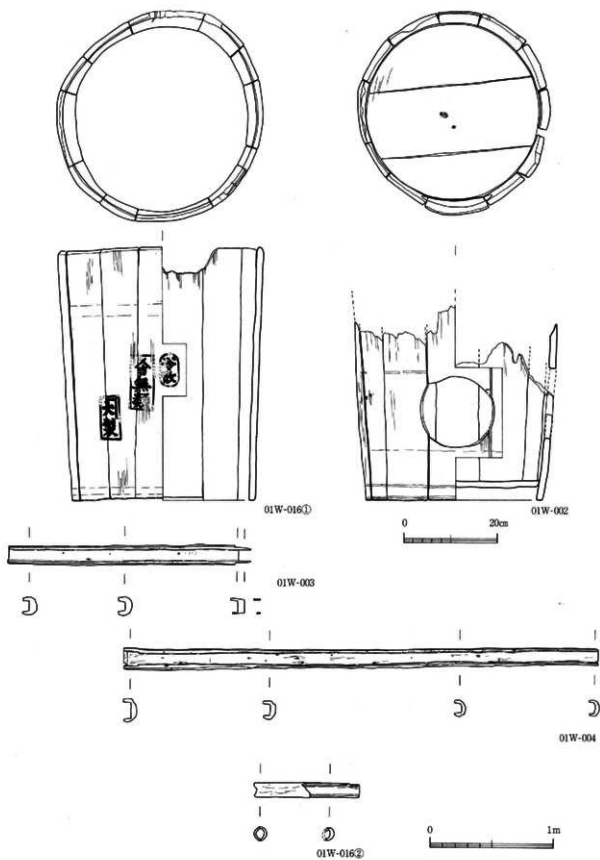


02A-287

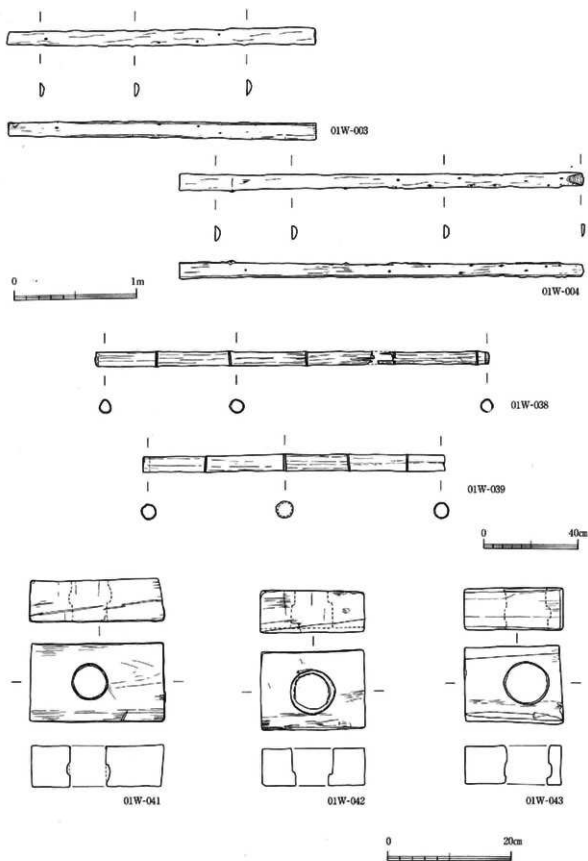
第97图 木製品実測図⑤ (S=1/4)



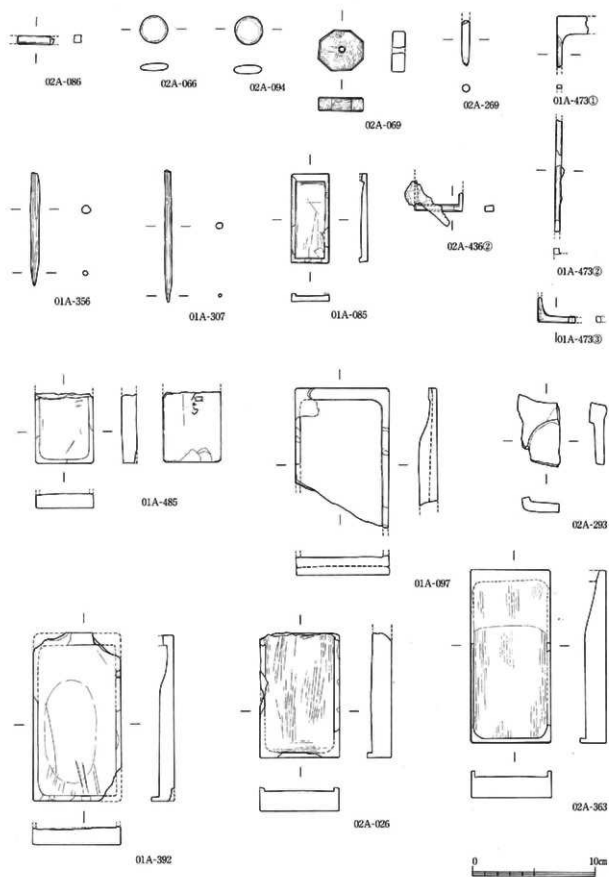
第98圖 木製品実測図⑥ (S=1/4, 1/8)



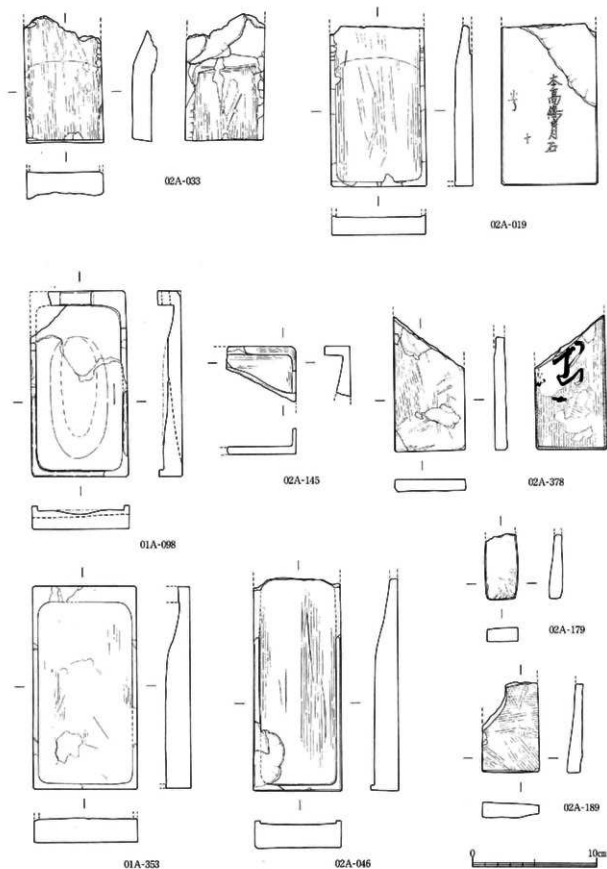
第99図 木製品実測図⑦ (S=1/8, 1/30)



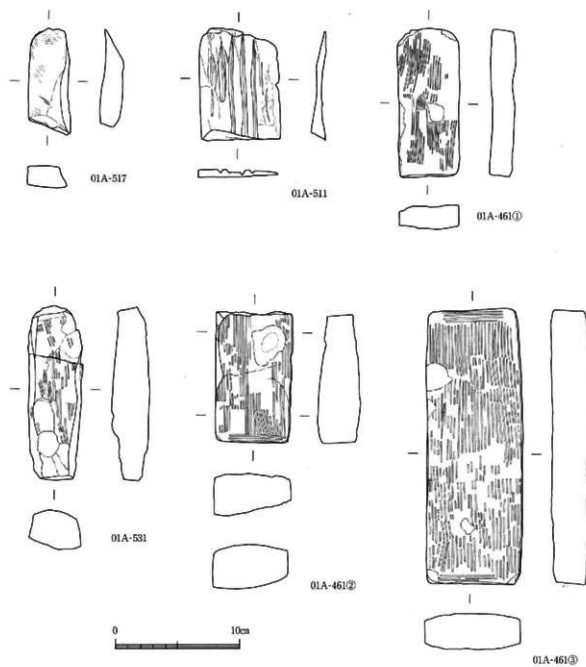
第100图 木製品実測图⑧ (S=1/6, 1/16, 1/30)



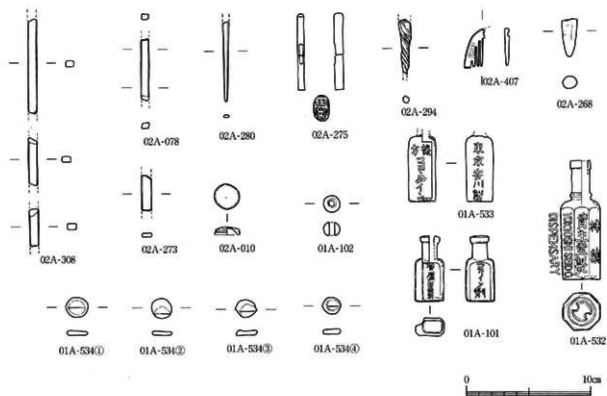
第101図 石製品実測図① (S=1/3)



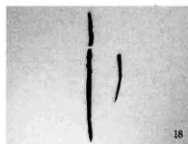
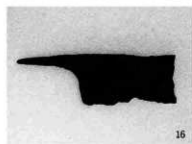
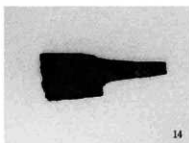
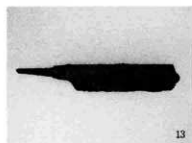
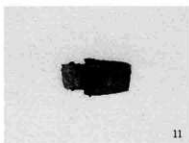
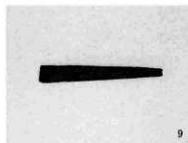
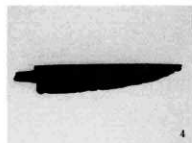
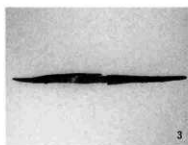
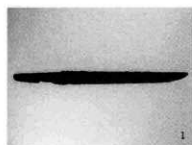
第102図 石製品実測図② (S=1/3)



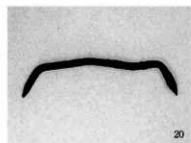
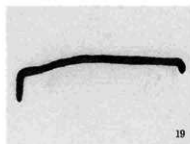
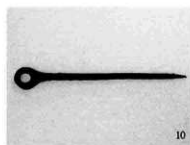
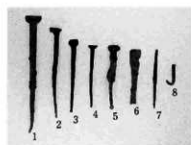
第103図 石製品実測図③ (S=1/3)



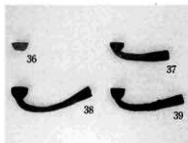
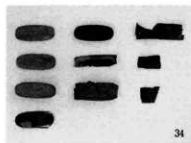
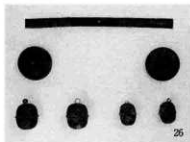
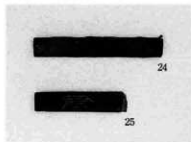
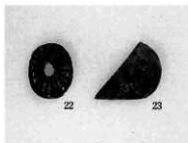
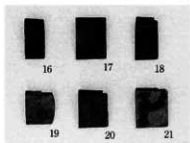
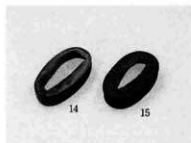
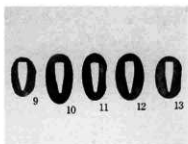
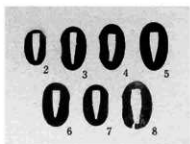
第104図 ガラス・その他の製品実測図 (S=1/3)



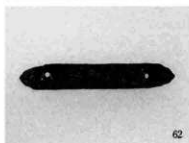
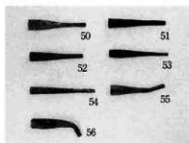
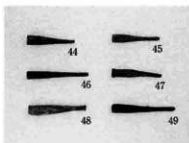
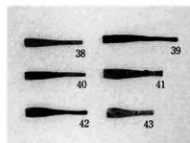
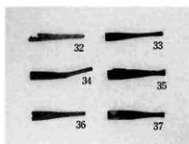
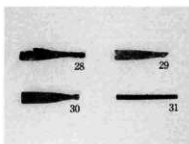
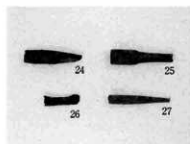
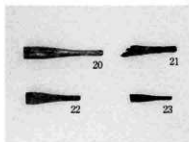
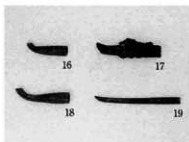
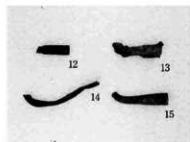
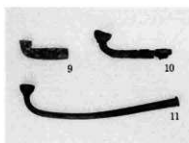
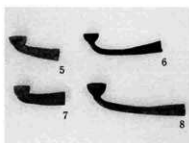
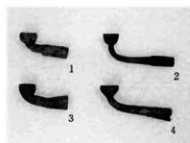
その他の遺物写真図版 1



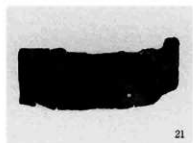
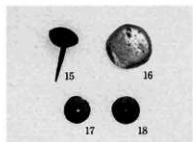
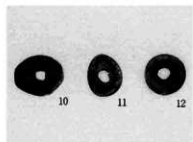
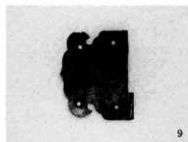
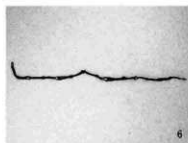
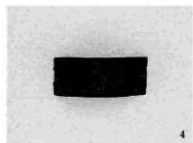
その他の遺物写真図版 2



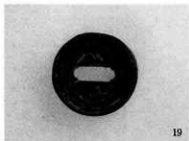
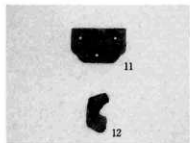
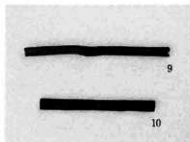
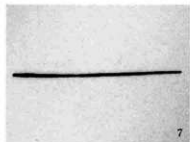
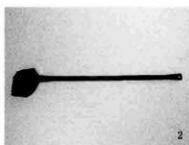
その他の遺物写真図版 3



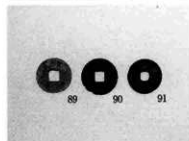
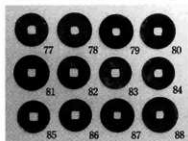
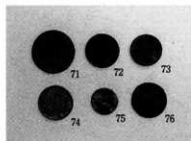
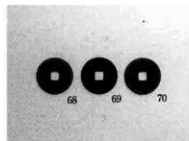
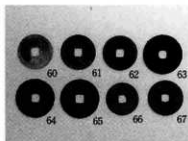
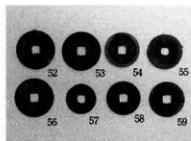
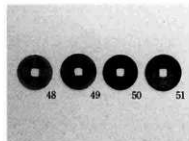
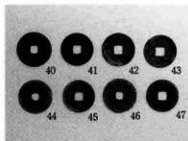
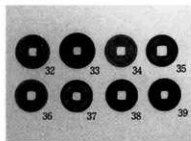
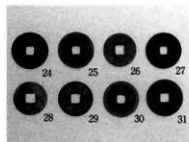
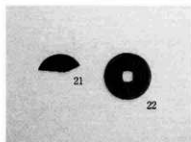
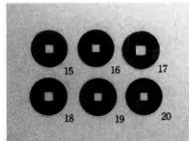
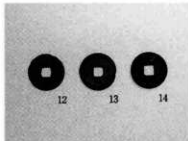
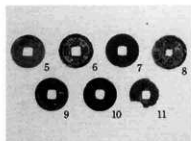
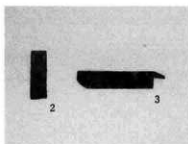
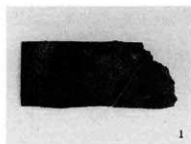
その他の遺物写真図版 4



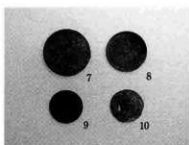
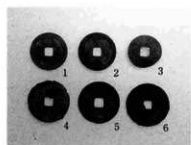
その他の遺物写真図版 5



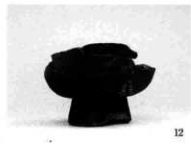
その他の遺物写真図版 6



その他の遺物写真図版 7



11



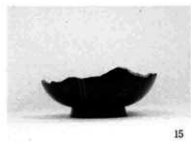
12



13



14



15



16



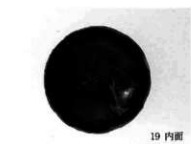
17



18



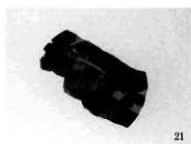
19



19 内面



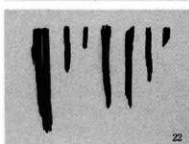
20



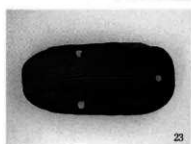
21



21 内面

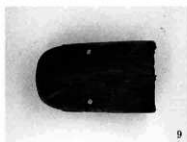
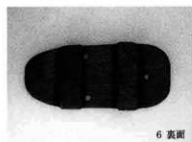
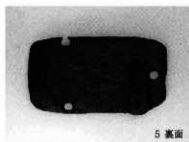
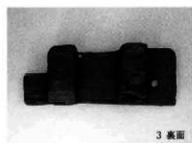
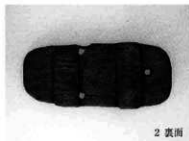
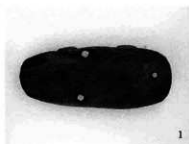
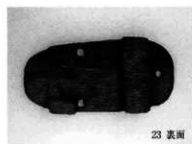


22

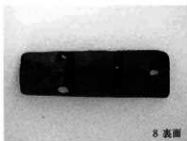
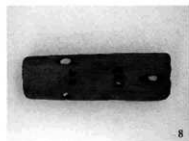
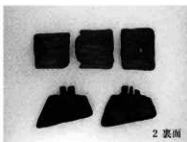
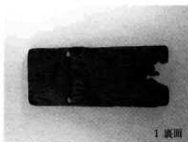


23

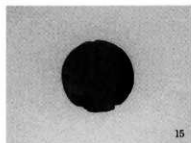
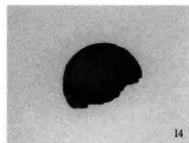
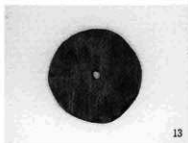
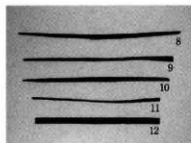
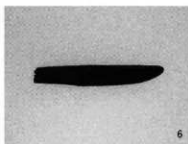
その他の遺物写真図版 8



その他の遺物写真図版 9



その他の遺物写真図版10



その他の遺物写真図版11



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



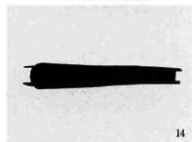
12



14 接続部



13



14



14 接続部

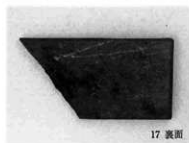
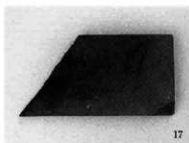
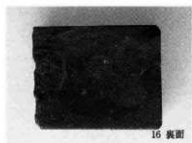
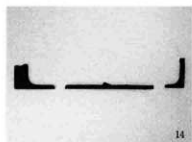
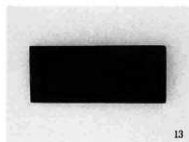
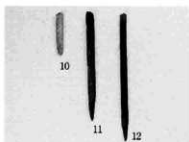
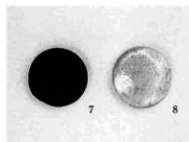
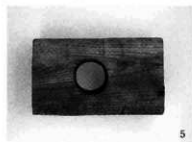
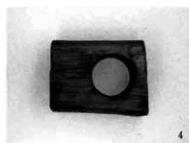
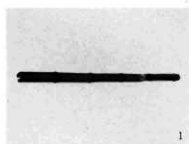
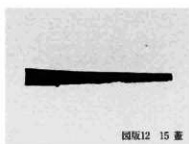
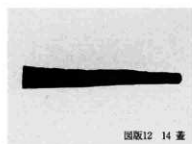


15



15 接続部

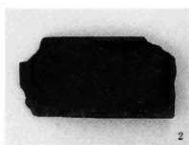
その他の遺物写真図版12



その他の遺物写真国版13



1



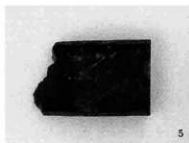
2



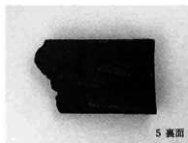
3



4



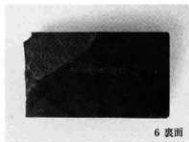
5



5 裏面



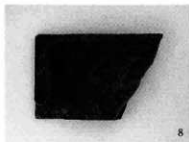
6



6 裏面



7



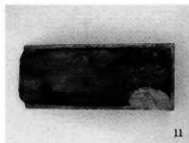
8



9



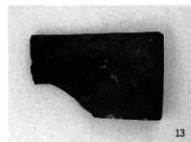
10



11



12



13

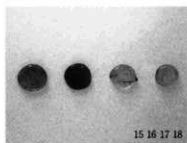
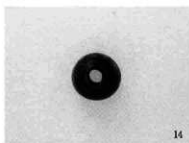
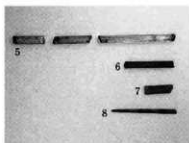
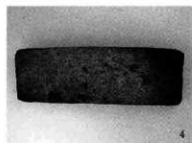
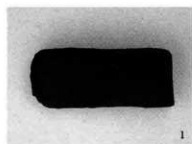


14



15

その他の遺物写真図版14



その他の遺物写真図版15

第Ⅳ章 関連調査成果

第1節 松代城下町跡出土陶磁器の様相

西 本 正 憲

考古学研究所 株式会社アルカ

1 はじめに

2001～2002年度の2カ年にわたる松代城下町跡の発掘調査によって、多数の近世陶磁器が出土・検出された。発掘調査は、北国街道筋の車道を挟む商店街の歩道上で行われている。その調査地区は、車線または交差点間にある歩道をA～F地区に6大別したうえ、それぞれの地区で発掘可能な地点を選定し、例えばA区では1～11区までと、発掘箇所に通番を振って発掘調査が行われた。遺物の検出状態は、発掘箇所によって大きく異なっている。ある地点では攪乱が大きく層位を留めない所もあれば、層位が良好な地点では、数層の包含層や焼土層が確認され、層位別に推定生産年代が限定できる包含層も存在している。そのため、出土遺物をまず出土地点別に評価し、その後層位状態の良好な地点を選定した。

松代城下町跡出土陶磁器の整理手順は、以下のような方法で行った。第1段階として、まず全地点の出土した陶磁器を全点確認し、各地区の残存状態が良好な陶磁器、または資料的価値が高い陶磁器を抽出し、図化と記述、属性観察表を作成する陶磁器を選定した。この作業によって得られた各地区の概要と、特筆すべき資料について、第2項で記述する。第2段階として、陶磁器の全点確認の際に判明した、出土層位が良好な地点を選定し、層位の状態と出土遺物の生産地、または製作年代を比較することによって、その層位の歴史的位置を確認する作業を行った。これを第3項で記述する。第3段階として、出土層位が良好な地点から出土した全破片の重量計測と観察表作成を行い、時期別・生産地別の数量データを算出し、対象地点の性格と、陶磁器流通の変移についての考察を行った。これを第4項で記述する。全体の整理方針として、出土陶磁器の時期・産地・特徴・質量・出土状態などを提示することによって、近世の北国街道において政治・交易面で重要な拠点の一つである、松代藩の松代城下町の様相を明らかにすることを念頭においている。

なお、出土陶磁器の大半を占める肥前系製品および瀬戸美濃系製品の生産地及び生産年代の目安は、以下の基本文献を参考とし、あえて観察表には絶対年代を表記した。本文中にその編年等を記述する必要がある際は、以下のように文中で略した形で用いている。

- ・肥前系陶磁器編年…大橋康二1992「近世における肥前陶磁の流通」および九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』（以下、総称して「肥前編年」と呼ぶ）
- ・近世瀬戸陶磁器編年…藤澤良祐・岡本直久2002「江戸時代の瀬戸窯業」『江戸時代の瀬戸窯』
- ・近世美濃陶磁器編年…田口昭二1994「美濃窯の諸様相」『瑞浪陶磁資料館研究紀要』第6号
- ・瀬戸美濃大窯期陶器編年…井上喜久男1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社（以下、「大窯期」および「大窯後期」と略す）

肥前系・瀬戸美濃系陶磁器で上記以外の参考資料と、肥前系・瀬戸美濃系以外の生産地については本稿の末に参考文献で一括して記してある。

2 各地区の出土遺物の様相

ここではA1区からF2区まで、各地点から出土した陶磁器の概略について説明し、出土状態が良好な地点は特記調査区として3項にて詳細を記す。また出土遺物がごくわずかで、出土層位状態も明らかでない地点は省略する。遺物検出面は上層より、①次面・②次面…と記述する。

① A地区

A1区 遺物検出面が大きく3層あるが、全体的には陶磁器遺物量は少量である。出土陶磁器は層位により年代のまとまりが見えるが、後世の混入または擾乱もあるようである。①次面は幕末の肥前系磁器、江戸時代後期から近代まで松代で焼成された松代焼、明治以降の瀬戸美濃系陶器の向付など、主に幕末～明治以降に生産された遺物が占められる。②次面は比較的残存状態の良い肥前系磁器が2点ほどあり、それぞれ17世紀末から18世紀前半に比定される。全体のまとまりとしては18世紀前半くらいになるか。③次面は17世紀中～17世紀末の肥前系陶磁器が中心で、2号遺構からは当該期に特徴的な肥前系京焼風陶器が出土しており、検出面からも同様の破片が多く出土している。層位的には概ね17世紀後半から18世紀前半になると思われる。

A2区 検出面は2層に分かれる。①次面は17世紀末～18世紀前半のものが中心で、②次面検出遺物には17世紀後半～18世紀前半の肥前系陶磁器と17世紀初頭～17世紀後半の瀬戸美濃系陶器が含まれる。①次面、②次面の性格については不明だが、より下層に江戸初期～前期の遺物が含まれるので、当該期に関連する遺構があった可能性もある。

A3区 検出面は2層に分かれ、それぞれ焼土層が存在する。①次面焼土層は、瀬戸美濃系の摺絵印判製品や銅版印判製品が含まれることから、明治後半期の火災痕であろう。②次面焼土層は17世紀初頭～18世紀後半まで幅広い時期の遺物が出土しているが、肥前系・瀬戸見美濃系それぞれの生産地編年で大体の時期区分に区切る、17世紀末～18世紀前半の範疇に入る遺物が多く、焼土もこの期間のものとして推定される。また、2層からは美濃系の鉄絵志野鉢の小破片が出土している。粘土紐で足を成形しており、江戸初期の変形鉢と推定される。

A4区 A3区と同様、検出面は2層に分かれ、それぞれ焼土層が確認される。①次面焼土層は、17世紀末～19世紀までの幅広い時期の遺物が検出されているが、伝世物も含まれる可能性があるため、焼土としては明治期の火災痕と考えられる。②次面焼土層は、肥前編年で1630～1640年代に比定される初期伊万里碗、小皿などが出土しているが、全体の出土遺物で見れば17世紀中～18世紀前半の物が中心に出土しているため、焼土層もその年代の範疇にはいるものであろう。3号遺構からは肥前系の磁器人形首・紅猪口・小碗・陶器摺鉢が出土している。いずれも肥前編年で17世紀中～18世紀前半に比定される。

A5区 ①次面の出土遺物量が多く、検出面も4層に分かれる。年代を確定できる可能性のある焼土層も確認されている重要な地点である。この地点については第3項で詳しく触れることとする。

A6区 検出面は2層に分かれるが、ほとんどが②次面からの出土で、焼土層も確認される。出土量は一定数あるが、出土遺物の推定生産年代は17世紀末から19世紀までの時期差がある。焼土層は19世紀以降の信楽系虎口網徳利が含まれることから、幕末～明治以降に比定される物であろう。

A7～9区 A7区からは、18世紀初頭と目される焼土層から大量の陶磁器が一括出土している。またA8区、A9区からは、16世紀末～17世紀前半に比定される陶磁器が多く見受けられ、朝鮮王朝時代の白釉陶器碗破片なども確認された。この3つの地点については、第3項で詳しく触れることとする。

A10・11区 これらの地区は出土遺物がほとんど確認されていないので省略する。

② B地区

B1区 資料的価値のある層位、出土遺物が確認されていない。

B 2区 焼土層3号遺構から肥前系の染付瓶が残存良好な状態で確認された。全体的に被熱を受けている。形状はやや下膨れて、絵付けが複雑な芙蓉手文様である。明朝末期の芙蓉手瓶を忠実に写したのもと思われ、生産年代は1650～1690年代と推定される。同様の時期と推定される陶器瓶や染付碗が被熱を受けた形で出土しているが、それらの残存率は少なく、詳細不明である。

B 3区 検出面は2層に分かれる。①次面検出面からは中央に栴檀が描かれた五寸皿が破片で数枚出土している。高台は比較的小さめで釉薬は生掛け焼成されている。肥前系の1650～1690年代に生産されたものに比定される。他にも同時期とみられる肥前系染付碗破片などがまとめて出土しているが、瀬戸美濃系銚子口や摺絵印判手染付など、江戸後期～明治以降の遺物の混入も見られる。②次面検出面からは肥前系三島手の大鉢破片が出土している。他にも釉薬掛け分けの京焼碗や初期伊万里小皿、江戸初期から前期にかけての瀬戸美濃系天目碗などが確認できるが、いずれも小片で未図化である。1号遺構からは古唐津小皿破片が出土した。

B 4区 検出面は2層あるが、全体的に江戸中期～明治以降の混入が多く見られ、攪乱されているものと見られる。図化遺物以外は小破片である。

B 5区 検出面は1層で、全体に江戸後期以降の破片が中心である。松代焼の鉢類破片が多い。

B 6区 検出面は2層あり、全体的に江戸中期以降～明治時代くらいまでの遺物が攪乱されている。1号遺構からは波佐見系のくらわんか碗と一緒に肥前系の色絵皿破片が出土している。黄・紫・青・緑の色絵で、波文と魚が描かれている。18世紀後半のものとして推定される。

B 7区 検出面が5層に分層され、焼土層を2層含む。比較的層序ごとに出土遺物の年代がわかれ、最下層には江戸初期～江戸前期に比定される陶磁器を含む、良好な地点である。第3項にて詳細を記す。

B 8区 検出面は2層に分層されるが、やや攪乱気味である。江戸初期（志野小片）から明治以降までの遺物が検出されている。残存状態のよいもののみを図化対象とした。

③ C地区

C 1・2区 検出面は1層。出土遺物も少なく、江戸後期以降の破片が主である。

C 4区 検出面は6層に分層される。①・②次面からは肥前系染付磁器破片と瀬戸美濃系陶器破片が主に出土しているが、肥前系は17世紀後半～18世紀前半に生産されたと推定される物が中心で、対して瀬戸美濃系は18世紀後半以降に生産されたと推定されるものが多い。伝世によって時期差が生じたものか。③次面は桃山～江戸初期の瀬戸美濃系陶器破片が数片、景德鎮系の青花製品破片など16世紀後半～17世紀前半に比定される資料が若干見られるが、主な出土遺物は17世紀後半～18世紀前半の肥前系陶磁器破片である。④次面から⑥次面までは、瀬戸美濃系陶器の17世紀初頭～17世紀後半に比定されるものが中心だが全体の量は少ない。一部肥前系陶磁器破片も確認される。江戸時代初期から前期にかけての包含層であろう。

C 5区 検出面は3層に分層されているが、遺物量は微量で、出土陶磁器からの層序確認はできなかった。①次面から17世紀後半の肥前系京焼陶器、18世紀前半の瀬戸美濃系呉須摺絵小皿、18世紀後半の青磁染付筒形碗の各底部が出土しているが、図化対象外とした。

C 6区 検出面が7層に分層され、下層からは織部製品、志野や古唐津などが検出されている。第3項にて詳細を記す。

④ D地区

D 1・3区 陶磁器出土遺物はなし。

D 2区 ①次面のみ出土。江戸中期から幕末期くらいの陶磁器が攪乱されているものと見られる。

D 4区 ①次面のみ出土。鉄軸大壺または大甕の破片が多い。松代焼の鉢類破片も多く見られる。遺物は江戸

後期から明治期に比定されるものが多く、ほとんどは破片である。陶器類は瀬戸美濃系、染付磁器は肥前系が中心である。

D 5区 5層に分層されており、③～⑤次面の間には中国系の美器手小皿や美濃系の折縁ソギ皿、志野製品など、16世紀～17世紀前半に比定される遺物が集中している。③次面には竜泉窯系の青磁碗が出土している。本地点出土遺物の詳細は第3項にて記す。

D 6区 9層に分層されており、様相はD 5区とほぼ共通する。⑤次面から呉須青花皿破片が出土しており、松本城出土品と共通する文様である。⑤～⑨次面までは16世紀末～17世紀初頭に比定される肥前系、瀬戸美濃系製品が多く出土している。本地点出土遺物の詳細は第3項にて記す。

D 7区 5層に分層されるが、出土資料が少なく、層位ごとの年代も判然としない。肥前系京焼風陶器の呉器形碗と半球形に近い肥前系染付碗が比較的残存状態がよく、いずれも17世紀後半～18世紀初頭くらいに比定されるものであるが、いずれも①～②次面出土である。他は江戸初期～幕末期までの瀬戸美濃系陶器とかかわり等の土器皿が散見される。

D 8区 3層に分層される。①～②次面は江戸前期～明治以降のものが含まれ、攪乱気味である。残存状態のよいものを図化対象としている。③次面はかわらけ破片が中心だが、瀬戸美濃系の椿手鉄軸天目碗破片や灰釉破片が認められ、混入もみられないことから、江戸初期から江戸前期の包含層に比定できようであろう。

D 9区 出土陶磁器なし。

D 10区 2層に分層されるが、江戸後期から明治期にかけての破片が混然としており、出土陶磁器では年代区分が困難である。陶器は瀬戸美濃系と松代焼系が多く、磁器は明治以降の瀬戸美濃系が中心に出土している。

⑤ E地区

E 1区 2層に分層されるが、出土陶磁器では特に層位別の変化は見られない。松代焼系の陶器片と瀬戸美濃系陶磁器が中心であることから、幕末から明治期の包含層と推定される。

E 2区 出土遺物は極少量。瀬戸美濃系の陶器・磁器に信楽系の土版破片が見られる。明治期に比定される。

E 3区 2層に分層されるが、出土遺物は極少量。①～②次面は瀬戸美濃系の陶器・磁器破片が中心で、江戸後期～幕末の肥前系磁器、松代焼破片もみられる。

E 4区 3層に分層される。①～②次面からは幕末期から明治初期の瀬戸美濃系染付碗皿類が多く見られるが、一部18世紀代の肥前系染付製品が見られる。陶器では、瀬戸美濃製品の他に、松代焼の白釉・緑釉・鉄軸製品も多く出土しており、器種も鉢類のほかには平仄や楕鉢などもみられる。③次面からそれよりやや古手の瀬戸美濃系楕鉢片が散見されるが、全体に出土陶磁器から包含層の時期を推定するのは困難である。

E 5区 ②次面1号遺構は、出土品から幕末期から明治初期のものとして推定される。

E 6区 17世紀末～18世紀と推定される肥前系染付磁器破片が数片確認されるのみである。

E 7区 4層に分層されるが、出土遺物の生産年代は層位に一致しない。①次面からは江戸後期～大正期くらいまでの肥前系または瀬戸美濃系染付磁器破片が中心である。②次面からは①次面で検出された資料に加え、松代焼や瀬戸美濃系など陶器類破片、おそらく酸化クロム発色と思われる肥前系青磁鉢底部、信楽茶壺底部などが出土している。③・④次面からは明治以降の瀬戸美濃系染付磁器を中心に、陶器、土器破片が散見される。

⑥ F地区

F 1区 4層に分層される。遺物量自体は一定数存在するが、各層出土遺物の推定生産年代から見ると、層位が一部攪乱されている可能性がある。①次面は肥前系の初期伊万里で見られる鉄軸飛鉋風裝飾付き染付瓶など、江戸前期に比定されるものから、大正～昭和初期くらいの瀬戸美濃系スタンプ印染付皿やクロム青磁皿まで、幅広い

い時期差の遺物が見られる。全体量としては、江戸後期～昭和初期位までの破片が多い。②次面は一部上層出土遺物と同類のものが見られるが、概ね17世紀後半～18世紀後半の遺物が中心である。肥前系は磁器と陶器があり、瀬戸美濃系は陶器のみである。京・信楽系の色絵茶碗破片が多く見られる。③次面は、概ね②次面での出土遺物の内容に似ている。肥前磁器の推定年代で、17世紀後半～18世紀後半くらいのもが多く見受けられる。焙烙で、取手部の口縁が小波状になるものが出土している。1号遺構は出土遺物の年代から見ると、③次面より新しい時代の物が見られる。おそらくは江戸後期～幕末期にかけての時期に帰属する遺構だろう。④次面は一部初期伊万里から盛期伊万里、17世紀代に入る可能性がある京焼破片など、古い段階のものが認められるが、いずれも破片で残存状態は不良。全体的には②・③次面出土品と変化がない。17世紀代の包含層が存在した可能性はあるが、江戸後期以降のいずれかの時期に攪乱されたものと推定される。

F2区 本地点は5区に分層され、①次面から④次面までが遺物生産年代的に比較的時間のまとまりのある様相を見せている。詳細を第3項で記す。

3 特記調査区の詳細

前項で松代城下町跡の発掘調査で出土した陶磁器類を地区別に確認を行い、本項において、各層内で出土遺物の推定生産年代が安定している、焼土層に遺物が含まれている、比較的年代順に多層出土しているなど、遺跡内で資料的価値が高い地点を特記調査区として記述する。また、焼土層などの年代決定する基準となる箇所については、文献資料と比較し、詳細な時期について検討を加えることとする。以上の分析対象に該当する地区として、A5・7・8・9区、B7区、C6区、D5・6区、F2区の、全9地区を扱うこととする。

① A5区（遺物検出面4層）

①次面 遺物検出面から①次面焼土層内にかけて、大量の陶磁器が出土している。火災によると思われる被熱を受けているものといえないものがあるが、種類は同一の物が多く、被熱の有無による大きな時期幅は認められない。出土遺物の器種はさきわめて多様であるが、中でも描繪印判染付の調徳利破片がきわめて多く出土していて、全体的にも酒器や煎茶器が多く認められるのが特徴的である。以下、出土遺物を磁器と陶器・焼締に分けて、大まかな器種別に記述したうえで、焼土層の年代を検討したい。

磁器のほとんどは瀬戸美濃系の製品とみられる。中でも点描描繪印判染付の調徳利がきわめて多く出土している。多くは1合半～2合位の容量で、口縁は筒状で玉縁口唇である。染付の顔料は合成コバルトを使用している。明治期の蒸気機関車文様が大量に出土しており、他にも雪輪文様、雲鶴文様などの種類が見られる。手描きのコバルト染付のものや白磁のものも多く、網目文・草花文・縦縞文などの染付調徳利がある。調徳利以外の瓶類では、手描き松竹梅文の鶴首形小瓶、コバルト瑠璃軸の瓶子形小瓶などが多数出土している。これらの用途はいずれも神饌に供える御神酒徳利であろう。瀬戸美濃系以外の生産地と推定される瓶類は、波佐見系の鶴首形染付大瓶の破片が数個体分あり、文様は彩度の低い天然呉須と合成コバルトの両種が使用されている。幕末から明治期にかけてのものと思われる。酒に伴う器種として薄手盃も多く出土している。形状は高台が張り、やや浅い半球形状が多く、高台周囲に合成コバルトで髹歯文が、見込みに色絵で草花などが描かれるものがほとんどである。現在の多治見市市倉周辺で明治期に生産された製品と考えられる。

碗類は、器形と大きさから、用途が飯碗用と湯飲碗に大きく二分される。飯碗の形状は端反形、丸形、蓋付平形に大きく3分類される。端反形飯碗は染付手描文様がほとんどで、丸形飯碗は描繪印判が多い。蓋付平形碗は外面がクロム青磁とクロム系絵付で草花が描かれ、内面と高台内はコバルト染付によって文様や銘が描かれる。湯飲碗は端反形、半球形、筒形に大きく3分類される。端反形碗は呉須で山水や草花文が描かれ、半球形碗・筒

形碗はコバルト染付で文様が描かれる。また筒形碗には飯碗と同様、クロム青磁の製品もある。これらは幕末から明治期の瀬戸美濃系製品と推定され、①次面出土碗類の多数を占める。明治期瀬戸美濃系製品で他の器種として、急須、皿、仏飯器、香炉などが見られる。また小破片ではあるが、銅版印判の鉢が出土している。

肥前系の磁器類は、染付と染付青磁製品があり、碗類・皿類・香炉・製油壺などがみられる。期的には江戸後期～幕末に生産されたものと見られ、江戸期からの伝世品と考えられる。出土量は瀬戸美濃系磁器に比べると極少量である。

陶器類・焼締類では土瓶・行平鍋蓋・焼締急須の3器種がまとめて出土している。いずれも薄手成形のため破損が大きく、残存状態が良い物は少ない。土瓶はほとんどがいゆる山水窓絵土瓶で、大小2種類ある。胎土は暗灰褐色から紫褐色を呈し、薄手で硬質である。一般的によく知られる益子製の山水窓絵土瓶の胎土質とは異なり、常滑系または四日市万古系の製品と推定される。また、土瓶の蓋だけ残っているものが見られ、それらは信楽系のもが多く見られる。行平鍋は鍋と蓋があり、胎土はやや土器質で内面に灰釉が施される。外面は鉄彩が帯状に施され、飛び鉋文が施文されるものがある。生産地は不明だが、関西方面の製品か。急須は無袖焼締がほとんどで、薄手のため残存状態がきわめて悪いが破片量は多い。胎土は暗灰、暗紫、暗茶などがあり、内面の調整から木型成形であることがわかる。残存状態の良い取手部があり、先端に遊環を付けた精巧な作り、蓋のつまみが回転する作りなどの特徴をもつ。「萬古」と刻印された破片も数片あることから、これらの破片は明治期の四日市万古焼の木型急須であると考られる。また、一部の破片の中には轆轤成形で葉掛け軸が施される破片もあるので、常滑焼の急須も含まれると推定される。陶器類でその他の生産地と器種では、松代焼の鉢と播鉢、京・信楽系の土瓶と碗皿類破片、瀬戸美濃系の土瓶と碗皿類破片、肥前系の碗（17世紀前半の古唐津碗が含まれる。伝世品であろう）や播鉢破片、在地系の甕や瓶破片などがあげられる。

A5区①次面出土遺物を概観すると、出土品の多くが明治期に比定され、少量江戸後期～幕末期に比定されるものが伴う。出土遺物中、同一品で出土量も多く、細かな生産年代が把握できる資料として、美濃系の摺絵印判染付製品が挙げられる。美濃で摺絵印判染付製品の生産が開始されるのが1882（明治15）年であることから、それらが中心的に出土しているA5区1次焼土層は1882年以降となる。また、銅版印判下絵の特許が多治見の加藤米次郎によって取得されるのが、1889（明治22）年で、一方、A5区①次面焼土層からの銅版印判製品は鉢の破片が120.2g検出されているのみである。松代における流通の初期段階とも解釈できるが、この資料が焼土層にともなうかどうかは判断が難しい。また大正期以降に比定できる製品は出土していない。

松代町史および長野市誌によれば、1891（明治24）年4月24日に東条村中条から出火し東条村と西条村、さらに旧松代町の約750戸を焼失する大火があったことが記されている。この時期は、主要な出土遺物生産年代の様相とはほぼ一致することから、A5区①次面焼土層は1891（明治24）年の大火にともなう火災層である可能性が非常に高い。

②次面 出土した遺物は、①次面検出面に比べるとごく僅かである。陶器、磁器とも肥前系と瀬戸美濃系が中心的に見られる。肥前系は江戸中期から後期にかけての染付、青磁、陶器火入れ、播鉢破片などが出土している。瀬戸美濃系は①次面出土品と大差なく、江戸後期以降の染付、明治以降の合成コバルト製品、摺絵印判製品が主で、上面からの混入がみられる。②次検出面出土陶磁器による明確な層位の年代推定は困難だが、大まかには江戸時代中期から後期にかけての包含層といえるだろう。2号遺構からは瀬戸美濃系の御室茶碗、肥前系の染付碗などの破片が出土している。いずれの破片も17世紀末～18世紀前半くらいに位置づけられる資料が多く、従って2号遺構は17世紀末～18世紀前半に帰属するものと推定される。

③次面 全体的には陶器とかわらけの出土が主で、磁器は初期伊万里皿と16世紀末～17世紀前半の景徳鎮青花破

片が出土しているのみである。陶器は瀬戸美濃系が多い。瀬戸美濃系は16世紀末～17世紀前半までのものが主で、鉄輪天目碗、長石釉白天目碗、元屋敷窯製とみられる鉄絵志野皿、黄瀬戸軸櫛文鉢破片、灰釉小皿などが出土している。肥前系の陶器はわずかで、砂目積みの溝線小皿と燗目火入れ破片が見られるのみである。出土品からみた③次検出面は、17世紀前半～17世紀後半に帰属するものと推定される。

④次面 出土量はごく少ない。瀬戸美濃系の鉄輪、長石釉、黄瀬戸軸製品、肥前系溝線小皿など国産陶磁器に紛れ、景德鎮青花破片と呉州青花系の碗皿類破片など、中国系染付がいくつか見られるのが、③次検出面と異なる点である。出土陶磁器による③次検出面との大きな時期差は認められない。

② A7区（遺物検出面3層）

①次面 全体的に明治期の摺絵印判製品が多いが、江戸中期～幕末くらいまでの陶磁器破片が混在しており、残存状態も不良でほとんど小破片である。整地の影響を大きく受けていると見られるので詳細は省略するが、A5区①次面と同時期くらいと考えられる。

②次面 検出面の出土遺物は①次面とはほぼ同様の状態であるので省略する。ただし②次検出面には焼土層が存在し、少数ではあるが比較的生産年代のまとまった資料がそこから出土している。焼土層出土の肥前系染付色絵鉢は、上絵の描写に極細の黒線を多用していることから、18世紀中～後半に生産された物と見られる。また同じく焼土層から肥前系の鉄軸櫛鉢破片や瀬戸美濃系の鉄輪碗破片なども18世紀中～後半に生産された物と見られることから、この焼土層は18世紀中～後半に帰属するものと見られる。

③次面 ①～②次面までは後世の攪乱と見られる混入が多くみられたが、③次面焼土層は比較的安定した状況で、概ね17世紀後半～18世紀前半に比定される陶磁器類が大量に出土した。その多くは同様の種類で、全体的に被熱を受けていることから、火災による一括出土と考られる。出土品は陶器が多く、磁器は少数である。以下陶器と磁器に分けて記述し、③次検出面焼土層の年代を検討する。

陶器では、完形で大量出土しているものとして、瀬戸美濃系の輪壳皿が4枚、肥前系内野山北窯産の蛇の目輪剥ぎ緑釉小皿が37枚確認される。いずれも被熱を受け、一部変色や釉薬の泡立ち、溶着がみられる。輪壳皿は淡い灰釉で、胎土が美濃のもぐさ土を使用していると見られることから、美濃系の17世紀中～後半にかけての製品と見られる。口縁は丸形である。蛇の目輪剥ぎ緑釉小皿は17世紀後半～18世紀前半にかけて、肥前系内野山北窯を中心として生産され、当時は安価の小皿として全国に流通していたとされる。他の出土陶器も瀬戸美濃系と肥前系が主で、瀬戸美濃系陶器は鉄輪片口鉢が大小数個体、呉須絵の御室茶碗、灰釉鉢、鉄輪仏飯器などが出土している。いずれも17世紀後半～18世紀前半に比定されるものである。肥前系陶器は刷毛目碗2点、堂手刷毛目碗2点、呉器形灰釉碗2点、他にも灰釉や刷毛目の碗・皿・鉢・搦鉢などの器種が多く出土している。京焼系の色絵陶器破片が出土しているが、残存不良のため器種不明である。全体的に遺物の推定生産年代は17世紀前半から18世紀前半までに比定される。

特筆すべき出土品として、円盤形で中心に穴が空く環状扁壺がある。首と底部が欠損しているが、胴部の大部分を残す。内面まで施釉され、外面は鉄輪と灰釉の掛け分け施釉である。類似品は肥前の長古谷窯で白磁の環状扁壺が出土しており、1650～1690年代に比定されている。また伝世品としては福岡県の上野焼で18世紀後半に製作された環状扁壺が現存している。鉄輪と灰釉の掛け分け施釉は上野焼、高取焼など福岡県の諸窯に多くみられるので本製品も上野焼系の可能性があるが、明確には不明である。

磁器はすべて肥前系および波佐見など肥前系統のもので占められる。多くが染付で、他に白磁、青磁がある。器種は碗・皿・鉢・瓶・花生・鬚油壺などがある。碗類は比較的少なく、飲酒などに使用するくらい大きさの端反形や丸形の小碗が主である。皿類は極少なく、通常の小皿程度の大きさの資料は破片数片のみである。完形

または状態のいい個体は小型製品が主で、型押変形紅皿が2点、極小皿破片が数点確認される。鉢は折線形で外面は輪郭線のある唐草文、内面は墨弾き技法を多用している破片が散見され、同一個体と目される。瓶は小型の高台付き玉壺春形瓶と中型瓶の胴下半が出土している。被熱が強いせいか、全体に釉薬が泡立ち胎土は灰色化している。花生は破片資料だが、竹筒を模したもので東京の加賀藩江戸屋敷で出土しているものと類似する。磁器は概ね肥前編年で1650～1690年代に比定されるものが中心である。

以上、A7区③次面焼土層の出土遺物は、陶器・磁器とも17世紀後半から18世紀前半にかけてのものが中心である。出土陶磁器の生産年代に近い時期の火災として、文献史料では、1717（享保2）年の湯本・関口火事がある。本調査地域にあたる西木町、中木町（伊勢町の枝町）および紺屋町も焼失たと記載されている（1909松代町史ほか）。したがってA7区③次面焼土層は、1717（享保2）年の湯本・関口火事にともなう火災痕の可能性が高い。ただし、18世紀前半は松代では大火が多く頻発した時期でもあり、1733（享保18）年の荒町火事、1739（元文4）年の大火でも同地区は被災していると思われる。このことから、それらの火災にともなう遺物も一部含まれる可能性がある。

③ A8区（遺物検出面2層）

①次面（第1焼土層） 全体量は少量である。初期伊万里小皿が1点出土しているが、他の遺物は江戸後期～幕末期の肥前系、瀬戸見美濃系陶磁器が多い。1810（文化7）年に生産が始まった松代焼も含まれるため、それ以降の焼土層と推定される。凶化外の遺物として、信楽焼の茶壺破片がある。文献史料では、1870（明治3）年11月に松代騒動という暴動があり、本調査地区に該当する伊勢町も放火箇所があったとされることから、それにもなう火災層の可能性が高い。

②次面（第2焼土層） 肥前系陶器は器形灰釉碗破片が数個体分、他に刷毛目碗破片、灰釉香炉破片などがある。瀬戸見美濃系は灰釉須輪小皿が破片を含め数個体分認められ、他に灰釉香炉、碗破片などが含まれる。磁器は肥前系の染付小片が3片のみで、1片には内縁に墨弾き技法が使われた染付皿である。出土遺物がA7区③次面焼土層と共通する火災層と推定される。なお、本焼土層から通称高麗茶碗と呼称される、朝鮮王朝時代に生産された碗と見られる破片が2個体分出土している。1つは若干端反形で、胎土は靨く粒子を含む。白釉が外面は腰部まで施釉される。高台は欠損している。高麗茶碗の中では「斗々屋茶碗」に分類されるものと一致するか。もう1つは数片の破片で、やや腰が張る形状で、胎土は前者と大差はないが釉薬は剥離が多く、残存した釉薬は若干青みがかかる。口縁部は欠損しているが底部は高台の直前まで残存し、釉薬も高台際まで丁寧に施釉される。

④ A9区（遺物検出面4層）

①次面（第1焼土層） 全体的に出土量は少なく、焼土層出土は極微量である。焼土層上からは摺繪印判製品等、明治中期以降の遺物が主であるが、焼土層中には被熱を受けた瀬戸系の馬目皿破片や紅猪口皿、肥前系では蛇の目凹形高台膳皿、染付合子など、江戸後期～幕末期に比定される資料がある。本地区の焼土層はA8区①次面焼土層と共通すると推定される。

②次面（第2焼土層） 出土量は極僅かで、状態のいい物も少ない。明確に第2焼土層に帰属しているのは、瀬戸見美濃系陶器の瓶子形御神酒徳利で、底部のみの残存である。鉄軸地に長石釉が散らし掛けしている。遺物の時間的には江戸後期にあたと見られる。

③次面（第3焼土層） 瀬戸見美濃系鉄軸片口鉢や灰釉碗皿類、肥前系刷毛目碗皿類、緑釉小皿など、A7区③次面出土品と同類の遺物が多いことから、それと共通する火災層と推定される。いくつか特筆すべき遺物が出土している。肥前系の色絵鬚油壺は黒線のみが残っているが、同類の遺物が東京大学本部構内遺跡より出土しており、

肥前編年で1680～1690年代に比定される。また、白釉（薬灰釉？）と鉄釉を掛け流した施釉技法の陶器が2点出土している。1点は水指の蓋で、もう1点は火種を保存・移動させるのに使用された火もらいと呼ばれる器種である。この施釉技法をもつものとして、16世紀末～17世紀前半に生産された朝鮮唐津と呼称する肥前陶器があるが、本資料は一般で朝鮮唐津とされる製品とは胎土の焼成状態、釉調などがやや異なる親があり、轆轤成形も比較的整っている。やや時代が下る上野焼または高取焼の朝鮮唐津写しの可能性も考えられる。他に朝鮮王朝時代の高麗茶碗破片も出土している。A 8区出土品とは異なる個体か。小破片で全体形状が不明なため図化は見送ったが、肥前系磁器の水滴も出土している。

④次面 ③次面焼土層を掘り下げた位置で、16世紀後半から17世紀前半に比定される資料が確認された。出土品は瀬戸美濃系製品が主で、鉄釉天目碗破片、播鉢破片、黄瀬戸軸丸碗底部、黄味を帯びたガラス状の灰釉で見込みの釉溜まりが青く空変し高台が張った形状の碗底部がある。いずれも瀬戸美濃系に連房製登窯が導入される前の、大窯後期の製品と推定される。磁器は明朝後期と推定される中国系の染付小碗が出土している。肥前系製品は砂目積の漆緑皿が出土している。肥前編年では1600～1650年代に比定される。これらの遺物を限定された単一層位からの出土として見ると、肥前系漆緑皿の存在から江戸初期～前期に比定されると考えられる。しかしながら、その他の遺物はより古い段階を示すことから、桃山期～江戸前期にかけての、比較的長い時期幅をもつ包含層の可能性もある。

⑤ B 7区（遺物検出面4層）

①次面（焼土層） ①次面上層からは、瀬戸製本業タイルや銅版印刷製品が出土している。明治後期～大正期に比定される。焼土層からは瀬戸美濃系の摺絵印判飯碗の蓋が約10個体分、コバルト染付の大型草花文植木鉢が数個体出土している。焼土層に含まれる物と含まれないものがあるが、それぞれ同一文様なので同時期の廃棄と考えられる。他の遺物は、瀬戸美濃系の合成コバルト染付磁器やクロム青磁製品が多くみられる。肥前系は江戸後期から幕末までのものが出土しているが、瀬戸美濃系に比べると少量である。陶器は江戸後期以降の瀬戸美濃系破片と松代焼破片が主で、瀬戸系銅緑釉火鉢や捏鉢などの大型品が見られる。A 5区1次焼土面と同様の様相を呈していることから、1891（明治24）年火災層と目される。

②次面（焼土層） ②次面焼土層下層からは、残存状態が良い物として、瀬戸美濃系の御室茶碗が2個体、灰種小碗が約8個体、具須絵皿が1個体出土した。一部被熱を受けている。肥前系陶磁器は小破片が多いが、磁器では碗・皿・瓶類などが多く認められる。塗埋手で唐草文が描かれた仏花器の上部、色絵の小瓶なども出土している。陶器では播鉢の破片などがある。時期的には17世紀後半から18世紀前半にかけてのものが多く見られる。

①次面に出土する江戸後期～明治期の染付などが若干認められる。しかしながら残存状態が良くかつ被熱を受けている瀬戸美濃系陶器類や肥前系陶磁器類は、A 7区③次面とほぼ共通する時期と目される。

③次面（焼土層） 瀬戸美濃系の御室茶碗が破片含め約8個体分出土している。これらは②次面焼土層下層出土品と全く同質である。肥前系磁器では、中央に5弁花文が入り周囲に蛸唐草文が意匠される輪花中鉢や、胴部に鉄釉が施される染付小瓶なども出土している。②次検出面焼土層下層と同様の1717（享保2）年の火災層と推定される。②次面と③次面は、焼土層が2面に検出されていることから、②次検出面焼土層の上層には1717（享保2）年に近接する時期、1733（享保18）年あるいは1739（元文4）年の火災層が含まれ、②次検出面焼土層下層と③次検出面焼土層は一括で1717（享保2）年の火災層になるものと見られる。

④次面 肥前系の陶器小皿が出土している。胎土は暗茶で、ぼつたりした鉄釉が施される。底部は糸切のみで高台が成形されない。肥前系の金石原窯製品に近似しており、時期的には17世紀前半～中頃に位置するものだろう。

⑤次面 瀬戸美濃系陶器が多く出土しており、鉄軸榑手天目碗や瓶破片、青織部徳利、絵志野小皿、絵志野汁次、菊印花志野小皿、陶器製キセルなどの優品が認められる。また残存状態が不良のため図化対象外となったが、総織部碗、志野端反皿、灰軸折縁皿などの破片も出土している。かわらけなどの土器製品が次に多くみられ、口縁周辺に煤が付着しているものが多いことから、灯明皿として使用されたものと推定される。肥前系は初期伊万里の筒形染付碗と絵唐津破片が比較的状态が良く、他にも小皿や鉢の破片が散見される。瀬戸美濃系に比べると少量である。中国系青花破片も小片だが確認される。胎土が灰色で厚みがあることから、景德鎮以外の諸窯の生産品と推定される。出土遺物を概観すると、概ね17世紀初頭から前半にかけての生産品であると認められる。したがって⑤次検出面は17世紀前半の江戸時代初期に比定される。

⑥ C6区（遺構検出面7層）

①次面 瀬戸美濃系の合成コバルト染付製品破片が極少量出土。明治前期以降と見られる。

②次面 江戸中期から明治初期までにわたる、比較的長い期間の陶磁器が出土している。瀬戸美濃系陶磁器は、磁器は兵須または合成コバルト染付の碗類や調徳利がみられ、幕末から明治初期のものと推定される。陶器は19世紀前半までに比定される被熱を受けた土瓶破片や、江戸後期の汁次や碗皿類の破片が多い。肥前系陶磁器はそれよりやや古段階のものが多く、磁器は18世紀前半くらいのコンニャク印判猪口破片、輪郭線を描いた上で中をダミ塗りする蛸唐草文様を持つ皿の破片、あるいは18世紀後半～後半頃に見られる花唐草文皿などが見られる。陶器は兵器形灰軸碗や刷毛目破片、播鉢など、17世紀末までに遡る可能性があるものも出土している。他の産地として、松代焼（1810年以降生産）、常滑深掛け製品（1820年代以降）のものも見られる。②次面の性格ははっきりとしないが、3号遺構からは、明治初期くらいの瀬戸美濃系染付碗や白磁の陽刻開切四方小皿、江戸後期以降の染付碗が出土している。また、高台内に「日本明治年製」と銘が入った筒形染付碗が出土している。これら明治期陶磁器の遺物は、3号遺構からは下層の④次面までみられることから、この遺構に、明治初頭から前期の時期に陶磁器類が一括廃棄されたものと推定される。

③次面 ②次面から出土した17世紀末～18世紀後半にかけての陶磁器とはほぼ共通する。②次面から③次面にかけては江戸中期から明治初期にかけて暫時的に堆積した包含層の可能性はある。

④次面 肥前系は初期伊万里大皿の破片、桶形の小猪口、内野山北窯系緑軸小皿、べた底の無施軸播鉢底部2点、瀬戸美濃系では鉄絵灰軸碗、口縁のみに鉄軸を掛けた碁筒底小皿などが出土している。他に土器破片（かわらけ、内耳鍋？）なども出土している。初期伊万里大皿以外は17世紀後半から18世紀前半にかけての遺物で占められるため、その時期の包含層と推定される。初期伊万里大皿は一定の期間伝世されたものであろう。

⑤次面 肥前系は古唐津の小片口鉢、白磁香炉、兵器形透明釉碗などが残存良好な形で出土し、破片では初期伊万里染付小皿・青織破片・鉄軸破片・白磁陽刻破片・白磁鉢破片などがみられる。いずれも17世紀前半～17世紀後半に位置づけられる。瀬戸美濃系は少量で、ほとんどが破片資料である。鉄軸の天目碗と播鉢、黄瀬戸軸に銅緑釉流しの破片などが認められる。他にはかわらけなどの土器製小皿が2点出土している。出土遺物から見て、⑤次面は17世紀前半～17世紀後半に位置づけられる。

⑥次面 残存状態のよい出土遺物はないが、全体的には瀬戸美濃系の破片が多く、黄瀬戸軸に銅緑釉流し鉢破片、黄瀬戸軸小皿破片、鉄軸皿破片などがある。肥前系は初期伊万里片と古唐津片が少量ある。また中国系青花も、景德鎮系の薄手のものとそれ以外の厚手の破片がある。肥前系は17世紀前半、中国系は16世紀末～17世紀にかけてのものである。出土遺物の時期からみて、⑥次面は大体17世紀前半に比定できよう。

⑦次面 出土遺物の時期的様相はやや混乱しており、18世紀後半から幕末にかけてのもの、17世紀後半のもの、16世紀後半～17世紀前半のもの大きく三分される。18世紀後半から幕末にかけてのものは、蛸唐草文の瓶子形

御神酒徳利と染付小片がある。これらの一群は④次面まで確認されている、3号遺構にともなう遺物の可能性がある。17世紀後半のものは肥前系の染付碗で、花びらが繊細なダミ塗りで描かれ、高台内に「宣明年製」銘がある。年代的には1650年代から1670年代に限定されるもので、期的には⑤次面に該当するものである。後世の攪乱にあった可能性がある。16世紀後半～17世紀前半のものは、瀬戸美濃系のもので占められ、端反の志野皿と、高い高台をもつ赤織部で濃淡の鉄彩で鳳凰が描かれた皿の見込みが出土している。大きく異なる時期幅の遺物が含まれるため、層位の年代推定は困難ではあるが、18世紀後半から幕末にかけてのものと17世紀後半のものを後世の混入であると考えれば、⑥次面と同様、17世紀前半に比定できるであろう。

⑦ D5区

①次面 水甕、播鉢、土器製火入と蓋など、大きい個体が比較的残存率がよい状態で出土している。瀬戸美濃系陶器では、19世紀前半に生産された胴部に陽刻を持ち灰軸地に銅緑軸が施された水甕が2個体分、他に土鍋や捏鉢、瓶などの大型日常品の破片が多く見られる。他に碗皿類も見られるが小破片である。磁器は比較的少なく、一部江戸後期から幕末にかけてのものがみられるが、明治後期以降の銅版印判なども見られることから、後世に攪乱されている可能性が大きい。肥前系陶器は、底部の周囲に高台状の輪が接合された18世紀後半～19世紀前半期の生産品に特有の鉄軸播鉢が出土している。また磁器は、染付碗や皿などの破片が多量に出土し、青磁破片や色絵製品も見られる。ほとんどは18世紀後半から19世紀前半にかけてのものと見られる。他に松代焼や常滑焼深掛け急須の蓋、かわらけ、焙烙などの土器破片などがみられる。期的には江戸後期から幕末にかけての包含層であろう。

②次面 肥前系磁器の破片が多く見られ、期的には18世紀代のものが中心である。器種は碗・皿・鉢・小瓶などが中心である。ほとんどが染付で、半筒形碗や広東碗など、19世紀前後に比定されるものが良好な状態で検出されている。一部青磁破片が認められる。陶器は呉器形碗や播鉢の破片などが見られる。瀬戸美濃系の製品は細かく粉砕された破片が多量にあるが、原型を留めるものはみられない。灰軸や掛け分けの碗や皿が多いようである。京・信楽系の小杉碗が出土しており、破片も含めると数個体あるようである。国産品以外では明代の中国竜泉窯系の無地青磁碗が出土している。高台内に蛇の目軸刺ぎがされる。16世紀の戦国時代に渡来した竜泉窯系製品に共通する特徴であることから、伝世品と推定され、焼き継ぎ痕が一部残る。全体的に残存状態の良いものは19世紀前後の製品で、また焼き継ぎ痕のある遺物が見られることから、②次面は陶磁器の焼き継ぎ直しが始まる江戸後期以降、文化・文政期（19世紀第1四半期）頃に位置するものと思われる。

③次面 瀬戸美濃系陶器と肥前系染付磁器がある江戸中期の一群、中国系青花、初期伊万里白磁や青磁、志野碗皿がある江戸初期の一群の3つに大別できる。層序を考えれば、③次面は江戸中期の一群に位置づけられるが、出土陶磁器のみでは詳細は不明である。

④次面 江戸初期に比定される美濃系の灰軸小皿の他、いくつかの瀬戸美濃系破片とかわらけなど土器類が出土している。③次面出土の江戸初期に位置づけられる一群はこちらに含まれるかもしれない。

⑤次面 ④次面出土と接合するかわらけの部分が出土している。

⑧ D6区（9層）

①次面 練糸鍋という蛋の糸をほぐす盥形器種の破片が出土している。在地の松代焼系と中信の赤羽焼系があるが、本出土品は胎土質から赤羽焼と目される。またD5区①次面出土と同型の瀬戸美濃系水甕も出土している。他に陶器は益子系の甕など、磁器は瀬戸美濃系の合成コンパルト製品から銅版印判皿まで、明治後期以降と目される新しい製品が多い。

②次面 一部ゴム印などの昭和前期に見られる陶磁器もみられるが、全体的には江戸時代後期から幕末にかけて

の製品が中心を占める。肥前系はほとんどを磁器が占め、よろけ織文端碗や広東形碗など、江戸後期から幕末にかけての典型的な生産品が多く見られる。白磁の鳥形水滴なども出土しているが、頭部は欠損している。他に染付の碗・皿・鉢・瓶などの破片が多数出土している。青磁と色絵製品も少数見られる。陶器は段階的に古い呉器形碗や刷毛目、灰釉鉢破片などが見られる。瀬戸美濃系は江戸後期以降の染付磁器も少数みられるが、重量的には圧倒的に陶器が多い。図化した香炉は状態が良く、大半は破片である。確認できる器種として、碗・皿・火鉢・蓋・土瓶・仏飯器・火入・控鉢などが挙げられる。釉薬は灰釉と鉄釉が多数だが、他にも銅緑釉・白化粧・錆釉などがある。他の産地の資料として、松代焼の捏ね鉢や碗、京・信楽系の小杉碗や緑釉土瓶蓋など多数、常滑系の小甕、かわらけや火鉢など土器製品が出土している。②次面の時期は、江戸後期から幕末期のものが中心なのでその時期に帰属すると思われるが、明治以降の遺物も一定数認められるので、江戸後期から明治期にかけての暫定的な包含層の可能性もある。

③次面 ②次面と同様、一部摺絵印判手など明治以降の遺物が混入する。全体的には江戸中期から後期にかけての遺物が多い。肥前系陶磁器には生産時期に幅があり、17世紀前半の砂目積皿や初期伊万里系のものから、18世紀代に比定されるものまでである。全体量としては18世紀代のものが中心である。染付磁器の碗皿類が主な器種である。瀬戸美濃系は明治以降の製品を除きほぼ陶器のみで、碗皿類は灰釉が中心で一部鉄釉掛け分け製品がある。肥前系と同様18世紀代のものが中心と思われる。他に京・信楽系の簡略な色絵碗、かわらけなど土器類が出土している。

④次面 出土量は少量である。肥前系で染付碗破片、瀬戸美濃系陶器で摺鉢破片などが出土しているが、状態が悪く包含層の年代は判然としない。肥前系染付碗破片には江戸前期にみられる蛇文様が描かれる。出土の半分近くはかわらけなど土器類である。江戸初期の鉄絵志野皿破片が1片だけ出土している。

⑤次面 16世紀末～17世紀前半の呉州青花皿小片と初期伊万里染付碗の一部が出土している。他はほとんど細かい破片だが、江戸初頭～前期の肥前系・瀬戸美濃系破片が中心である。明治以降の染付も一部見られる。土器はかわらけの他に全面に煤が付着した焙烙破片が見られる。

⑥次面 ⑤次面出土と接合する初期伊万里染付碗、瀬戸美濃系の折縁皿、天目碗破片など、桃山後期から江戸前期にかけての遺物が確認される。土器は多く、かわらけ・内耳鍋破片の他、瓦質の三足火鉢、やや口径が大きく厚手の鉢？が見られる。

⑦次面 ⑥次面にかけて、瀬戸美濃系の摺鉢が、ほぼ完形で出土している。口縁の内面形状が鉢の傾きに沿って終焉していることから、1570～1600年代くらいにかけての大窯後期に比定される。他に自然釉が掛かった信楽系の壺唇部破片が出土している。

⑧次面 瀬戸美濃系の灰釉天目碗、無地志野の筒形向付、肥前系の絵唐津大皿破片、砂目積皿が出土している。他に土器破片など。瀬戸美濃系桃山後期生産の可能性があるが、肥前系は江戸初期に入るものであることから、江戸初期の包含層と推定される。

⑨次面 瀬戸美濃系は天目形の長石釉碗が出土している。形状と釉薬の厚みは江戸初期～前期のものとは異なることから、大窯後期の生産と思われる。信楽系火入は無釉で、胎土に溶解した長石粒子が目立つ。室町末から江戸初期にかけての侘茶文化に関連する製品と推定される。他に古唐津碗破片と絵志野皿破片など同時期の製品に比定できるものが出土している。その中に弥生時代後期の箱清水式土器破片が検出されていることから、⑨次面は松代城下町形成の創生期に近いと思われる。

⑨ F2区(5層)

①次面 5号遺構は波佐見系のくわんか碗、瀬戸美濃系の掛け分け仏飯器が2個体出土している。何らかの供

変痕が、瀬戸美濃系仏花器から江戸後期以降に比定される。4号遺構から磁器の銷軸端反碗が出土している。遺物は17世紀末～18世紀前半に比定される。検出面は明治期以降の銅版印刷鉢から江戸中期くらいまでの遺物が混在しており、年代の特定は困難である。

②次面 一部攪乱がみられるが、焼土層から出土した遺物はA7区③次面焼土層出土遺物と共通している遺物が多数検出されていることから、1717(享保2)年火災痕と推定される。出土遺物の中には、年代が比較的详细に限定できる資料があり、美濃の乙塚東窯製品とみられる摺絵入りの製壺は1690年代から1710年代の生産と見られる。全体に被熱を受けているものが多い。

③次面 ②次面出土品と共通する製品の細片が多く、遺物からは②次面との様相の違いは認められない。

④次面 肥前系陶器が多く認められる。呉須絵で山水文が描かれ、高台内に「清水」銘が刻印された碗や、刻印入り中皿破片など、京焼を写した製品が多い。磁器では高台内に「寛」銘が書かれた染付碗があり、いずれも肥前編年で1650～1690年代に比定される資料である。破片資料でも刷毛目唐津の大鉢や初期伊万里青磁皿などの肥前系陶磁器が多く見られる。瀬戸美濃系は灰釉碗破片が少量みられるのみであり、③次面とは一線を画す。以上の点から、④次面は17世紀後半江戸時代前期の包含層と推定される。

4 生産地比率の推移と器種組成からみた各地点の様相

第3項で年代が比較的判明している焼土層または包含層が明らかになった。その中から特に良好な地区と焼土層・包含層を抽出して、その年代別に出土陶磁器の生産地別の破片重量比を算出し、年代別の陶磁器の流通の推移を検討することにする。遺存個体数ではなく破片重量を元に生産地比率を算出した理由は、包含層の下層において残存割合が低いものが多く、個体数で把握することが困難だったことによる。また、破片などをふくめた総重量を基準にして生産地比率を算出することにより、分析対象とする箇所において客観的な数値を求めることができる。

分析対象とする箇所は、明治中期として1891(明治24)年の火災層と推定できるA5区①次面、江戸後期19世紀前半としてD5区②次面、江戸中期として1717(享保2)年の火災層と推定できるA7区③次面、これより下層の17世紀後半以前の時期は、1地点での出土量が少ないため、17世紀後半の江戸前期後半としてC6区⑤次面とF2区④次面を対象とし、17世紀前半の江戸初期～前期前半に比定される資料が中心に検出されている地点として、B7区⑤次面、C6区⑥～⑦次面、D6区⑥～⑧次面の3地点を選択した。以上5つの時期における出土陶磁器の生産地組成を数値化し、円グラフで表した。

推定生産地については、グラフ上では肥前系を中心とする九州地方の陶磁器と、瀬戸・美濃系陶磁器の2大生産地の関する流通の変移をより把握し易くするため簡略化を行った。例えば、波佐見系・筑前系などの肥前系近隣北部九州諸窯については「肥前系陶器(または磁器)」として一括した。美濃系と確認できる資料についても「瀬戸美濃系陶器(または磁器)」に一括し、江戸中期以降の信楽水滸土陶器については「京・信楽系陶器」として、またA5区①次面で出土した京焼系の磁器類は「京焼系磁器」と、大量に出土した土瓶、急須類は、一部常滑焼と四日市万古焼と区別が困難なものがあるため「常滑・万古系陶器(または焼締)」とそれぞれ一括している。

かわらけや焙塔など土器類は、おそらく在地生産と考えられるが、詳細不明のため「不明土器」とした。産地不明の陶器類に関しても同様である。

また、17世紀末から18世紀前葉にかけての波佐見・平戸系や18世紀後葉から19世紀前葉にかけての瀬戸美濃系には、染付磁器を意識した半磁半陶胎土製品がみられるが、それらについては磁器生産を意識した製品のため、磁器の範疇に含めてある。

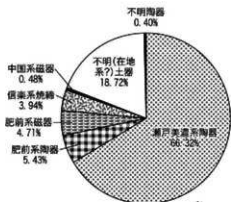
本項で分析対象とした資料は、基本的に器類の範囲を対象とし、焼き物でも瓦や土管など建築材は除外してある。また、17世紀前半に比定される層の中に、若干の明治以降の印刷製品が見られるなど明らかに混入と見られるものについても分析対象から除外した。

以下は年代の古い順に記述し、また出土資料の特徴から当時の該当地区の性格が窺えるものについて、推論を試みた。それにとめない、残存良好で出土遺物の点数が確認できるものについてはなるべく記述するよう努めた。

① 17世紀前半期（江戸初期～前期前半、B7区⑤次面・C6区⑥・⑦次面・D6区⑥～⑧次面、

有効資料合計重量4,566.8g）

瀬戸美濃系陶器が7割近い組成を示した。代表的な製品として、鉄軸天目碗と鉄軸播鉢を筆頭とした鉄軸製品が挙げられる。播鉢は当該期で瀬戸美濃系製品以外のもが出土していないので、日常雑器としては独占していた器種と推定される。他の鉄軸製品器種として、小碗・蓋・瓶などがあげられる。他に志野釉製品（天目碗・碗・小皿・汁次）、織部系製品（青織部瓶・赤織部小皿・総織部碗）、黄瀬戸釉製品（折縁小皿・碗・鉢）、灰釉製品（碗・小皿・絵付瓶）など、17世紀初頭から17製品前半の連房式登窯で生産されたと考えられる物が中心である。また、一部16世紀後半から末までの大窯後期製品が見られる。肥前系陶磁器は、陶器、磁器ともそれぞれ約5%で、合計約10%に留まった。陶器は小皿が中心で、砂目積みの清緑小皿が多い。ほかに碗、片口鉢、絵唐津小皿、絵唐津大皿などの破片が散見される。磁器は初期伊万里の染付がほとんどで、一部銷釉薬製品なども確認される。おもな器種は碗、小皿、大皿の破片などである。信楽系統締製品は点数としては碗の底部と壺の肩部破片の2点だが、重量比で計算したためやや多目の比率を示している。中国系磁器は青花碗または皿の破片がほとんどで、景德鎮製品などは他製品より薄手作りのため、重量比としてはやや軽く出ている。景德鎮青花製品の他に呉州手の皿破片も出土している。土器は明確な産地が不明だが、おそらく在地で生産された物であろう。かわらけ、焙烙などの器種組成で、全体の2割弱を占める。17世紀の前半に比定される層の3地点から、織部系製品、志野釉製品、黄瀬戸釉製品、初期伊万里製品、中国系青花など、当時としても高級な部類に属する物が多数出土していることから、この3地点の近辺に武家屋敷または裕福な商家など、上層階級に属する家が存在していた可能性が高い。



17世紀前半出土陶磁器比率
(B7区⑤次面、C6区⑥-7次面、D6区⑥-8次面)

② 17世紀後半期（江戸前期後半、C6区⑤次面・F2区④次面、有効資料合計重量2,449.7g）

産地の様相は、17世紀前半期における瀬戸美濃系と肥前系の割合から数値が逆転し、肥前系陶磁器が7割近い組成を示した。肥前系陶器と磁器の割合はほぼ同数である。肥前系陶器は京焼風陶器碗が多く確認される。また、口縁部だけに鉄軸を施した17世紀後半の肥前系播鉢が新たに組成に加わり、重量から見ると瀬戸美濃系播鉢から肥前系播鉢へと移行していくように思われる。他に刷毛目の碗類、皿類や刷毛目に緑釉を施した二彩手鉢などが見られるようになる。灰釉または鉄釉など単色釉の碗、皿、片口鉢などは引き続き見られる。肥前系磁器は染付製品の他にも青磁、白磁、銷釉、色絵の製品または破片があるが、主なもの染付製品で占められる。碗類が小型から中型、大型のものまであり、他にも皿類、鉢類、瓶類、高台付三足香炉などが見られ、多様な器種組成である。瀬戸美濃系陶器は灰釉のみ、または灰釉に緑釉を流し掛けした製品が多くなり、碗類、皿類がある。鉄軸天目碗や鉄軸播鉢が17世紀前半期に引き続いて見られるが、残存状態が良い物は少ない。中国系磁器は芙蓉手里

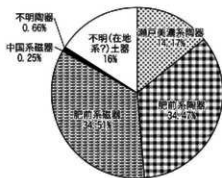
の破片1片のみの出土である。土器はかわらけを中心に2割弱を占める。出土陶磁器の全体的な様相から見ると、当時としては一般への普及が進んでいないと考えられる肥前系磁器が3割以上みられ、特出するほどの製品は認められないものの、色絵破片や香炉などが含まれることから、武家階級に属する身分の人間が居住していたものと考えられる。近似する資料が一括出土している事例として加賀藩江戸屋敷内の足軽・間番長屋跡出土品があり、同足軽・間番長屋は1665(寛文5)年に設置され1682(天和2)年に焼失したとされていることから、年代的にも非常に近似しているといえる。

③ 1717(享保2)年焼土層(江戸中期、A7区③次面、有効資料合計重量18,691.8g)

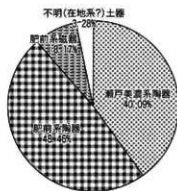
瀬戸美濃系陶器と肥前系陶器の重量比は、大体4:5という割合になっている。産地によってやや器種に偏りが見られ、瀬戸美濃系陶器は直径約17cmの灰釉輪壳皿がほぼ完形で14枚、鉄片口鉢が破片で4~5個体、御室茶碗が1個体確認される。一方肥前系陶器は緑釉小皿がほぼ完形で37枚、呉器形碗が完形で2個体、刷毛目腰張碗が破片3個体、打刷毛目浅形碗が破片で2個体確認される。この組成から、五寸皿と片口鉢は瀬戸美濃系陶器を、小皿と碗類は肥前系陶器を使用していた状況が窺える。他に肥前系または上野焼系と目される環状扁壺があるが、出土例が極めて少ない特殊な製品であることから、詳細は不明である。磁器は肥前系のみが見られ、重量は全体の1割に満たない。残存状態が良い物は直径7cm強の端反小碗2点、直径約5cmの極小碗数点、紅皿の可能性のある花菱形極小皿が2点、鬘油壺2点、器高16cmの小瓶1点を数えるのみで、小型品に限定される。大鉢や竹形花生破片なども認められるが残存率が低く、他資料の残存率の高さから考えると、それらと共伴する可能性は低いと思われる。以上のA7区③次面出土陶磁器を概観すると、基本的には主要な碗皿類は瀬戸美濃系陶器と肥前系陶器で器種や大きさにより分けて選択されて揃えられ、一部の小型製品に肥前系磁器製品が少量伴うといった状況が窺える。前述した17世紀後半期の様相とは大きく組成が異なっており、年代差による違いも考えられるが、当時としては安値だったと思われる質素な日用品が主体的に出土していることを考慮すると、17世紀後半期で分析対象とした地点と異なり、本地点は町屋で、それにより組成が異なっている可能性も考えられる。

④ 19世紀前半(江戸後期、D5区②次面、有効資料合計重量2,835.5g)

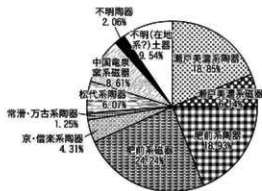
19世紀前半に限定できる良好な検出面が少なく、D5区②次面出土遺物のみの分析となった。同時期にあたる検出面は地層が浅い分、後世の擾乱などが多くと推定される。肥前系磁器が比較的多く、半筒形碗や広東形碗など、18世紀後半から19世紀前半にかけて生産されたものが見られる。また少数ながら瀬戸美濃系磁器が見られることから、本検出面は19世



17世紀後半出土陶磁器比率
(C6区5次面、F2区4次面)



1717年焼土層出土陶磁器比率
(A7区3次面)

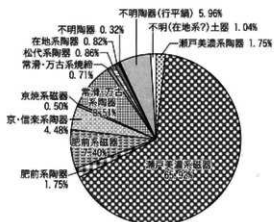


19世紀前半出土陶磁器比率
(D5区2次面)

紀以降になるものと推定される。前段階に比べ生産地が多様になっており、京・信楽系陶器の杉碗や在地の松代焼の鉢・播鉢などの破片、藻掛け軸が施された常滑系急須などが出土している。また、重量比率では中国竜泉窯系磁器が1割弱の数値を示しているが、個体数は青磁碗1点のみの出土である。分析対象となる出土資料が若干少なく、中国系磁器の割合に偏りがみられるが、他は大体の19世紀前半の組成を示しているといえる。中国系竜泉窯系青磁碗は中国明代に生産されたもので、室町時代中期から戦国時代にかけて輸入され、中世居館跡や戦国期城郭跡でも出土している。このことを考慮すると、庶民が所有したものとはいえず、本地点は武家階級に関連のあった地点と推定される。竜泉窯系青磁碗は鉛による焼き継ぎ痕の跡がみられ、破損したあとも補修され大切に使用されていたことを伺わせる。

⑤ 1891(明治24)年焼土層(明治中期、A5区①次面焼土層、有効資料合計重量31,775.0g)

全体的には瀬戸美濃系の磁器が圧倒的に多く、全体の6割半を占める。前述したか特に調徳利が多いが目立ち、摺絵印判汽車文様調徳利は総破片重量が8,434.6g出土している。同製品の完形に近い資料が、1点161gあることを考えると、概算で汽車文様調徳利だけで52本分ある計算となる。その他文様の磁器製調徳利重量合計が3,314.7gで、同様に計算すると20本から21本となり、磁器製調徳利だけで70本以上に上ると見られる。出土重量からみても、同地点での磁器製調徳利の比率は全体の1割以上ある計算となる。飲酒に使用される薄手盃は合計で1,478.2g確認され、完形個体で1点約30gあることから、点数としては50点前後存在すると見られる。また、飯碗・湯飲碗として使用されたと見られる中碗・蓋付碗・小碗は、瀬戸美濃系磁器のみで3,971.7gと全体の1割以上を占める。他に目立つ器種として、常滑・万古系陶器土瓶と焼締急須が多い。破損が多く完形品が出土していないため、基準となる1個体の重量は不明だが、重量的には陶器土瓶で2,702.5g、焼締急須で224.6g出土しており、合計で全体の1割弱を占める。行平鍋は明確な生産地が不明だが、量的に多く出土しているため他の不明陶器と分けた。全体の約6%を占める。肥前系陶磁器はほとんどが江戸期の碗類で伝世品と考えられ、磁器は染付、陶器は刷毛目や灰釉碗が中心で全体の1割弱の出土である。以外に少数だったのが松代焼を始めとした在地区陶器類で、1.6%しか確認されなかった。該当地点の性質にもよるが、当該期ではすでに瀬戸美濃系陶磁器に押され、需要が激減していたのかもしれない。A5区①次面焼土層出土品を概観すると、調徳利や盃、土瓶、行平鍋などの器種が際立って多く、一般の家屋とは考えにくい。多量の出土品から陶磁器販売店などの可能性も考えられるが、飲酒や飲食に関係する器種に著しく偏っていることを考慮すると、現代の居酒屋のような性質をもつ店と考えた方が妥当かもしれない。



1891年焼土層出土陶磁器比率 (A5区①次面)

5 まとめと今後の課題

以上、松代城下町跡から出土した陶磁器観察分析を行った結果、概ね以下のような点が明らかになった

- ① 1891(明治24)年と推定される火災層の確認(A5区①次面)と、当時流通していた陶磁器の様相が確認された。また出土陶磁器の器種組成から、本地点には居酒屋のような性質をもつ店があった可能性がある。
- ② 1870(明治3)年松代騒動関連と推定される火災層の確認(A8区①次面)と当時流通していた陶磁器の

様相が確認された。

- ③ 19世紀前半江戸時代後期の包含層（D5区②次面）が確認された。出土陶磁器から武家に関連する地点と推定される。
- ④ 1717（享保2）年の湯本・関口火事関連と推定される火災層の確認（A7区③次面他）が確認され、当時流通していた陶磁器の生産地様相が明らかになった。器種や大きさにより、肥前系と瀬戸美濃系の選択分けがされていた可能性が強く、また出土品の特徴から、本地点は町屋の可能性が高いと見られる。
- ⑤ 17世紀後半江戸時代前期の包含層（C6区⑤次面、F2区④次面）が確認された。また、肥前系陶磁器が全体の約7割を占めるのに対し、瀬戸美濃系の割合が17世紀前半に比べ激減し、染付磁器の碗皿類の他に、播鉢など日常雑器も肥前系のもが主体的になることが確認された。対象地点は、出土陶磁器の様相から武家屋敷だった可能性が高い。
- ⑥ 17世紀前半江戸時代初期～前期に比定される包含層（B7区⑤次面、C6区⑥～⑦次面、D6区⑥～⑧次面）が確認された。瀬戸美濃系陶器が7割弱を占め、織部製品や志野製品、黄瀬戸製品、天目茶碗など高級陶器が一定数検出され、対照的に播鉢など日用雑器も瀬戸美濃系陶器が使用されていたことが明らかになった。肥前系陶磁器は全体の1割弱で、うち染付など初期伊万里製品が半数近くを占めていた。対象とした地点は、出土陶磁器の様相から、いずれも武家屋敷だった可能性が高い。
- ⑦ 16世紀末桃山時代末期に比定される可能性が高い包含層（D6区⑨次面）が確認された。

今後の調査課題としては、後世の擾乱等が多くみられたために判然としなかった江戸後期から幕末期について、特に在地で生産された松代焼についての調査については今後さらに検討を重ねる必要があると思われる。また出土遺物が少数だったため、第4項の分析対象から漏れてしまったが、A8区②次面焼土層とA9区③次面焼土層からは朝鮮王朝系碗破片や朝鮮唐津風の水指蓋・火もらいなど特筆すべき製品が出土しており、茶道などに関連する製品を所有するような家があったことが窺える。これらの焼土層はA7区③次面焼土層（1717年火災痕）と共通すると見られる。

意外だったのが越前系、丹波系、備前系の焼締類がほとんど見られなかったことである。播鉢は瀬戸美濃系、肥前系によって占められ、江戸後期以降は松代系も加わるが、壺類をふくめて西日本の焼締系統製品は皆無である。

今回、16世紀末以前に比定される遺物包含層はほとんど確認できず、またその時期に伴う中国系青花磁器や青磁なども、比較的残存状態のいいものは後世の包含層の一部見られるが、下層では17世紀前半期の包含層で明代後期以降の青花磁器小破片が少量確認できる程度である。このことは松代城下町成立の時期について大きな意味を持つ。長野市誌および松代町史では、北国街道が松代城近辺を通行するようになったのが、1583（天正11）年、上杉景勝が命を絶したことによるとされており、それを基に考えれば、城下町としての成立は1580年代以降と考えられる。今回の発掘調査では、比較的その内容に即した生産年代の遺物が最下層から確認されており、その意義は大きいものと思われる。

しかしながら、松代城下町成立の全貌をつかむには、今回の出土陶磁器分析のみではやや材料不足なので、同時に他出土資料や文献資料を精査し、検討を重ねる必要がある。特に今回は明確な包含層が確認できなかった海津城成立前後から武田領時代（1560～1582年）については、引き続き周辺地域の精査を継続したうえで、注意して検証していく必要がある。

引用・参考文献

- 長野県埴科郡松代町役場 1909『松代町史』
- 長野市 2001『長野市誌』第9巻 旧市町村史編 旧埴科郡・更級郡
- 山梨県教育委員会 1998『諏訪河岸跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集
- 山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第215集
- 松本市教育委員会 2002『松本城下町跡』六九 第四次
- 新宿区内藤町遺跡調査会他 1992『内藤町遺跡』
- 瀬戸市歴史民俗資料館 2002『大正二年のせともの屋』特別企画展図録
- 静岡県埋蔵文化財センター 2002『江戸時代の瀬戸窯』企画展図録
- 静岡県埋蔵文化財センター 2003『江戸時代の美濃窯』企画展図録
- 岐阜県陶磁資料館 1996『明治の染付 摺絵・銅版』
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2001『三条界隈のやきもの屋』企画展図録
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2003『織部の流通圏を探る 東日本』企画展図録
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2004『織部の流通圏を探る 西日本』企画展図録
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2004『土岐市収蔵品図録Ⅱ—収蔵品にみる美濃窯の歴史』
- 土岐市 1997『土岐市で作られた幕末・明治の染付』土岐市陶磁資料収集選定評価委員会 監修
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の福年』九州近世陶磁学会10周年記念
- 九州近世陶磁学会 2001『国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる』第11回 九州近世陶磁学会資料
- 飯島哲也 2004『発掘現場からみた松代城下町』真田宝物館主催シンポジウム「真田の城と城下」発表資料
- 井上喜久男 1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社
- 道川吉生 2004『江戸のミクロコスモス 加賀藩江戸屋敷』新泉社 シリーズ「遺跡を学ぶ」011
- 大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯 肥前窯』新泉社 シリーズ「遺跡を学ぶ」005
- 大橋康二 監修 2004『初期伊万里展』NHKプロモーション
- 唐木田又三 1993『信州 松代焼』信毎書籍出版センター
- 金田真一 1982『国焼茶碗のふる里を訪ねて』里文出版
- 古泉 弘 2002『地下からあらわれた江戸』教育出版 江戸東京ライブラリー 19
- 福田敏一 2004『新橋駅発掘 考古学からみた近代』雄山閣
- 長谷部楽爾・今井敦 1995『日本出土の中国陶磁』平凡社版中国の陶磁12
- 西田宏子・出川哲朗 1997『明末清初の民窯』平凡社版中国の陶磁10
- 西田宏子 1983『萬古焼 根津美術館開催の「萬古焼展」より』「小さな書 6月号」創樹社美術出版
- 高鶴 元 1976『上野・高取』講談社 日本のやきもの15
- 沢田由治 1974『日本のやきもの13 常滑』淡交社
- 林屋晴三 1992『高麗茶碗 1～5巻』中央公論社
- 信濃毎日新聞社 1977『信州の焼き物』
- 佐野美術館 1999『美濃のやきもの 貴瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の系譜』展覧会カタログ
- 根津美術館 2002『知られざる唐津—二彩・単色輪・三島手』展覧会カタログ
- 出光美術館 2004『古唐津』展覧会カタログ
- 『増補 やきもの辞典』平凡社
- 矢部良明ほか 2002『角川日本陶磁大辞典』角川書店

第2節 松代城下町跡出土木製品の樹種同定(1)

藤吉田生物研究所

1 試料

試料は、平成13年度に長野市教育委員会より委託された、松代城下町跡から出土した服飾具3点、食器1点、容器8点の合計12点である。

2 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柀目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果(針葉樹3種、広葉樹5種、草本類1種)の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

① マツ科ツガ属(*Tsuga* sp.) (遺物No1、3-1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。柀目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はスギ型、ヒノキ型で1分野に2~4個ある。細胞壁には数珠状末端壁がある。上下両端には放射仮道管がある。板目では放射組織はすべて単列であった。ツガ属はツガ、コマツガがあり、本州、四国、九州に分布する。

② マツ科モミ属(*Abies* sp.) (遺物No12)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柀目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

③ ヒノキ科アスナロ属(*Thujaopsis* sp.) (遺物No2、4、5)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柀目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からヤスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

④ ブナ科ブナ属(*Fagus* sp.) (遺物No8)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(~110 μ m)がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさとおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柀目では道管は単穿孔孔と階段穿孔孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1~3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

⑤ ブナ科クリ属クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (遺物No3-2)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大直径(~500 μ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔を

部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短桿型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

⑥ ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Sect. *Prinus* London syn. *Diversipilosae*, *Dentatae*) (遺物№10)

環孔材である。木口では大径管(～380 μ m)が年輪界にそって1～3列ならんで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小径管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カンワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

⑦ マンサク科イヌノキ属イヌノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) (遺物№13)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～50 μ m)が概ね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向にならび、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1～2列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物(チロース)がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1mmで多数分布している。イヌノキは本州(関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

⑧ トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (遺物№6, 7)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～80 μ m)が単独あるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている(上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300 μ mとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

⑨ イネ科タケ亜科 (Subfam. *Bambusoideae*) (遺物№11)

稈の横断面では維管束が不規則に並立して基本組織に配列している。個々の維管束の周囲を多量の厚壁繊維の組織(維管束鞘)がとりまいている。稈の縦断面では維管束、維管束鞘、その他の基本組織の細胞を含むすべての要素が稈軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)
島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 (1999)
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)
深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)

使用顕微鏡

Nikon MICROFLEX UFX-DX Type 115

長野市松代城下町跡出土木製品（平成13年度保存処理委託品）同定表

委託No	遺物 No	調査区	層位	遺構名	品名	樹種
1	01W-046	A7区	③次面	焼土層	木蓋1	マツ科ツガ属
2	01W-047	A5区	④次面	検出面	木蓋2	ヒノキ科アスナロ属
3-1	01W-048①	B2区	①次面	3号遺構	木蓋3	マツ科ツガ属
3-2	01W-048②	B2区	①次面	3号遺構	栓	ブナ科クリ属クリ
4	01A-497	B7区	⑤次面	検出面	木蓋4	ヒノキ科アスナロ属
5	01W-050	B7区	⑤次面	東側検出面	木蓋5	ヒノキ科アスナロ属
6	01A-523	D4区	①次面	1号遺構	漆器椀1	トチノキ科トチノキ属トチノキ
7	01A-418	A1区	③次面	1号遺構	漆器椀2	トチノキ科トチノキ属トチノキ
8	01A-503	B7区	⑤次面	東側検出面	漆器椀3	ブナ科ブナ属
9	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番	欠番
10	01A-527	B3区	②次面	検出面	下駄1	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
11	01A-341	B5区	②次面	1号遺構	漆塗箸	イネ科タケ亜科
12	01A-528	A9区	④次面	検出面	下駄2	マツ科モミ属
13	01A-526	B7区	⑤次面	検出面	横櫓	マンサク科イスノキ属イスノキ

第3節 松代城下町跡出土木製品の樹種同定(2)

藤吉田生物研究所

1 試料

試料は、平成15年度に「その1」分として業務委託された、松代城下町跡出土の容器7点、建築部材15点の合計22点である。

2 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柀目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（針葉樹4種、広葉樹1種、樹皮1種、タケ類1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

① マツ科モミ属 (*Abies* sp.) (遺物・写真No8B)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柀目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラバがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

② マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.) (遺物・写真No1、5B、5C、8A、9～12、13B、13C、18～20)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柀目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のもの、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

③ ヒノキ科アスナロ属 (*Thujaopsis* sp.) (遺物No2) (写真No2)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柀目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からヤスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

④ スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don) (遺物・写真No3～5A、6、7、13A、21、22B)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向にならんでいた。柀目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁は概ね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

⑤ ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (遺物・写真No22A)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大直径（～500 μ m）が年輪にそって幅のかなり広い孔周囲を形成している。孔周囲は急に大きさを減じ薄壁で角張った小直径が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柀目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同

性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

⑥ 針葉樹の樹皮（遺物・写真No17）

内腔がほとんど見られないほど厚壁のじん皮繊維と単列で2、3細胞高の放射組織が見られる。

⑦ イネ科タケ亜科（Subfam. Bambusoideae）（遺物・写真No14～16）

横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が環軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

参考文献

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源 「原色日本植物園鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社（1997）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

使用顕微鏡

Nikon MICROFLEX UFX-DX Type 115

長野市松代城下町跡出土木製品（平成15年度その1保存処理委託品）同定表

委託No	遺物No	調査区	層位	遺構名	品名	樹種
1	01W-002	A6区	②次面	2号遺構	分れ橋	マツ科マツ属【二葉松類】
2	01W-003	A6区	②次面	2号遺構	木樋（身・蓋）	ヒノキ科アスナロ属
3	01W-004	A6区	②次面	2号遺構	木樋（身・蓋）	スギ科スギ属スギ
4	01W-016①	D2区	①次面	1号遺構	分れ橋	スギ科スギ属スギ
5	01W-016②	D2区	①次面	1号遺構	A木樋 身 B破片 C破片	スギ科スギ属スギ マツ科マツ属【二葉松類】 マツ科マツ属【二葉松類】
6	01W-017	D2区	①次面	2号遺構	分れ橋	スギ科スギ属スギ
7	01W-018	D2区	①次面	検出面	曲物 蓋	スギ科スギ属スギ
8	01W-027	A5区	②次面	3号遺構	A木樋 身 B角材	マツ科マツ属【二葉松類】 マツ科モミ属
9	01W-031	A5区	②次面	3号遺構	曲物 蓋	マツ科マツ属【二葉松類】
10	01W-033	A5区	②次面	3号遺構	木樋 身	マツ科マツ属【二葉松類】
11	01W-034	A5区	②次面	3号遺構	曲物 蓋	マツ科マツ属【二葉松類】
12	01W-035	A5区	②次面	3号遺構	曲物 蓋	マツ科マツ属【二葉松類】
13	01W-036	A5区	②次面	3号遺構	A木樋 蓋 B木樋 蓋 C木樋 蓋	スギ科スギ属スギ マツ科マツ属【二葉松類】 マツ科マツ属【二葉松類】
14	01W-037	B7区	②次面	2号遺構	竹樋1破片	イネ科タケ亜科
15	01W-038	B7区	②次面	2号遺構	竹樋2	イネ科タケ亜科
16	01W-039	B7区	②次面	2号遺構	竹樋3	イネ科タケ亜科
17	01W-040	B7区	②次面	2号遺構	継手3のシュロ	針葉樹の樹皮
18	01W-041	B7区	②次面	2号遺構	竹樋の継ぎ手1	マツ科マツ属【二葉松類】
19	01W-042	B7区	②次面	2号遺構	竹樋の継ぎ手2	マツ科マツ属【二葉松類】
20	01W-043	B7区	②次面	2号遺構	竹樋の継ぎ手3	マツ科マツ属【二葉松類】
21	01W-028	B5区	①次面	2号遺構	木樋 身	スギ科スギ属スギ
22	01W-029	B2区	①次面	3号遺構	A木樋 身（底） B木樋 身（横板）	ブナ科クリ属クリ スギ科スギ属スギ

第4節 松代城下町跡出土木製品の樹種同定(3)

伊 東 隆 夫

京都大学生存圏研究所

1 はじめに

松代城下町跡は、長野県長野市松代町松代に所在し、神田川・蛭川・藤沢川等により形成された合流複合扇状地の扇中央部から、扇端部に至る緩傾斜地に位置する。同遺跡の遺構から発掘される遺物から判断して江戸時代の遺構であることがわかる。平成14年度の発掘調査では、境界施設としての石垣溝・石列や、建物遺構としての布摺り礎石建物・礎石建物・掘立柱建物、水道関係の遺構として木樋・竹樋・分かれ枡・集水枡・桶・井戸等が検出されている。また、土器（磁器・陶器等）・土製品（瓦・煉瓦等）・石製品（硯・石墨等）・木製品（建物部材・水道関係等）・竹製品（竹かご・火吹き竹等）・鉄製品（武器・調理具等）・銅製品（銭貨・キセル等）・金製品（金箔・装飾品等）・ガラス製品・動物製品・動植物遺体等の遺物が出土している。

2 方 法

出土した多くの木製品のうち、平成15年度に「その2」「その3」「その4」分として株式会社京都科学に保存処理業務委託された51点につき樹種の同定をおこなった。樹種同定の方法は定法にしたがい、安全カミソリで三断面の切片を切り出し、顕微鏡用標本を作製し、通常の光学顕微鏡で観察し、以下に示す樹種同定の拠点に基づいて樹種を特定した。その後、写真撮影をおこない樹種の特徴を記録した。

① モミ (*Abies firma*)

樹脂道および樹脂細胞を欠く。放射柔細胞壁は厚く、末端壁は数珠状となる。放射仮道管を欠く。

② ツガ (*Tsuga sieboldii*)

樹脂道および樹脂細胞を欠く。早・晩材の移行は急。放射柔細胞壁は厚く、末端壁は数珠状となる。放射仮道管が存在する。

③ ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は早・晩材の境界に接線状にまばらにみられる。分野壁孔はヒノキ型。

④ サワラ (*Chamaecyparis pisifera*)

樹脂道を欠く。樹脂細胞は早・晩材の境界に接線状にまばらにみられる。分野壁孔はヒノキ型に近いが孔口がヒノキよりも広い。

⑤ ハンノキ属 (*Alnus* sp.)

散孔材。間隔の広い階段穿孔。単列放射組織と集合放射組織が存在する。

⑥ ブナ属 (*Fagus* sp.)

散孔材。道管の大きさは比較的小さく、年輪終末で大きさを減ずる。道管穿孔は単穿孔と階段穿孔がみられる。道管にチロースが多く詰まる。放射組織は単列放射組織から広放射組織まで様々な幅が存在する。

⑦ クリ (*Castanea crenata*)

環孔材。年輪のはじめにきわめて大きい道管がならぶ。晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管に単穿孔。放射組織は単列同性。

⑧ ケヤキ (*Zelkova serrata*)

環孔材。孔圍道管は1列。単穿孔。孔圍外道管は集団をなして斜線状にならぶ。放射組織に大型の結晶がみられる。

⑨ コナラ節 (*Quercus* sp. sect. *Prinus* Loudon syn.)

環孔材。孔圍道管は大型となり、単穿孔を有する。孔圍外道管は小さく多数となり、放射状ないし火炎状に分布する。広放射組織が存在する。

⑩ エノキ (*Celtis sinensis*)

環孔材。孔圍道管は大型で数列となり、単穿孔。孔圍外道管は多数が集まって分布する。放射組織に顕著な細胞がみられる。

⑪ トチノキ (*Aesculus turbinata*)

散孔材。小さい道管が分布。単穿孔。放射組織は単列同性。放射組織は層階状構造となる。

⑫ エゴノキ属 (*Styrax japonica*)

散孔材。階段穿孔。年輪後半部に一定間隔で軸方向柔組織が分布する。放射組織は異性で1-4列。

⑬ センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata*)

環孔材。孔圍は多列。孔圍外道管は集団状。単穿孔。小道管にらせん肥厚。放射組織は同性ないし異性Ⅲ型。

⑭ イスノキ (*Distylium racemosum*)

散孔材。小さい道管がほぼ単独で分布。階段穿孔でパーは太い。道管放射組織間壁孔は階段状。放射組織は異性で1-2列。

⑮ イネ亜科 (Bambusoideae)

いわゆるタケの仲間で、基本組織を構成する柔組織の中に維管束が不規則に分布する。

3 結 果

樹種同定の結果は表1に示すとおりである。この表から樹種別に用途を整理すると以下の通りである。

ヒノキ	19点(下駄 12点、箸 3点、杭 1点、刷毛台 1点、早桶蓋 1点)
サワラ	1点(下駄 1点)
モミ	3点(箸 2点、杭 1点)
ツガ	1点(杭 3点、下駄 1点)
ブナ属	9点(漆椀 8点、下駄 1点)
ハンノキ属	2点(下駄 1点、不明木材 1点)
クリ	1点(杭 1点)
ケヤキ	2点(杭 2点)
コナラ節	2点(杭 2点)
エノキ	1点(下駄 1点)
トチノキ	1点(漆椀 1点)
エゴノキ属	1点(漆膜片 1点)
センダン	1点(摺鉢 1点)
イスノキ	1点(櫛 1点)
タケ	2点(竹筒片 1点、竹片 1点)

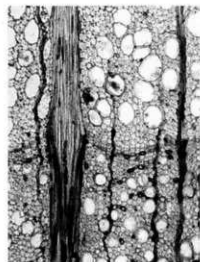
長野市松代城下町跡出土土製品(平成15年度その2~4保存処理委託品)同定表

試料No	遺物No(委託No)	出土区・層位・遺構		遺物名	法	量	樹種	備考
KK-611	02A-135(24)	D6区	⑥次面	検出	漆桶	10×11×7	ブナ属	TB670052-1
KK-612	02A-136(25)	D6区	⑥次面	検出	黒漆桶	13×13×8	ブナ属	TB670052-2
KK-613	02A-132(30)	D6区	⑥次面	御溝北東検	下駄	21×9×2.5	ヒノキ	TB670052-3
KK-614	02A-133(36)	D6区	⑥次面	検出	下駄(右足)	22×9×4	ヒノキ	TB670052-4
KK-615	02A-131(37)	D6区	⑥次面	御溝北中検	下駄	22×10×3	ヒノキ	TB670052-5
KK-616	02A-124(40)	D6区	⑥次面	検出	箸	20×1×0.5	ヒノキ	TB670052-6
KK-617	02A-107(44)	D6区	⑤次面	検出	下駄	23×9×4	ヒノキ	TB670052-7
KK-618	02A-090(45)	D6区	④次面	床面	下駄	22×11×4	ツガ	TB670052-8
KK-619	02A-200(51)	D6区	⑦次面	掘鉢	51×12×2	センダン	TB670052-9	
KK-620	02A-201(53)	D6区	⑦次面	床面	下駄	21×12×4.5	ヒノキ	TB670052-10
KK-621	02A-205(55)	D6区	⑧次面		高下駄	16×9×7	ヒノキ	TB670052-11
KK-622	02A-203(56)	D6区	⑧次面		下駄	17×9.5×2	サワラ	TB670052-12
KK-623	02A-208(57)	D6区	⑧次面		人形顔	15×8×8.5	ヒノキ	TB670052-13
KK-624	02A-216(60)	D6区	⑨次面		下駄	21×10×3	ヒノキ	TB670052-14
KK-625	02A-204(62)	D6区	⑧次面		下駄	20×9×3.5	ヒノキ	TB670052-15
KK-626	02A-211(63)	D6区	⑨次面	床面	漆桶	13×12×8.5	ブナ属	TB670052-16
KK-627	02A-212(64)	D6区	⑨次面	検・床面	下駄	11×11×4	トチノキ	TB670052-17
KK-628	02A-213(65)	D6区	⑨次面	検・床面	漆桶	13×12×8	ブナ属	TB670052-18
KK-629	02A-207(68)	D6区	⑥次面	床面	漆桶	12×12×4	ブナ属	TB670052-19
KK-630	02A-230(71)	D6区	⑩次面	検出	下駄	17×11×6.5	ヒノキ	TB670052-20
KK-631	02A-236(75)	D6区	⑩次面	検出	箸	25×0.5×0.5	ヒノキ	TB670052-21
KK-632	02W-094(91)	D6区	⑨次面	検出面	不明木材	36×11×2	ハンノキ	TB670052-22
KK-633	02W-100(100)	C6区	④次面	④-3	櫛	14×3.5×1	イスノキ	TB670052-23
KK-634	02W-103(103)	C6区	④次面	④-3	箸	21×0.5×0.5	モミ	TB670052-24
KK-635	02A-315(113)	D5区	③次面	検・床面	下駄	21×9×3	エノキ	TB670052-25
KK-636	02A-305(115)	D5区	②次面	②-1	下駄	22×8.5×2	ブナ属	TB670052-26
KK-637	02A-308(121)	D7区	②次面	床面	竹筒片	7×15×1.5	タケ	TB670052-27
KK-638	02A-309(122)	D5区	②次面	②-1	漆膜片	5.2×2.5×0.3	エゴノク属	TB670052-28
KK-639	02A-287(135)	E1区	②次面	②-1	割箸	21×1×0.5	モミ	TB670052-29
KK-640	02A-330(140)	D5区	②次面	検出	下駄	22×8×4	ハンノキ	TB670052-30
KK-641	02A-331(141)	C6区	⑥次面	検出	下駄	22×8×3	ヒノキ	TB670052-31
KK-642	02A-332(145)	C6区	⑥次面	⑥-2	箸	28×0.5×0.5	ヒノキ	TB670052-32
KK-643	02A-333(146)	D5区	④次面	検出	漆桶	12×12×6.5	ブナ属	TB670052-33
KK-644	02A-335(155)	D5区	⑤次面	検出	漆桶	11×10×4	ブナ属	TB670052-34
KK-645	02W-166(166)	D5区	⑤次面	⑤-1	早桶蓋	35×35×1	ヒノキ	TB670052-35
KK-646	02W-167(167)	D5区	⑤次面	⑤-1	早桶	25×10×1	サワラ	TB670052-36
KK-647	02W-173(173)	F1区	③次面	Tr3	刷毛台	12×16×0.3	ヒノキ	TB670052-37
KK-648	02W-177(177)	F1区	③次面	③1床直包	竹片	26×2.5×2.5	タケ	TB670052-38
KK-649	02W-181(181)	F1区	③次面	③-1	下駄	23×7×3.5	ヒノキ	TB670052-39
KK-650	02A-442(183)	F1区	③次面	③-1包含層	下駄	22×8×2.5	クリ	TB670052-40
KK-651	02W-187(187)	F1区	③次面	③-1	下駄	22×8×4	ヒノキ	TB670052-41
KK-652	02W-191(191)	F1区	③次面	Tr1	漆桶	11×11×4.5	ブナ属	TB670052-42
KK-653	02W-157(157)	D5区	④次面	④-7	柱材(枕)	31×11×11	ケヤキ	TB670052-43
KK-654	02W-159(159)	D5区	④次面	④-9	柱材(枕)	43×8×7	コナラ節	TB670052-44
KK-655	02W-160(160)	D5区	④次面	④-4	柱材(枕)	56×11×11	ツガ	TB670052-45
KK-656	02W-163(163)	D5区	④次面	④-11	柱材(枕)	49×13×13	ケヤキ	TB670052-46
KK-657	02W-165(165)	D5区	④次面	④-2	柱材(枕)	63×13×14	ツガ	TB670052-47
KK-658	02W-158(158)	D5区	④次面	④-8	柱材(枕)	51×13×11	コナラ節	TB670052-48
KK-659	02W-161(161)	D5区	④次面	④-3	柱材(枕)	31×13×13	ツガ	TB670052-49
KK-660	02W-162(162)	D5区	④次面	④-10	柱材(枕)	45×12×12	ヒノキ	TB670052-50
KK-661	02W-164(164)	D5区	④次面	④-5	柱材(枕)	77×11×10	モミ	TB670052-51

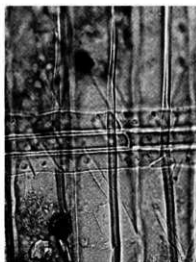
出土土製品の数に限りがあるので、樹種と用途についてのつっこんだ議論はむずかしいが、少なくともヒノキは下駄に、ブナが漆器に多用されていることは推定できる。また、櫛の用材としてイスノキが利用されているのはこれまでの調査例(島地・伊東 1988)と同じである。

参考文献

島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土土製品総覧」雄山閣出版



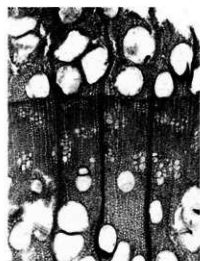
1. KK-611 漆桶 プナ属 x 75



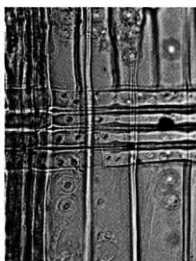
2. KK-615 下駄 ヒノキ x300



3. KK-618 下駄 ツガ x300



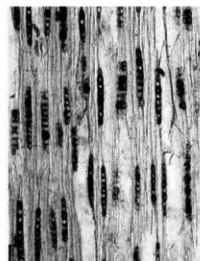
4. KK-619 握鉢 センダン x30



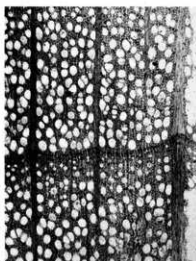
5. KK-621 高下駄 ヒノキ x300



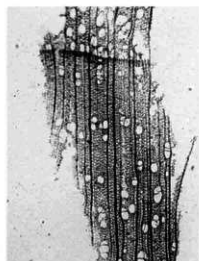
6. KK-626 漆桶 プナ属 x30



7. KK-627 漆桶 トチノキ x75



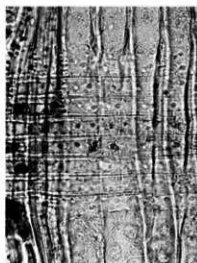
8. KK-628 漆桶 プナ属 x30



9. KK-632 不明木材 ハノキ属 x30



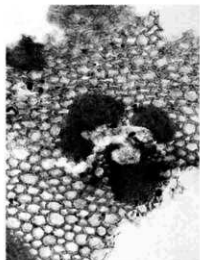
10. KK-633 櫛 イヌノキ x150



11. KK-634 著 モミ x300



12. KK-635 下駄 エノキ x75



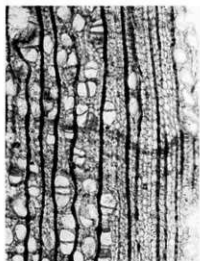
13. KK-637 竹筒片 タケ x75



14. KK-638 漆膜片 エゴノキ属 x75



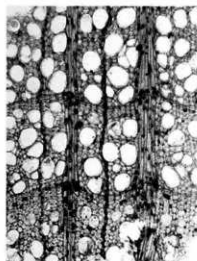
15. KK-639 割著 モミ x300



16. KK-640 下駄 ハンノキ属 x75



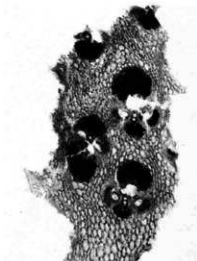
17. KK-642 著 ヒノキ x300



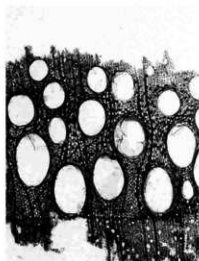
18. KK-643 漆筒 プナ属 x75



19. KK-646 早種 サワラ x300



20. KK-648 竹片 タケ x30



21. KK-650 下駄 クリ x30



22. KK-653 柱材(杭) ケヤキ x30



23. KK-654 柱材(杭) コナラ節 x30



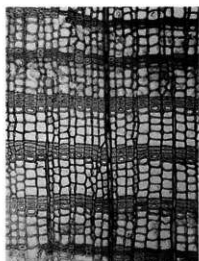
24. KK-655 柱材(杭) ツガ x300



25. KK-656 柱材(杭) ケヤキ x75



26. KK-658 柱材(杭) コナラ節 x30



27. KK-659 柱材(杭) ツガ x30

第5節 松代城下町跡出土木製品の放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

松代城下町跡は、神田川・鯉川・藤沢川等により形成された合流複合扇状地の扇尖部から、扇端部に至る緩傾斜地に位置する。平成14年度の発掘調査では、境界施設としての石垣溝・石列や、建物遺構としての布掘り礎石建物・礎石建物・掘立柱建物、水道関係の遺構として木樋・竹樋・分かれ橋・集水橋・樋・井戸等が検出されている。また、土器（磁器・陶器等）・土製品（瓦・煉瓦等）・石製品（硯・石墨等）・木製品（建物部材・水道関係等）・竹製品（竹かご・火吹き竹等）・鉄製品（武器・調理具等）・銅製品（銭貨・キセル等）・金製品（金箔・装飾品等）・ガラス製品・動物製品・動植物遺体等の遺物が出土している。今回の分析調査では、出土した柱材を対象に加速器による放射性炭素年代測定（AMS法）を実施し、年代資料を得る。

2 試料

試料は、平成15年度に「その3」「その4」分として株式会社京都科学に保存処理業務委託されたうちの、D5区で出土した柱材から採取された木片2点（02W-160・02W-164）である。いずれも樹芯がある角材で、樹芯は角材の中央付近に位置している。年代測定試料は、観察した中でもっとも外側の年輪を含む部分を採取した。なお、木片の樹種は肉眼観察によれば針葉樹と判断されるが、詳細は京都大学木質科学研究所で同定中である。

3 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

4 結果

結果を表1・2に示す。試料の測定年代（補正年代）は02W-160が約330BP、02W-164が約340BPの17世紀頃に相当する値を示す。発掘調査所見によれば、D5・6区で検出された掘立柱建物遺構は層位的に17世紀頃のものと考えられており、今回の測定結果と調和的である。

なお、測定試料が炭化材や木材の場合、①古材の利用、②木製品の加工時に木材伐採直前に形成された年輪部分を削っている、等の理由により、測定値と遺構の構築年代が異なる可能性がある。今後は、同一遺構・同一層準から出土した木材・炭化材・炭化物等の測定点数を増やすことにより、さらに詳細な年代観が得られるものと期待される。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	出土遺構	試料の質	補正年代(BP)	δ 13C (‰)	測定年代(BP)	Code No
02W-160	D5区④-4 柱穴土坑	木材	330±40	-29.47±0.69	400±40	IAAA-32128
02W-164	D5区④-5 柱穴土坑	木材	340±40	-20.82±0.94	270±40	IAAA-32129

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値

表2 暦年較正結果

試料名	出土遺構	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)		相対比	Code No
02W-160	D5区④-4 柱穴土坑	325±41	cal AD 1,513-cal AD 1,600 cal AD 1,615-cal AD 1,638	cal BP 437-350 cal BP 335-312	0.794 0.206	IAAA-32128
02W-164	D5区④-5 柱穴土坑	340±39	cal AD 1,491-cal AD 1,527 cal AD 1,554-cal AD 1,604 cal AD 1,607-cal AD 1,632	cal BP 459-423 cal BP 396-346 cal BP 343-318	0.320 0.455 0.225	IAAA-32129

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第6節 松代城下町跡出土の人骨について

小澤素子¹・梶ヶ山真里²・馬場悠男^{1,2}

¹東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻進化多様性大講座

²国立科学博物館人類研究部

1 緒言

長野県長野市松代町に所在する松代城下町跡は、緊急地方道路整備事業である街路工事の着手にともない平成13・14年度に発掘された。発掘調査によって、17世紀初頭以前と考えられるD5区第5次遺構検出面第1号遺構から、早稲に埋葬された幼児人骨1体が発見されたので、その人骨について報告する。

2 出土人骨

頭蓋・体幹体肢骨ともに大部分の骨が残っており、保存状態も良好であった。歯の形成状況から、この幼児人骨の死亡年齢は2～3歳と推定される。性別は不明である。この幼児人骨の計測値を表1に示した。さらに、東京都台東区池之端七軒町遺跡出土の同年齢の幼児人骨4体の平均を基準として偏差折線図を描いた(図1)。

① 頭蓋

頭蓋三主縫合およびその他の縫合は未癒合である。前頭骨と顔面は接合していたが、頭頂骨、側頭骨、後頭骨は分離して出土した。頭蓋は多少のゆがみがあったものの、全形が復元された。頬骨弓と鼻骨が破損している。縫合の走行は直線的で、縫合骨はない。泉門はすべて閉じている。上面観は六角形で、頭頂結節の部分がかもとも外側に突出している。頭蓋長幅示数は86.7で短頭型に属する。後面観は、下部がやや縮まり、逆台形もしくは五角形に近い。外後頭隆起、乳棟突起、側頭線などの筋肉付着部は発達していない。外耳孔は楕円形を呈している。顔面部は、通常の幼児頭蓋骨に見られるように、脳頭蓋に対して後退している。顔面部の正面観は、全体的に狭い。眉弓の隆起はない。眼窩上壁には貧血の影響と言われるクリブラ・オルビタリアがある。眼窩は高く幅が狭い長方形を呈し、眼窩示数は104.2で高眼窩型に属する。上顎骨、下顎骨ともに華奢である。歯の保存状態は、以下の歯式の通りである。歯の咬耗はほとんど認められない。

M1										M1
	dm2	dm1	dc	△	di1	di1	△	dc	dm1	dm2
	dm2	dm1	dc	di2	△	△	di2	dc	dm1	dm2
M1										M1

△=歯槽開放

② 四肢骨

大部分の骨が保存されているが、風化により傷んでおり、骨質は脆い。

上腕骨:左右とも保存されており、両側ともに骨幹の遠位部がやや破損している。骨端と骨幹は未癒合である。

骨体横断面はまるく、江戸時代幼児人骨の平均値より太い。

腕骨:左右とも保存されており、近・遠位部が破損している。未癒合である。

尺骨:左が保存されており、遠位部が破損している。未癒合である。

鎖骨:左右とも保存されている。骨体は細い。

肩甲骨:左右とも保存されている。

寛 骨：左右とも腸骨はない。坐骨・恥骨は保存されているが、やや破損している。腸骨、坐骨、恥骨はそれぞれ未癒合である。

大腿骨：左右とも保存されており、両側ともに骨幹の遠位部がやや破損している。骨端と骨幹は未癒合である。粗線は触れてわかる程度である。骨体横断面はまるいが、やや扁平気味であり、江戸時代幼児人骨の平均値より太い。

脛 骨：左右とも保存されており、右は近・遠位部が破損している。未癒合である。

腓 骨：左右とも保存されており、近・遠位部が破損している。未癒合である。

肋 骨：よく保存されており、左右計22点ある。中位肋骨の2点が失われているが、それがどの肋骨かの同定は困難である。

椎 骨：椎体と椎弓が未癒合である。椎弓はすべて保存されている。

仙 骨：仙椎それぞれが未癒合であり、部分的に保存されている。

3 まとめと考察

四肢骨は、江戸時代幼児人骨の平均に比べて、太さは同程度に発達していたが、長さが短い。推定身長は、左大腿骨から、Telkka, et al. (1961) の推定式により計算したところ、男児の場合 78.7 ± 4.1 cm、女児の場合 77.4 ± 4.1 cmであった。

脳頭蓋では、長さや高さは江戸時代幼児人骨の平均より小さいが、幅は広い。顔面は全体的に小さく華奢である。高眼窩、狭顔などのいわゆる「貴族的な特徴」と一致する特徴が認められる。

一般に、江戸時代貴族の多くは、限られた上流階級集団の中で婚姻を繰り返し、柔らかい食物を摂取するなど、徳川将軍家を規範とする非庶民的な生活を営んでいた。その結果、個人差を超越して、庶民とは区別される細長く極端に華奢な「貴族的な特徴」を持つようになったと考えられている。この特徴は世代を重ねるとともに強化されている。今回の幼児人骨は、家老級の侍屋敷の門であったとされる地点から発掘されており、出土状況から身分の高い家系の子供と推定されるので、貴族的な特徴を備えていても不思議ではない。

参考文献

- 梶ヶ山真里・馬場悠男 2004 「被葬者の人類学的所見」『池上本門寺奥絵師野家墓所の調査』167～177。
鈴木 尚 1967 「頭骨」『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』121～274。
鈴木 尚 1985 「江戸時代における貴族形質の顕現」『人類誌』93(1)：1～32。

表1. 松代幼児人骨の計測値と江戸時代幼児人骨との比較 (単位はmm)

Martin 番号	計測項目	松代幼児 人骨	池之端幼児人骨	
			平均(n=4)	S. D.
頭蓋				
1	最大長	154.0	158.9	2.9
5	頭蓋底長	74.5	80.0	
8	最大幅	130.0	126.6	1.1
8:1	頭蓋長幅示数	84.4	79.7	1.9
9	最小前頭幅	73.3	81.1	2.9
9:8	横前頭頂示数	56.4	64.0	2.3
10	最大前頭幅	98.6	107.6	15.3
11	両耳幅	90.2	91.3	1.3
12	最大後頭幅	94.8	94.5	1.7
13	乳棟突起間幅	81.9	78.8	1.9
17	バジオン・プレグマ高	111.0	119.0	
17:1	頭蓋長高示数	72.1	74.9	
24	横弧長	283.0	290.9	5.0
40	顔長	67.2	75.4	
44	両眼幅	71.6	74.5	3.4
45	頬骨弓幅	91.5	96.0	
46	中顔幅	66.8	70.1	2.9
47	顔高	76.4	80.1	2.6
48	上顔高	47.7	49.4	1.2
47:45	コルマン顔示数	83.5	83.5	
47:46	ウィルヒョウ顔示数	114.4	114.4	7.1
48:45	コルマン上顔示数	52.1	51.4	
48:46	ウィルヒョウ上顔示数	71.4	70.4	3.7
51	眼窩幅	29.6	31.5	2.1
52	眼窩高	30.9	29.5	0.5
52:51	眼窩示数	104.4	93.7	5.5
54	鼻幅	20.2	18.6	1.6
55	鼻高	35.5	34.7	2.1
54:55	鼻示数	56.9	53.6	5.7
57	鼻骨最小幅	7.6	6.4	0.9
60	上顎歯槽長	32.1	33.8	1.2
61	上顎歯槽幅	44.3	48.6	2.8
60:61	上顎歯槽突起示数	72.5	69.5	5.6
62	口蓋長	27.5	29.8	0.6
65	下顎頭幅	82.1	82.9	1.9
66	下顎角幅	68.5	66.2	2.3
68	下顎長	45.6	49.4	1.5
69	顎高	20.3	22.5	1.3
70	枝高	34.5	41.9	2.3
71	枝幅	26.7	25.6	1.0
71:70	下顎枝示数	77.4	61.2	5.7
上肢骨				
1	最大長	112.0	127.6	3.6
5	中央最大径	11.3	11.0	0.5
6	中央最小径	9.7	8.9	0.4
7a	中央周	35.7	34.0	0.9
尺骨				
1	最大長	89.5	99.0	
3a	骨体中央周	21.0	21.0	
11	骨体矢状径	6.4	5.2	
12	骨体横径	6.8	7.5	
大腸骨				
1	最大長	149.1	170.5	6.0
6	骨体中央矢状径	11.3	10.8	0.6
7	骨体中央横径	14.3	12.5	0.4
8	骨体中央周	43.6	38.5	1.9
脛骨				
1	全長	116.2	136.5	7.4
8	中央最大矢状径	11.3	12.1	1.2
9	中央横径	11.6	10.9	1.1
10	骨体中央周	37.3	37.0	3.0

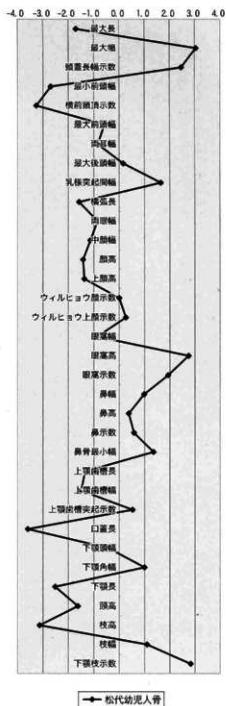


図1 江戸時代池之端七軒町幼児人骨に対する松代幼児人骨の偏差折線

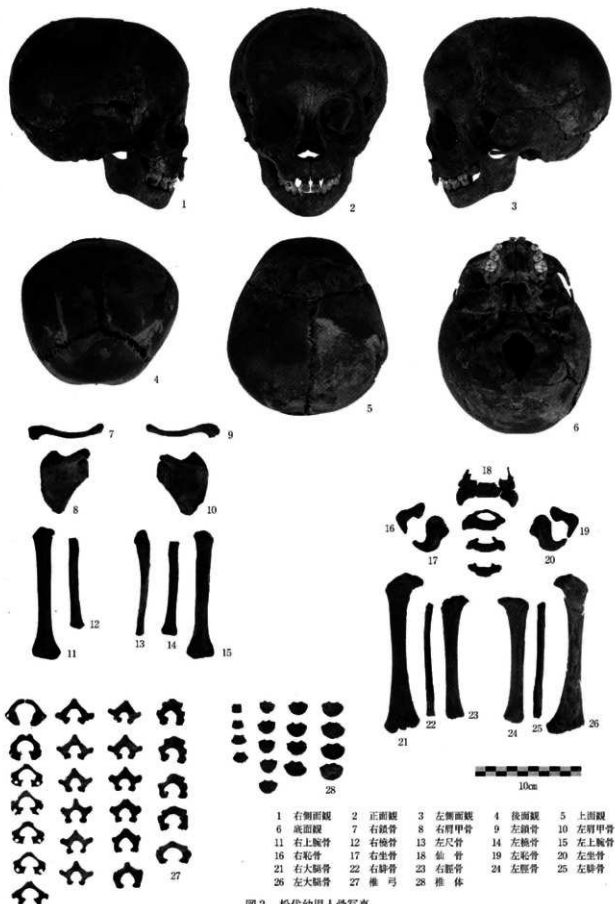


图2 松代幼児人骨写真

- | | | | | |
|---------|--------|--------|--------|---------|
| 1 右側面観 | 2 正面観 | 3 左側面観 | 4 後面観 | 5 上面観 |
| 6 底面観 | 7 右鎖骨 | 8 右肩甲骨 | 9 左鎖骨 | 10 左肩甲骨 |
| 11 右上腕骨 | 12 右桡骨 | 13 左尺骨 | 14 左腕骨 | 15 左上腕骨 |
| 16 右恥骨 | 17 右坐骨 | 18 仙骨 | 19 左恥骨 | 20 左坐骨 |
| 21 右大腿骨 | 22 右腓骨 | 23 右脛骨 | 24 左脛骨 | 25 左腓骨 |
| 26 左大腿骨 | 27 椎弓 | 28 椎体 | | |

第7節 松代城下町跡埋桶遺構出土の自然遺物

畠山 幸司

長野市立博物館分館茶臼山自然史館

1 はじめに

平成14年度に調査した松代城下町跡の、E1区①次面1号遺構と呼ばれる埋桶遺構から、魚鱗・魚骨等の自然遺物が多数出土した。遺構の帰属時期は不詳であるが、幕末から明治期にかけての包含層を掘り込んでいることから、上限として認識されるものである。これらの自然遺物は、当時の松代の食習慣や食品流通を知る上で重要な資料であると思われる。以下に、出土した自然遺物の分析結果について報告する。

2 分析方法

貝類遺体は、茶臼山自然史館収蔵の現生貝類標本と比較して同定した。哺乳類遺体は、戸隠村地質化石館（現戸隠地質化石館）収蔵の現生骨格標本と比較して同定した。魚類の耳石は、Ohe, 1985に基づいて同定した。魚骨に関しては、落合他, 1994等を参考にしながら市販の鮮魚等から骨格標本を多数作成し、比較・同定した。魚鱗に関しては、同定が困難であるため、同定対象から外した。

3 同定結果

① 哺乳類

クマネズミ (*Rattus rattus*) 左脛骨と腓骨を1点検出した。人為的な加工や被熱の証拠は認められない。

ネズミ類 脛骨と下顎骨片各1点を検出した。下顎骨片は著しく保存不良で、被熱した可能性がある。

② 鳥類

ニワトリ (*Allus gallus domesticus*) (最小個体数1) 卵殻破片10点を検出した。

③ 魚類

ブリ (*Seriola quinqueradiata*) (最小個体数2) 計4点が検出された。前上顎骨2点は大きさが異なり、骨格標本との比較から大きな個体は体長約50cm (いわゆるイナダ)、小さな個体は体長約20cm (いわゆるワカシ) と推定される。

スケトウダラ (*Theragra chalcogramma*) (最小個体数3) 検出された耳石4点は左右各2点であるが、2個体とするには大きさが異なるため、3個体以上のものである。

マダラ (*Gadus macrocephalus*) (最小個体数1) 計15点を検出したが、部位に重複がなく大きさも調和的で、互いに接合することを確認できる部位もあるため、全て同一個体の可能性がある。

マダイ (*Pagrus major*) (最小個体数8) ヒラメに次ぐ点数、計38点を検出した。骨格標本との比較から、いずれも体長45~65cmの大型の個体と推定される。

サケ (*Oncorhynchus keta*) (最小個体数1) 尾椎骨2点を検出した。サケはかつて千曲川にも遡上していた重要な食用魚であるが、出土数は少なかった。サケの骨は柔らかく、煮込む等の調理によって食用可能であることが、出土数の少ない原因と思われる。

サケ科 (*Salmonidae* gen. et sp. indet.) (最小個体数1) サケ科の中型魚の椎骨4点を検出したが、種名の同定

は困難である。

コイ (*Cyprinus carpio*) (最小個体数 1) 咽頭骨・咽頭歯・主髭蓋骨計 5 点を検出した。

ヒラメ (*Paralichthys olivaceus*) (最小個体数 5) 計 55 点が検出され、出土魚類中最多であった。大半が骨格標本との比較から体長 50cm 以上と推定される大型の個体である。いずれも頭部の骨で、鋭利な刃物による切断痕や傷がついているものが多いことから、頭も調理して食べられていたと考えられる。

アコウダイ (*Sebastes matsubarae*) (最小個体数 1) 頭部の骨 5 点が検出された。アコウダイは深海に生息するカサゴ科の魚で、体色がタイに似て赤く、美味なために祝い事の席で用いられることもある高級魚である。

クロマグロ (*Thunnus thynnus*) (最小個体数 1) 頭部の骨 4 点が検出された。骨格標本との比較から、体長 1 m 前後の個体と推定される。

サメ・エイ類 (個体数 1) 椎骨 1 点が検出された。

④ 軟体動物

a. 二枚貝類

アカガイ (*Anadara broughtoni*) (最小個体数 2) 大型の個体の破片 2 点が検出された。

アカガイ? (*Anadara broughtoni*?) (最小個体数 1) 破片 3 点が検出された。小さな破片であるため同定が困難であり、サルボウガイの可能性もある。

ハマグリ (*Meretrix lusoria*) (個体数 2) 左右が互いに接合する殻 4 点が検出された。被熱しており、調理されたものである。

ムラサキインコガイ (*Septifer (Mytilisepta) virgatus*) (個体数 1) 破片 1 点が検出された。ムラサキインコガイは食用可能な岩礁性の二枚貝であり、被熱していることから、調理されたものである。

キクスズメガイ (*Amalthea conica*) (個体数 4) 4 点が検出された。キクスズメガイはサザエやアワビなど岩礁性の貝類に固着生活する小型の巻き貝である。この貝自体を食用に採取したとは考えられないので、他の貝類に付着していたものが捨てられたと推定される。

アサリ? (*Venerupis philippinarum*?) (個体数 1) 小さな破片 1 点が検出された。

イタヤガイ (*Pecten albicans*) (最小個体数 1) 破片 4 点殻が検出された。1 点には人工的な穴が 2 つ空けられている。いずれも重度に被熱していて、殻ごと焼かれた可能性がある。

b. 腹足類

ドブガイ (*Anodonta (Sinanodonta) woodiana*) (最小個体数 1) 接合する破片 3 点が検出された。ドブガイは、河川やため池等に普通に生息している二枚貝で、食用も一応可能とされている。被熱の有無が確認できなかったため、自然物の混入の可能性がある。

イシガイ科 (Unionidae gen. et sp. indet.) (最小個体数 1) 破片 1 点のみで、ドブガイかカラスガイの破片と推定される。同種とも一応食用可能であるが、被熱の有無が確認できなかったため、自然物の混入の可能性がある。

タニシ科 (Viviparidae gen. et sp. indet.) (個体数 1) 殻の破片 1 点を検出した。被熱の有無が確認できなかったため、自然物の混入の可能性も否定できない。

マルタニシの幼貝 (*Cipangopaludina chinensis malleata*) (個体数 1) 成貝に付着していたものと推定される。被熱の有無が確認できなかったため、自然物の混入の可能性がある。

c. 頭足類

スルメイカ (*Todarodes pacificus steenstrup*) (最小個体数 2) 顎器 2 点が検出された。

⑤ 甲殻類

サワガニ (*Geothelphusa dehaani*) (最小個体数 1) 右鉗脚不動指 1 点が検出された。被熱の有無が確認できなかったため、自然物の混入の可能性も否定できない。

⑥ 植物

ウメ (*Prunus mume*) 種子 2 点が検出された。

オニグルミ (*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*) 堅果の破片 1 点が検出された。

ソバ (*Fagopyrum esculentum*) 種子の外皮 (ソバガラ) 多数が検出された。

分類群	種名	部位・点数	最小個体数
哺乳類	クマネズミ	脛骨・腓骨L1	1
	ネズミ類	橈骨1, 下顎骨片1	1
鳥類	ニワトリ	卵殻破片10	1
魚類	ブリ	前上顎骨L1・R1, 腹椎骨1, 尾椎骨1,	2
	スケトウダラ	耳石L2・R2, 角舌骨・上舌骨L1, 下鰓蓋骨2	3
	マダラ	前頭骨1, 前耳骨L1, 後耳骨L1, 角骨L1・R1, 方骨L1・R1, 角舌骨R1, 上舌骨R1, 下舌骨1, 主鰓蓋骨R1, 前鰓蓋骨R1, 下鰓蓋骨R1, 第3脊椎骨1, 第4脊椎骨1	1
	マダイ	耳石L8・R6, 下咽頭骨L3・R4, 上咽頭骨L1・R2, 主鰓蓋骨L3・R2, 前鰓蓋骨L1・R2, 腹椎骨3, 椎骨片2, 腎臓・担鰭骨1	8
	サケ	尾椎骨2	1
	サケ科	尾椎骨2, 椎骨2	1
	コイ	咽頭骨L1, 咽頭歯4, 主鰓蓋骨L1	1
	ヒラメ	前上顎骨L3・R1, 主上顎骨L4・R4, 歯骨L5・R2, 角骨L4・R1, 方骨L2・R1, 角舌骨L5・R2, 上舌骨L1・R1, 舌骨1, 咽頭歯6, 鰓歯12	5
	アコウダイ	歯骨R1, 方骨L1, 舌骨L1, 舌舌骨L1, 角舌骨R1, 擬頭骨L1	1
	クロマダロ	前上顎骨L1, 間鰓蓋骨L1, 下鰓蓋骨L1・R1	1
	サメ・エイ類	椎骨1	1
	軟体動物	アカガイ	殻破片2
アカガイ?		殻破片3	1
ハマグリ		貝殻L2・R2	2
ムラサキインコガイ		殻破片1	1
キクスズメガイ		貝殻4	4
アサリ?		殻破片1	1
イタヤガイ		殻破片4	1
ドブガイ		殻破片3	1
イシガイ科		殻破片1	1
タニシ科		殻破片1	1
マルタニシの幼貝		貝殻1	1
スルメイカ		顎部2	2
甲殻類	サワガニ	鉗脚不動指R1	1
植物	ウメ	種子2	
	オニグルミ	堅果破片1	
	ソバ	種子外皮多数	

※魚骨の点数は破片を含む。

4 まとめと考察

松代城下町跡E1区①次面1号(埋桶)遺構から出土した自然遺物を分析した結果、哺乳類1種、鳥類1種、魚類11種、軟体動物9種、甲殻類1種、植物3種以上を検出した。ただし、哺乳類および軟体動物・甲殻類には自然界からの混入の可能性のあるものが含まれている。

出土した自然遺物中で多数を占める魚類について検討すると、調理される時点では存在したはずの背骨（椎骨）が比較的少なく、頭部の骨が多いことがわかる。頭部が出土した魚は、クロマグロを除いてアラ煮等に利用されることの多い魚種であり、特にヒラメの頭部の骨には刃物の痕跡が多く認められる。このことは、当時の魚の調理法を窺い知るうえで参考になるとと思われると同時に、頭部と背骨がそれぞれ別の場所に選択的に捨てられていたことを反映している可能性があり、出土した遺構の性質を考察する上でも注目に値する。

また、長期保存が困難で大きさの割に可食部の少ないクロマグロの頭部の骨が出土したことは注目される。頭部のみを食べるために運んできたとは考えがたい^(※1)ので、輸送には鉄道等、高速で強力な輸送手段が用いられた可能性がある。このことは、本遺構の帰属年代を推定するうえでも重要と思われる。

謝辞 発掘調査を担当した飯島哲也氏には貴重な資料を提供していただき、研究の機会を与えていただいた。また、戸隠化石館（当時戸隠村地質化石館）の田辺智隆氏には哺乳類の骨格標本を参照させていただいた。記して深く感謝の意を表したい。

※1 筆者の父はかつて遠洋漁船の船員であった。そのため、マグロの頭部を丸煮にして食べたことが何度もあるが、そのような経験をもつ友人は港町であるにも関わらずほとんどいなかった。頭部の大半は市場で廃棄処分されるのだと聞いている。漁港周辺ですら一般的な食べ物ではないマグロの頭部が、数十年以上も昔に食用として単独で信州に運ばれてきたとは、経験上どうしても考えられないのである。

参考文献

- 落合明他 1994 魚類解剖大図鑑 図版編、録書房。
岩井 保 1986 検索入門 魚の図鑑①、保育社。
岩井 保 1986 検索入門 魚の図鑑②、保育社。
内田亨他 1963 動物系統分類学9(上)・(中)、中山書店。
Ohe, F. 1985 Marine Fish-otoliths of Japan. Sp. Bull. The Senior High School attached to the Aichi Univ. Edu.

第V章 ま と め

第1節 土地利用の変遷

今回の発掘調査にて検出された遺構のうち、城下町の町並みに関連するものは、境界施設としての石垣溝・石列、建物遺構として布張り礎石建物・礎石建物・掘立柱建物・門?などである。境界施設の石列は、建物基礎となる可能性もあり、明確に区分できてはいない。塀となる可能性も考えられるが、素掘り溝や生け垣は確認できなかった。また、各調査区にて確認した、現国道403号線に併行する石垣溝の上には、現場打ちのコンクリート溝やV S 側溝が作られている。このことから現在の国道幅と、近世江戸時代の北国街道脇往還の幅がほぼ一緒であることが考えられる。

第3表 松代城下町(木町通り)における土地利用の変遷

No	和 暦	西 暦	中 木 町					紺屋町
			A・B区	C区	D区東側	D区西側	E区	
1	現 在	2004	商店	つたや・宅地	丸新・和泉屋	郵便局ほか	バス停・宅地	宅地
2	大正2年	1913	商店	商店	商店	郵便局・警察	商店	宅地
3	明治3年	1870	午札騒動					
4	明治初年	1868	町屋	界稲荷	米山弥右衛門	河原 均	町屋区画	町屋
5	?	?	町屋	御預役所	町屋	河原左京	岩崎五郎右エ門	町屋
6	嘉永年間	1848~1853	町屋	御預所	町屋	河原舍人	岩崎五郎太輔	町屋
7	弘化4年	1847	普光寺大地震					
8	?	?	御用所					
9	天保5~14年	1834~1843	町屋	□□□所	源治持(町屋)	河原舍人	岩崎主末	町屋
10	文政6年	1823	御預所会所					
11	文政3年	1820	河原舍人					
12	寛政12年	1800	市場火事					
13	寛政3~11年	1791~1799	町屋	安藤□□	金井善兵衛	河原舍人	岩崎□□	町屋
14	天明8年	1788	町屋	安藤友弥	金井□□	河原舍人	岩崎主末	町屋
15	天明8年	1788	河内屋火事					
16	天明4年	1784	町屋	安藤友弥	?	河原舍人	岩崎□□	町屋
17	?	?	安藤友弥					
18	享保8~明和2年	1723~1765	町屋	安藤友弥	金井久右衛門	河原惣兵衛	岩崎五郎右衛門	
19	寛延3年	1750	町屋	安藤友弥	金井市之丞	三沢右衛門	岩崎□右衛門	町屋
20	延享2年	1745	町屋	安藤友弥	金井市之丞	三沢万右衛門	岩崎四兵衛	町屋
21	寛保2年	1742	戌の大溝水					
22	元文4年	1739	元文4年の大火					
23	享保18年	1733	寛町火事					
24	享保10年?	1725?	?					
25	享保2年以後	1717以後	町屋	安藤彦七	金井一之丞	成沢勘□□	恩田喜助	町屋
26	享保4年	1719	亥の大溝水					
27	享保2年	1717	湯本火事・関口火事					
28	宝永年間?	1704~1710	町屋	安藤彦七	金井市之丞	成沢勘左衛門	恩田喜助	町屋
29	宝永4年	1707	町屋	安藤彦五兵衛	金井市之丞	成沢熱蔵	恩田喜徳	町屋
30	?	?	町屋	海野満之丞	菅沼弥惣右衛門	成沢勘左衛門	恩田頼母	町屋
31	元和8年	1622	町屋	侍屋敷	侍屋敷	侍屋敷	侍屋敷	侍屋敷

建物遺構には、町屋における蔵などの重量系建物や、侍屋敷の門?などがある。扇状地堆積物という調査地付近の地質上、軟弱地盤に加えて湧水位が高く、建物基礎の工法には苦心していたらしい。堅杭やぐり石を施し、

板材や丸太材を削木として井桁に組むなどの工法がみられた。松本城下町跡の発掘調査成果によると、16世紀後半は掘立柱建物が主流であり、17世紀前半には掘立柱建物が消滅し、礎石・布掘り礎石へ変化するという（竹内2000）。今回の発掘調査では、明確な16世紀代の遺構は未確認であり、17世紀代も建物基礎は不明であるが、松代においても同様な傾向がみられるものと考えられる。特に、西木町D5・6区にて検出した掘立柱建物遺構は、層位的に17世紀代に遡る可能性を秘めており、仮に門に関連する建物となる可能性も考えられる遺構である。

絵図から読みとることができる土地利用区分は、江戸時代においても若干変化していたらしい（第3表参照）。基本的に江戸時代の絵図は、町屋は戸別表記されておらず、侍屋敷のみ氏名が記載されている。これらと比較して調査地付近の土地利用の特徴を記すと、中木町は城下町形成当初から町屋であることがわかる。西木町は真田信之入府の頃から18世紀中頃まではすべて侍屋敷であり、嘉永年間には南東の一部が町屋に、北東が「御預所」（役所？）に、変化している。特に、現在の松代郵便局の辺りは、面積の大きな侍屋敷であり、1750（寛延3）年頃は三沢家、1820（文政3）年頃は河原家となっており、家老級の侍屋敷であったことが考えられる。紺屋町では、信之入府の頃は侍屋敷であるが、18世紀中頃には町屋に変化している。

第2節 水道関係の遺構

水道関係の遺構としては、管としての木樋・竹樋、分かれ枘・集水枘・桶、井戸などがあげられる。このうち、テレビニュースや新聞紙上で報道された、上水道施設と考えられる木樋はA6区にて地表下約1m付近から検出された。太さ約14cmの丸太材を、蓋となる部分として縦に割り裂き、身は内部を四角く削り抜いてから蓋を被せ釘で打ち付けたもので、分かれ枘に差し込んであった。分かれ枘にはさらに土管が嵌め込まれており、木樋から土管へと後世（おそらく明治年間）に補修されたものと考えられる。このような丸太削り抜きタイプの木樋は、他にD2区からも検出されている。またB7区からは太さ6cmの竹樋が検出されており、シュロをパッキンとして木製の継ぎ手で繋がれていた。木樋としては他に角形削り抜きタイプや組み合わせタイプがある。組み合わせタイプの木樋は地表面から浅く蓋がないものが多く、上水道ではなく排水機能が考えられる。上水か排水かの判断については、蓋の有無、組み合わせや削り抜きの種類、樋の方向と水の流れる方向、地表からの深さなどを勘案しなければならず、現段階では確定できるものは少ない。

- | | | | | |
|--------------|------|------|------|--------|
| ○ 木樋 削り抜きタイプ | 木蓋あり | 道路併行 | 深い | 上水機能？ |
| | | 道路直交 | 深い | 上水機能？ |
| 組み合わせタイプ | 石蓋あり | 道路直交 | 浅い | 排水機能？ |
| | | 蓋なし | 道路直交 | 浅い |
| ○ 竹樋 節目削り抜き | 継手接続 | 道路直交 | 浅い | 上水引込み？ |

一番の問題点は、時代・時期の特定がむずかしいことである。出土遺物が共存することほとんどなく、また大正年間から昭和20年代にかけて近代水道が松代町に敷設されるまで継続して補修しながら使用されていたために、層位的にも判別することがむずかしい。

井戸の種類と構造としては、湧水レベルまで掘り下げる掘り井戸が1基、A4区にて検出されている。上部は破壊されていたため井戸枠の構造は不明であるが、約1.8mの深さに底板のない木樋が埋め込まれていた。江戸城下町では、享保年間以後に竹などの管を打ち込んで水を湧き出させる掘抜井戸や、上水木樋から呼樋にて水を引き込む上水井戸が確認されているが、今回の発掘調査では検出されていない。松代城下町は地形上、井戸とし